第五章　旅の女

一

リーザの横死とマリヤの慘殺は、シャートフに壓倒的な印象を與へた。わたしは前にも言つた通り、その朝ちよつと彼に會つたが、まるで正氣を失つてゐるやうに見えた。しかし、それでもゆうべ九時頃に（つまり火事の三時間まへに）、マリヤを訪問した事を話した。その朝、彼は死體を見に行つたが、わたしの知つてゐる限りでは、その朝はどこでも何の申立もしなかつた筈である。が、その日も暮方になつて、彼の心に恐ろしい嵐が吹き起つた。そして……そして、わたしはきつぱり斷言する事が出來る――たそがれ時のある瞬間には彼はすぐにも立上つて、外へ出かけ、そして何もかも知らせてしまはう、と思つたほどである。何もかもとは、一體なんだらう、それは彼自身のみ知つた事である。しかし、勿論なんの結果もを得ることが出來ないで、かへつて自分で自分を賣る事になるに相違ない。なぜと言つて、今度の兇行を暴露しようにも、何の證據をも握つてゐないからである。たゞ彼の心中には、この事件に關する、漠とした推測があるばかりなのだ。尤も、この推測は彼自身に取つて、十分な確信にも均しいけれど……しかし、彼は自分の身の破滅など、敢て恐れはしなかつた。たゞどうかして、あの『惡黨どもを踏潰す』ことさへ出來ればいゝのだ（これは彼自身の言つた言葉である）。

ピョートルはかうした彼の心的發作を、ほぼ正確に見拔いてゐた。で、新たに立てた恐ろしい計畫の實行を、明日まで延したのは、彼として甚しい冒險を試みた譯なのである、それにはいつもの自負心と、あの『けちな有象無象』に對する輕侮――殊にシャートフに對する輕侮の念が、原因となつてゐたのである。彼は前から、シャートフをば、『泣き蟲の馬鹿』と言つて、輕蔑してゐた（これはずつと以前、外國にゐる時分からの言草である）。で、こんな單純な男を操縱するのは、易々たる事だと固く信じ切つてゐた。つまり、けふ一日だけ彼の見張りをしてゐて、もし危險な樣子が見えたら、早速それを未然に防がう、といふのであつた。ところが、實際ある一つの思ひがけない、まるで想像もしてゐなかつた出來事が、暫くあの『惡黨ども』を助ける事になつたのである……

晩の七時頃それはちやうど仲間の者がエルケリの所へ集つて、ピョートルが來るのを待兼ねながら、憤慨したり、昂奮したりしてゐる時であつた）、シャートフは頭痛の上に、輕い惡寒（をかん）を感じながら、暗闇の中を蠟燭もなく、寢臺の上に長くなつて倒れてゐた。彼は疑惑に惱まされつゝ幾度か憤然と決心しかけたが、どうしてもいよ〳〵といふ腹が据らなかつた。結局、何の結果も見ずに終るのだらうと感じると、我とわが身が呪はしくなるのであつた。次第に彼はうつら〳〵と、忘我の境に落ちて行つた。と、何かしら惡夢のやうなものに襲はれた。全身を寢臺にぐる〳〵縛りつけられて、身動きも出來ないでゐると、垣根を、門を、戸を、キリーロフの住つて居る離れを叩く恐ろしい音が、家も慄へるばかり響き渡るのであつた。それとともに、どこか遠くの方で

耳に覺えのある、彼に取つて惱ましい人聲が、さも悶れげに彼の名を呼ぶのであつた。彼はふと目を醒して、寢床の上に起直つた。驚いた事には、門を叩く音は依然として續いてゐたが、それは夢に聞えたやうな烈しい音ではなかつたけれど、しふねく頻繁に響いて來る。そして、奇妙な『惱ましい』聲は、決して悶れつぽいどころでなく、かへつてじれつたい、いら立たしげな調子で、絶えず下の門の邊で聞えてゐた。そして、いま一人いくぶん控へ目な、普通の人聲も交つてゐた。彼は飛上つて、窓の通風口を開き、そこから首を突き出した。

「そこにゐるのは誰だ？」驚愕の餘り全身を石のやうにしながら、彼はかう聲をかけた。

「もしあなたがシャートフさんでしたら、」鋭いしつかりした聲で、下から答へた。「どうか男らしく、きつぱりと言つて下さい――わたしを家へ入れて下さいますか、どうです？」

果してさうである。彼はその聲を聞分けた。

「マリイ！……お前なんだね？」

「わたしです、マリヤ・シャートヴです。全くのところ、わたしはもうこのうへ一分間も、馬車を待たしとく譯に參りませんの。」

「今すぐ……僕ちよつと蠟燭を……」とシャートフは弱々しく叫んだ。それから、燐寸を捜しに飛んで行つた。かういふ場合の常として、燐寸は容易に見つからなかつた。燭臺をぱたりと床へ取落した拍子に、下の方でまたじれつたさうな聲が聞えたので、彼は何もかも打つちやらかして、急な階段をまつしぐらに馳け下り、木戸を開けに行つた。

「濟みませんが、ちよつとこの鞄を持つてゝ下さいな、わたしこの間抜野郎の片をつけつちまひますから。」マリヤ・シャートヴは、いきなり下からかう聲をかけて、青銅の鋲を打つたドレスデン製の、かなり輕い安物のズックの手提鞄を彼に押附けると、自分はさもいら〳〵した樣子で、馭者に食つてかゝつた。

「ねえ、重ねて申しますが、あんたはちと慾張つてるんですよ。あんたがこゝの泥だらけな町を、まる一時間あちこち引つ張り廻したからつて、それはあんたが自分で悪いんぢやありませんか。だつて、この馬鹿げた通りと、この間の抜けた家がどこにあるか、あんたが知らなかつたんだものね。さあ、どうか約束の三十哥をお取り下さい。そして、もうこれ以上もらへないつて事を、ご承知ねがひます。」

「何ですね、奥さん、あんたが自分で、ヴズネセンスキイと言つたんぢやありませんか。こゝはボゴヤーヴレンスカヤですぜ。ヴズネセンスキイ横町は、こゝからずつとあつちの方でさあ。可哀さうに、この去勢馬を汗だらけにしちやつてさ。」

「ヴズネセンスカヤだつてボゴヤーヴレンスカヤだつて、そんなばか〳〵しい名前は、みんなお前さんの方が、わたしよりよく知つてる筈ぢやないか。お前さんはこゝに住つてる人だものね。それに、お前さんの言ふ事は間違つてるよ。わたしがまづ一番に、フィリッポフの持家だと言つたら、お前さんは知つてると言つたぢやないか。とにかく、お前さんは明日にも治平裁判所へ行つて、わたしを訴へても構やしないが、今夜はお願だから、これで放免しておくれな。」

「さ、さ、もう五哥あげるよ。」シャートフは大急ぎで、衣嚢から五哥玉を掴み出し、それを馭者に突き出した。

「後生だから、そんな差出た事をしないで頂戴！」とマダム・シャートヴは猛り出したが、馭者はもう「去勢馬」を叱して、行つてしまつた。シャートフは女の手を取つて、門の中へ連れ込んだ。

「早く、マリヤ、早く……そんな事は下らない話だ、——そして——まあ、お前はずぶ濡れぢやないか。靜かに、こゝから上らなきやならないんだよ。どうも灯がないのが殘念だ——急な梯子段だから、しつかり摑まつておいでよ、しつかり。さあ、これが僕の巣だ。ご免よ、あかりもつけないで……今すぐ！」

彼は燭臺を拾ひ上げたが、燐寸は長いこと見つからなかつた。シャートヴは無言のまゝ見動きもしないで、部屋の眞中に立つて待つてゐた。

「有難い、やつとの事で！」部屋を灯りで照らし出しながら、彼は嬉しさうにかう叫んだ。

マリヤはちらと室内を見廻した。

「酷い暮しをしてるとは聞いてゐたけれど、でもこれほどとは思はなかつた。」と彼女は氣むづかしげに呟いて、寢臺の方へ歩き出した。「あゝ疲れちやつた！」彼女は力なげな樣子で、ごつごつした寢床に腰を下ろした。「どうか鞄を下に置いて、あなたも椅子にお掛けなさいな。尤も、どうなとご勝手に。何だか、あなたが目觸りになつて仕方がないんですの。わたしがあなたの所へ來たのは、何か仕事を見附ける間、ほんのちよつとの積りなんですの。だつて、こゝの樣子つたら少しも知らないし、それに、お金も持つてないんですからね。けれど、もしご迷惑なやうでしたら、やはりお願ひですから、今すぐこの場でさう言つて下さい。それは潔白な人間として、是非しなければならない事だわ。それでも、明日になつたら何か賣つて、宿を取る事も出來ますが、しかしその宿屋へは、あなたにご案内ねがはなけりやなりませんわ……あゝ、だけどわたし疲れちやつた！」

シャートフは全身をがた〳〵慄はした。

「そんな事はいらないよ、マリイ、宿屋なんぞ要りやしない！　宿屋なんかどうするのだ？一體なんのためだ？」

彼は祈るやうに手を合した。

「まあ、假りに宿屋へ行かずに濟むとしても、やはり事情を明らかにして置かなきやなりませんわ。ねえ、シャートフさん、憶えてらつしやるでせう。わたしとあなたとは二週間と幾日かの間、ジュネーヴで結婚生活をしました。ところが、別にかうといふ諍ひもなく、夫婦別れをして了つてから、もうこれで三年ばかりになります。けれど、わたしが歸つて來たのは、以前のばかばかしい關係を復活させるためだらう、なんかつて考へを起さないで下さい。わたしはたゞ仕事を捜しに歸つて來たのです。この町へ眞つすぐにやつて來たのも、何だつて同じ事だからですの。わたしは何も後悔して、あやまりに來た譯ぢやありません。後生だから、どうかそんなばか〳〵

しい事を考へないで下さい。」

「何をマリイ！　そんなこと、決してそんな事！」とシャートフは譯の分らぬ事を呟いた。

「もしさうなら、もしさういふ事さへ分るほど開けてゐらつしやるなら、もう一つ附け足さして頂きます。今わたしがいきなりあなたの所へ來て、あなたの住まひへ入つて來たのは、ほかにも譯がありますけれど、わたしいつもあなたの事を、『あの人は決して人非人ぢやない。事に依つたら、ほかの惡黨どもより、ずつと立派な人かも知れない』とかう信じてゐたからですの。」

彼女の目はぎら〳〵と光つた。察するところ、彼女はどこかの『惡黨ども』のために、いろいろ辛い目に會つたに相違ない。

「どうかお願ひですから、わたしの言ふ事を信じて下さい。今わたしがあなたをいゝ人だと言つたのは、決して冷かしたのぢやありません。わたしは一さい飾氣なしに、ざつくばらんに言つたんですの。それに飾氣なんて大嫌ひですからね。だけど、こんな事ばか〳〵しい。わたしね、あなただけは人をうるさがらせないだけの智慧があるだらう、とかういつも思つてましたの……あゝ、ずゐぶん疲れた！」

彼女は疲れ果てた惱ましげな目つきで、ぢいつと男を見つめるのであつた。シャートフは、五歩ばかり離れた部屋のこちら側に立つて、何やら並々ならぬ輝きを顏に漲らせながら、臆病さうではあるけれど、何となく生れ變つた人のやうな風つきで、彼女の言葉に耳を傾けてゐた。この頑固な、がさ〳〵した、いつも逆毛立てゝゐるやうな男が、急にすつかり柔らいでしまつて、は

ればれしくなつて來たのである。彼の心の中には、何かしら容易ならぬ、まるで思ひがけないある物の戰慄が感じられた。別離の三年、ふみ躙られた結婚生活の三年も、彼の心から何一つ追ひ出すことが出來なかつた。彼はこの三年間、毎日のやうに彼女の事を――嘗て自分に『愛する』といふ一語を囁いた貴い存在の事を、空想し續けてゐたかも知れないのだ。わたしはシャートフの人物を知つてゐたから、正確にかう斷言できる――彼は、誰にもせよほかの女が、自分に愛すると言つてくれるやうな事があらうとは、夢にも考へられなかつた。彼は滑稽なほど童貞心、羞恥心が強く、自分を恐ろしく醜い不具者のやうに思つてゐた。そして、自分の容貌や性質を心から憎惡して、自分は市場から市場へ引廻して、見世物にしてもいゝやうな怪物だと、心ひそかに思ひ込んでゐた。かういふ譯で、彼は潔白といふ事を何よりも重く考へて、狂信に近いほど自分の信念に沒頭し、常に陰鬱で傲慢で、腹立易く無口だつた。

ところが、二週間のあひだ自分を愛してくれた（彼は常に、常にこれを信じてゐた）この唯一の女性が、――その過失をはつきり冷靜に理解してゐる癖に、それでも彼自身より遙かに勝れたものと信じてゐる女性が、――彼として何事も綺麗に赦すことの出來る女性が（それはもう問題にならぬくらゐ明瞭な事だつた。いや、それより寧ろ反對に、自分の方こそすべての點で、彼女に罪を犯してゐる、とさへ彼は考へてゐたのである）、この女性が、このマリヤ・シャートヴが、突然ふたたび自分の家に坐つてゐる、自分の前に坐つてゐるではないか……これは殆ど理解することさへ不可能である！　彼はすつかり仰天してしまつた。この出來事には、量り知れぬ恐ろし

さと、同時に量り知れぬ幸福が含まれてゐた。彼はどうしても正氣に返れなかつた。いな、返りたくなかつた、寧ろ、それを恐れたくらゐである。それはまるで夢だつた。

しかし、彼女があの惱ましげな目つきで彼を見つめた時、自分の限りなく愛してゐるこの女性が、苦しみ悶えてゐるばかりか、事に依つたら、辱しめられてゐるかも知れないといふ事を、咄嗟の間に悟つたのである。彼の胸は萎えしびれた。彼は痛々しげに女の顔に見入つた。この疲れたやうな顔はもう疾くに、若々しい青春の輝きを失つてゐた。尤も、彼女は今でも相變らず美しかつた。彼の目から見ると、前と少しも變りのない美人だつた。（實際、彼女は今年まだ二十五で、かなりしつかりした體格の上に、脊も中脊以上で——シャートフより高かつた——髪は暗色で豐かに波打ち、顔は卵なりをして蒼白く、大きな目は黑みがゝつて、熱病やみのやうな光りを放つてゐた。）けれど、以前かれの見馴れた、輕はずみで、無邪氣な、率直で、精力的なところは失くなつて、氣むづかしさうな癇性らしいところと、幻滅的な心持と、無恥とでも言ひたいやうな感情が、それに代つてゐた。けれども、彼女はまだこの新しい心持に馴れないで、自分でもそれを重荷のやうに感じてゐるらしかつた。が、何より氣がゝりなのは、彼女が病んでゐる事である。それは彼も明らかに見て取つた。彼は、女に烈しい恐怖を感じてゐるにも拘らず、不意にづか〳〵と傍へ寄つて、その兩手を取つた。

「マリイ……あのね……お前はたいへん疲れてるやうだね、後生だから、怒らないでおくれ……せめてまあ、茶でも飲むのを承知してくれるといゝんだけれど、え？　茶はたいへん元氣をつ

けるものだがね、え？　本當に承知してくれるといゝんだがなあ！……」

「そんなこと、承知してくれるも何もありやしないわ、むろん承知してよ。まあ、あんたはやつぱりもとと同じやうな坊つちやんね。あるのなら出して頂戴。本當にあんたの所は何て狹いんでせう！　何てまあ寒いんでせう！」

「あゝ、僕が今すぐ薪を、薪を……薪は僕のとこにあるんだよ！」彼はあわてゝ、そは〳〵し始めた。「薪は……いや、しかし……なに、お茶も今すぐ出來る」自暴自棄的な決心の色を浮かべて、片手を振りながら、彼は帽子を取つた。

「まあ、あんたどこへ行くの？　ぢや、うちにお茶がないんですね？」

「出來る、出來る、今にすつかり出來る……僕は……」と彼は棚から拳銃を下ろした。「僕いまこの拳銃を賣るか、それとも質に置くかするんだ……」

「何てばか〳〵しい、それに、長くかゝつて堪りやしないわ！　さあ、あんたのとこに何もないのなら、わたしのお金を持つてらつしやい。こゝに十哥玉が八つあるらしいわ。それでみんなよ。あんたのとこは、まるで癲狂院みたいね。」

「いらない、お前の金なんそは要らない。僕いますぐ、ほんの一分間で……拳銃なんかなくても出來るよ……」

彼はいきなりキリーロフの處へ飛んで行つた。それは、多分、ピョートルとリプーチンがキリーロフを訪問する、二時間ばかり前の事らしい。シャートフとキリーロフとは、同じ地内に暮し

なから、殆ど互に顔を合はす事がなかつた。途中で出あつても、會釋一つしなければ、口を一つ利かうともしなかつた。彼らは『亞米利加で餘り長く一緒に臥てゐた』のである。

「キリーロフ君、君のとこにはいつもお茶があるね。今お茶と湯沸があるかしら？」

キリーロフは、部屋の中をこと〳〵歩き廻つてゐたが（たいてい一晩ぢう、隅から隅へと歩き續けるのが常であつた）、不意に立止つてぢつと穴の明くほど――尤も、大して驚いた樣子もなく――駈け込んで來るシャートフを打守つた。

「茶はある、砂糖もある、湯沸もある。しかし、湯沸は要らないよ、お茶が熱いから。まあ、腰を下して飲んだらいゝぢやないか。」

「キリーロフ君、僕らは亞米利加で一緒に長いこと臥たつけねえ……僕のとこへ家内がやつて來たんだ……僕は……お茶をくれ給へ……湯沸も要るんだ。」

「細君が來たとすれば、そりや湯沸も要るね。しかし湯沸は後だ。僕のとこには二つあるから。まあ、いま卓の上から急須を取つて行き給へ。熱いんだ、思ひ切り熱いんだ。みんな持つて行き給へ。砂糖も持つて行き給へ、そつくりみんな。麵麭……麵麭は澤山ある。そつくり、みんな持つて行き給へ。犢肉もあるよ。金も一留。」

「貸してくれ給へ、君、明日は返すから！　あゝ、キリーロフ君！」

「それはあの瑞西で何した細君かね？　それはいゝ。それから、君があんなに駈込んだのも、あれもやはりいゝよ。」

「キリーロフ」とシャートフは叫んだ、急須を肘で抑へて、兩手に砂糖と麵麭を掴みながら。

「キリーロフ！　もし……もし君があの恐ろしい空想を抛つ事が出來たら……あの無神論の惡夢を捨てる事が出來たら……あゝ、それこそ君はどんなに美しい人間になるか、分らないんだがな あ、キリーロフ君！」

「君は瑞西事件の後でも、やはり細君を愛してるやうだね。瑞西事件の後までとすれば、それは本當にいゝ事だよ。茶がいつたらまた來たまへ。夜つぴて來たつて構はないよ、僕はまるで寢ないんだから。湯沸は用意しとくよ。この一留を持つて行き給へ、さあ。もう細君の處へ行つてやるがいゝよ。僕はこゝにゐて、君と細君の事を考へてるから。」

マリヤ・シャートワは、事が迅速に運んだのに滿足らしく、まるで貪るやうに茶を飲みにかゝつたが、しかし湯沸など取りに行く必要はなかつた。彼女は茶碗に半分ほど飲んだばかり、麵麭も小さな切れを一つ喰べただけである。犢肉などは氣むづかしい、いら立たしけな樣子で斥けてしまつた。

「お前は病氣なんだね、マリイ。お前の樣子はいかにも病的だものね……」臆病げに傍でかれこれ世話を燒きながら、シャートフはおづ〳〵とかう言つた。

「むろん病氣なんですよ。どうか坐つて頂戴な。一體あんたはどこからお茶を取つて來たの、もしあんたの處になかつたとすれば？」

シャートフはキリーロフの事を、ちよつと搔い摘んで話した。彼女もこの男の事は、何かと耳

に挾んでゐた。

「知つてますわ。氣ちがひだつてんでせう。有難う、もう澤山。馬鹿な人間なら、世間に珍しくもないわ。で、あんたは亞米利加へいらしたの？　何でも、わたしに手紙を下すつたさうね。」

「あゝ僕は……巴里へ向けて出したのだ。」

「もう澤山、どうかほかの話をして頂戴な。あんたは心からのスラヴ主義者？」

「僕は……僕は別にさういふ譯ぢやない……露西亞人になる事が出來ないから、それでスラヴ主義になつたのさ。」場所がらに筴らない、無理な警句を言つた人のやうに、苦しさうにひん曲つた薄笑ひを浮かべた。

「ぢや、あんたは露西亞人でないの？」

「あゝ、露西亞人ぢやない。」

「ふん、そんな事みんな馬鹿げてるわ。さ、お坐んなさいな。わたし賴んでるぢやないの。何だつてあんたは始終あつちへ行つたり、こつちへ行つたりするの？　わたしが譫ごとを言つてると思つて？　だけど、本當に譫ごとをいひ出すかも知れないわ。あんたは、二人きりでこの家に住んでると言つたわね？」

「二人きり……下に……」

「しかも、こんな賢い人ばかり。下に何ですつて？　あんた下にと言ひましたね？」

「いや、何でもない。」

「何が何でもないの？　わたし知りたいわ。」

「僕が言はうと思つたのはね、いま僕らはこの家に二人きりしかゐないが、もとは下にレビャドキンが住んでた……といふ事なんだ。」

「それはゆうべ殺されたあの女？」彼女は突然おどり上つた。「わたし聞いたわ。つくとすぐ聞いたわ。この町で火事があつたんですつてね？」

「あゝ、マリイ、さうだよ。事に依つたら、僕は今この瞬間に、あの惡黨どもを赦すといふ事に依つて、恐ろしい卑劣な眞似をしてるかも知れないのだ……」彼は出し拔けに立上つて、前後を忘れたやうに兩手を振上げながら、部屋の中を歩き廻り始めた。

けれど、マリヤは彼の言葉がはつきり分らなかつた。彼女はうつかり彼の返事を聞いてゐた。自分の方からいろんな事を訊ねながら、ろく〳〵耳を借してゐなかつたのである。

「あんな方は、いろ〳〵結構な事をしてらつしやるのね。あゝ、何もかも卑劣な事ばかりだ！　誰も彼も卑劣なやつ等ばかりだ！　さあ、いゝ加減にしてお坐んなさいよう、お願してるんぢやありませんか。あゝ、本當にあんたにはじり〳〵させられちやうわ！」

かう言つて彼女はぐつたりと、枕に首を埋めるのであつた。

「マリイ、もうしないよ……お前ちよつと横になつたらどうだね、マリイ？」

彼女は返事をしないで、力なげに目を閉ぢた。その蒼白い顏は、まるで死人のやうであつた。

彼女は、殆ど見てる間に寢入つてしまつた。シャートフは邊りを見廻して、蠟燭の火を直し、も

う一ど女の顔を心配さうに見やると、兩手をかたく胸の上に組みながら、そつと爪立で廊下へ出た。梯子段の上で、顔を隅つこの壁に押當てたまゝ、十分ばかりぢつと身動きもせず立盡してゐた。彼はもつと長く、さうしてゐたかも知れなかつたが、不意に下の方から、靜かな用心ぶかい足音が聞えた。誰か登つて來る樣子である。シャートフは木戸を閉忘れたのを思ひ出した。

「そこにゐるのは誰だ?」と彼は小聲で訊ねた。

未知の客は悠々と急がずに、返事もしないで上つて來た。すつかり登り切つたとき、彼は立止つた。まつ暗闇なので、何者とも見分けがつかなかつた。とつぜん用心ぶかい質問が聞えた。

「イヴン・シャートフですか?」

シャートフは名を名乘つたが、すぐに相手を押止めるやうに、手をさし伸べた。と、男はいきなり彼の兩手を摑んだ。シャートフは、まるで恐ろしい毒蟲にでも觸つたやうに、思はず身を慄はせた。

「こゝに立つてゐ給へ。」と彼は早口に囁いた。「入つちやいけない。僕はいま君を通す譯に行かないんだ。家内が歸つて來たんだから。僕すぐに蠟燭を持つて來るよ。」

彼が蠟燭を持つて引返して見ると、誰やらまだ生若い將校が立つてゐた。名前は知らないけれど、どこかで見た事があるやうな氣がする。

「エルケリ。」とこちらは名乘を上げた。「ギルギンスキイのところで會つた筈です。」

「憶えてる。君はぢつと腰を掛けて、何か書いてたつけ。ねえ、」不意に前後を忘れたやうに、

相手の方へつめ寄つたが、聲は依然として囁くやうな調子で、シャートフは熱くなつてかう言つた。「君はいま僕の手を摑みながら、手で合圖をしたね。しかし、覺えてゐてくれ給へ、僕はそんな合圖なんか、弊履の如く棄てる事も出來るんだからね! 僕はそんなものを認めやしない……僕は厭だ……僕は今すぐにも君をこの梯子段から、突きおとす事も出來るんだよ。君はそれを承知してゐるかね?……」

「いや、僕はそんなこと少しも知りません。それに、どうしてあなたがそんなに腹を立てられるのか、一切わけが分らないです。」少しも毒氣のない、殆ど子供らしい調子で、客は答へた。「僕はちよつとお傳へしたい事があるので、一刻も時間を無駄にしまいと思つて、そのためにわざわざやつて來たのです。ほかぢやありませんが、あなたはご自分の所有に屬してゐない、印刷機械をもつてをられる筈です。そして、ご自分でご承知の通り、それに就て報告の義務を帶びてゐられるのです。僕は、明日の午後正七時に、その機械をリプーチンに引渡してしまふやう、あなたに要求しろと命ぜられたのです。なほそのほかに、今後あなたはもう何らの要求をも受けられない、とかう傳へるやうに命じられました。」

「もう何一つ?」

「えゝ、決して。あなたの請求は會の方で容れられて、あなたは永久に除名されたのです。この事は間違なく、あなたに傳へるやうにとの命令でした。」

「誰が命令したのです?」

「それは僕に合圖を敎へてくれた人達です。」
「君は外國から來た人ですか？」
「それは……それはあなたに取つて、なんの關係もない事だらうと、僕は考へますがね。」
「え〻、ばか〳〵しい！　ときに、君はそんな命令を受けてゐながら、どうして早くやつて來なかつたんだね？」
「僕はある訓令に從つて行動してゐたし、それに、一人きりでなかつたものですから。」
「分つてます。君が一人きりでない事は、分つてゐます。え〻、ばか〳〵しい！　一體どういふ譯で、リプーチン自身來なかつたんだらう？」
「さういふ譯で、僕は明晩正六時に迎へに來ますから、一緒にあすこへ歩いて行きませう。われわれ三人のほかには誰も來やしません。」
「ゼルホーゼンスキイは來るかね？」
「いや、あの人は來ません。ゼルホーゼンスキイは明日の朝十一時に、この町を出發する事になつてゐます。」
「さうだらうと思つた。」とシャートフは氣ちがひのやうにかう叫びながら、拳を固めて我とわが股を打つた。「逃げやがつた、惡黨め！」
彼は昂奮の體で考へ込んだ。エルケリはぢつとその樣子を見つめながら、無言のまゝ控へてゐた。

「君たちはどうして受取る積りなんだね？　あんなものを一遍に手で提げて、持つてく譯に行かないぢやないか。」
「そんな事をする必要はないです。僕らはあなたに場所を敎へて貰つて、本當にそこへ埋めてあるかどうか、確めさへすればいゝんですから。僕らはその場所がどの方面にあるか知つてるだけで、場所その物は知らないのです。あなたはその場所を誰かに敎へた事がありますか？」
シャートフはぢつと彼を見つめてゐた。
「君は、君はそんな小僧つ子のくせに――そんな馬鹿な小僧つ子のくせに、やはり羊か何ぞのやうに、あんな仕事に頭を突込んでしまつたのかね！　あゝ、やつ等はつまり、かういふ風な甘い汁が吸ひたいんだ！　さあ、行き給へ！　あゝ！　あの惡黨め、君らをみんな騙して置いて、そのまゝどろんをきめやがつたんだ。」
エルケリは明るい落ちついた目で、相手を眺めてゐたが、なんの事か分らないらしかつた。
「ゼルホーゼンスキイが逃げた、ゼルホーゼンスキイが！」シャートフは物凄く齒を鳴らした。
「いや、あの人はまだこゝにゐます、どこへも行きやしませんよ。あの人は明日たつのです。」
物やはらかな諭すやうな調子で、エルケリは口を挾んだ。「僕は特にあの人に立會を賴んだのです。僕の受取つた訓令は、全部あの人から出たもんですからね（と彼は無經驗な青年の常として何もかもぺら〳〵言つてしまつた。）けれど殘念ながら、あの人は出發を口實として、承知してくれませんでした。それに、全く何やら馬鹿に急いでるのです。」

シャートフはもう一ど憫むやうに、この正直者に視線を投げたが、急に『ふん憫んでやる價値があるかい』とでも考へたやうに、片手を振つた。

「よろしい行きませう。」とつぜん彼は斷ち切るやうにかう言つた。「だから、もう行つてくれ給へ、さあ早く！」

「ぢや、僕は正六時に來ますよ。」とエルケリは丁寧に會釋して、悠々と梯子段を下りて行つた。

「ばか！」こちらへ切れないでシャートフは、梯子段の上から怒鳴つた。

「何ですか？」こちらは下から聞き返した。

「何でもない、行き給へ。」

「僕は何か言はれたのかと思ひましたよ。」

二

エルケリは、肝腎な統治者としての分別こそなかつたけれど、こせ〳〵した被統治者としての分別は、狡猾と言つていゝくらゐ、かなり多分に持合した『馬鹿者』だつた。狂信者（ファナチック）か赤ん坊のやうに、『共同の事業』――と言つても、その實ピョートルに信服し切つた彼は、今もピョートルの命令に從つて行動したのである。この命令はさつき仲間の者が集つて、色々あすの手筈や役割を決めた時、ピョートルが彼に授けたのである。ピョートルはあの間に彼を小わきへ呼んで、十

分ばかり話をしたのち、彼に使者の役目を授けてしまつたのだ。かういふ分別の缺けた、他人の意志に隷屬する事ばかり望んでゐる、淺薄な人間に取つては、實行方面の仕事が本性の要求だつた――むろん『共同の事業』のためとか、『偉大な事業』のためとかといふ口實が、いつでも附物ではあるけれど……しかし、それさへどうでも構はないのだ。と言ふのは、エルケリのやうな小狂信者（ファナチック）は、理想に對する奉仕といふ事を、自分が心から信じきつて、理想の代辯者とする人物に結び附けなければ、どうしても了解できないからである。

感じ易くて、善良で、優しいエルケリは、事に依つたら、シャートフ目がけて飛びかゝつた仲間の中でも、一ばん冷酷な下手人だつたかも知れない。自分では何の私怨もない癖に、目一つぽちりともさせないで、慘殺の場所に立會つたに相違ない。例へて言はうなら、彼は使命を實行するに當つて、目下のシャートフの事情をよく見て來るやうに、といふ命令をも授けられてゐたが、シャートフが階段の上で彼に應對しながら、つい夢中になつて、自分でもそれと氣がつかず、妻が歸つて來たと口を辷らした時も、エルケリは、この妻が歸つて來たといふ事實は、自分らの計畫遂行に重大な意味をもつてるな、といふ考へが、電光のやうに腦裡に閃めいたにも拘らず、少しも先を聞きたさうな樣子を見せないだけの、本能的な狡智を持つてゐたのである。

全くその通りであつた。この出來ごと一つが『惡黨ども』を、シャートフの決心から救つたと同時に、彼を『片附ける』助けとなつたのである。第一に、この出來事はシャートフを昂奮させ、心の軌道から叩き出してしまつて、いつもの明敏な透察力と、愼重な態度を奪ひ取つたのである。

自己の安全などといふ考へは、ぜん〳〵別な事柄に充されてゐる彼の頭に、浮かんで來よう筈がなかつた。それどころか、明日ゼルホーゼンスキイが逃げ出すといふ事を、彼は一も二もなく本當にしてしまつた。この話は餘りにぴつたりと、彼の想像に符合するからである。自分の部屋へ歸つて來ると、彼は再び隅つこに腰を下ろして、膝に兩肘を突きながら、手で顏を蔽うた。苦しい想念が彼を惱ますのであつた……。

やがて彼は再び首を上げて、そつと爪先で立上ると、靜かに妻の顏を覗きに行つた。

『あゝ、どうしよう！　明日の朝は熱を起すに相違ない、いや、ことに依つたら、もう起つてるかも知れん！　むろん風邪を引いたのだ。こんな恐ろしい氣候に馴れてないし、それに三等の汽車旅、あらし、雨……おまけに、こんな冷たい外套一つで、別に暖い著物一枚ないんだ……こんな場合に打つちやらかすなんて、たよりのない境遇に捨てゝ置くなんて……そして、この鞄はどうだらう、何だか小つぽけな輕さうな鞄で、十斤ばかりしか重みがなささうだ！　可哀さうに、何といふ寞れ方だらう。ずゐぶん苦勞したんだらうなあ！　あれは誇の强い女だから、それで口に出して訴へないのだ。しかし、あの癇の强いことはどうだ、あの癇の强い事は！　何しろこの病氣だからなあ。どんな天使（エンゼル）だつて、病氣に罹れば癇が强くなるさ。あの額はきつと乾き切つて火のやうに熱い事だらう。そして、あの目の下の暗い事……しかし、あの卵なりの顏の美しいことはどうだ。そして、あの髮の房々してること、實に……』

彼は急いで目を轉じた。彼はこの女性の中に、他人の扶助を要する、疲れ惱む不幸な人間といふよりほかに、何か別な物を見出しはしないか、とかう考へただけでも、ぎよつとしたかのやうに、慌てて眼をそらした。

『一體こんな場合にどんな希望があるものか！　あゝ、俺は何といふ下司な、なんといふ陋劣な人間だらう！』

彼は再び元の片隅へ引込んで、腰をおろすと、兩手で顏を隱してしまつた。そして、再び空想に耽りながら、さま〴〵な事を思ひ起すのであつた……すると、またしても同じ希望が頭を掠めた。

『あゝ、疲れちやつた、あゝ疲れちやつた！』といふ妻の呻きが思ひおこされた。それは弱々しい、引つち切れたやうな聲であつた。『あゝ！　今あれを打つちやつてしまつたらどうだらう。あれは八十哥（カペイカ）しか持つてゐないのだ。古い小つぽけな金入れを突き出したつけ！　仕事を捜しにやつて來たつて――ふん、あれに仕事の方なんか分つて堪るものか。あの連中に露西亞の事なんか何が分るものか。あんな連中は、まるで罪のない子供みたいなものだ。あの連中のする事は、みんな自分で考へ出した空想なんだ。可哀さうに、あれもこゝへ來て見て、どうして本當の露西亞は、外國で空想したのと違ふのだらうと思つて、腹を立てゝるのだ！　何といふ不幸な人たちだらう、何といふ罪のない人たちだらう！……しかし、本當にこゝは寒いなあ……』

彼は妻が寒さを訴へた事や、自分が煖爐を焚くと約束した事を、思ひ出した。

『薪は彼處にあるから、持つて來る事は出來るが、たゞ起さないやうにしなければ……だが、大

丈夫だ。ところで、犢肉の事はどうしたもんだらう？　目を醒ましたら、喰べたいといふかも知れないからなあ……が、まあそれは後でいゝ。キリーロフは一晩ぢう寢ないんだから……何か掛けてやるといゝなあ。ぐつすり寢入つてるけれど、きつと寒いに違ひない。あゝ、寒さうだなあ！』

彼はもう一ど妻の樣子を見に行つた。と、著物が少しまくれて、右の足が半分ばかり、膝の邊まで露はになつてゐた。彼は殆ど慴えたやうに、つと顏をそむけた。そして、自分の厚い外套を脫いで、古いフロック一枚になると、なるべくその方へ目を向けないやうにしながら、剝出しになつた處を隱してしまつた。

薪を焚き附けたり、爪立で歩き廻つたり、寢てゐる妻の樣子を見たり、部屋の隅で空想に耽つたり、また寢てゐる妻の樣子を見たりするのに、だいぶ時間が潰れた。かうして、二三時間たつてしまつた。この間にキリーロフの所へ、ゼルホーゼンスキイとリプーチンがやつて來たのである。やがて彼も隅の方で、うと〳〵眠りに落ちてしまつた。不意に女の呻聲が聞えた。マリヤは目を醒して彼を呼んだ。彼はまるで罪人のやうに跳り上つた。

「マリイ！　僕はついうと〳〵しかけたよ……あゝ、マリイ、僕は何て陋劣な人間だらう！」

彼女は自分がとこにゐるか分らないやうに、びつくりして邊りを見廻しながら、起きあがつた。と、急に憤怒の餘り跳り上つた。

「わたしあんたの寢床を占領してたのね。わたしは疲れちやつて、つい夢中で寢てしまつたんだ。まあ、どうしてあんたは起してくれなかつたんです？　わたしがあんたの厄介になるつもりだなどと、よくもそんな失禮な事が考へられたわね？」

「どうして僕が起せるものか、マリイ？」

「起せますとも。起さなきやならなかつたんですよ！　もうほかにあんたの寢る處もないのに、わたしあんたの寢床を占領してたんぢやありませんか。あんたとしては、わたしを後めたい立場に落しちや、ならなかつた筈なんです。それとも、わたしがあんたのお情にあづかりに來た、とでも思つてるんですか？　さあ、今すぐご自分の寢床に入つて下さい。わたしは隅つこの方へ椅子を並べて寢ますから……」

「マリイ、そんなに椅子はありやしないよ。それに敷くものもないんだよ。」

「ぢや、床の上へぢかに寢るわ。だつて、あんたが床へ寢るやうになるぢやないの。わたし床の上に寢たいんですの、すぐ、今すぐよ！」

彼女は立上つて、一あし踏み出さうとしたが、不意に烈しい引つ吊るやうな痛みが、一ときに力と決斷を奪ひ盡したやうに、彼女は高い呻聲と共に、再び寢床の上に倒れてしまつた。シャートフは思はず傍へ駈け寄つた。けれど、マリヤは顏を枕の中に埋めながら、いきなり彼の手を取つて、力任せに握りしめたり、捩ぢ廻したりし始めた。これが一分間ばかり續いた。

「マリイ、お前もし何だつたら、こゝにフレンツェルといふ醫者があるんだがね。僕の知人で、大變……ぼく一走り行つて來ようか。」

「ばかな事を！」

「何がばかなことだ？　ねえ、マリイ、一體どこが痛むんだい？　何なら濕布をして……腹か何かに……そんなことなら、醫者はゐなくつても僕に出來るが……でなければ、芥子泥でも……」

「それは一體なんですの？」彼女は頭を持上げて、慴えたやうに男の顏を見つめながら、奇妙な調子でかう訊ねだ。

「と言つて、つまり何の事だね、マリイ？」シャートフは合點が行かなかつた。「お前なにを聞いてるんだい？　あゝ、どうしよう、僕はまるで途方に暮れてしまつた。マリイ、勘忍しておくれ、僕はなんにも分らないんだ。」

「えゝ、やめて頂戴、あんたなぞの知つた事ぢやないわ。それに可笑しいぢやないの……」と彼女は苦しさうに笑つた。「何か話して頂戴。部屋の中を歩き廻りながら、話をして頂戴な。そんなに傍に立つて、わたしの顏を見ないで頂戴。これはわたし特別に折入つてお願ひするわ！」

シャートフは彼女の方を見ないやうにして、一生懸命に床を見つめながら、部屋の中を歩き始めた。

「實はね――マリイ、後生だから怒らないでおくれ――實はね、すぐ手近な所に犢肉と茶があるんだが……さつきお前の喰べやうがあんまり少かつたもんだから……」

彼女はぞんざいな意地惡げな樣子で手を振つた。シャートフは絶望したやうに言葉を呑んだ。

「ねえ、わたしは合理的な協力主義を基礎として、こゝで製本屋を始めようと思つてるんですの。あんたはこゝに住んでる人だからお分りでせうが、一體どうお思ひになつて、うまく行くでせうかねえ？」

「飛んでもないマリイ、この町の人は本なんか讀みやしないよ。それに、本もまるでありやしないさ。それに、あいつが製本なんかさせるものかね？」

「あいつとは誰？」

「この町の讀者や、この町の住民ぜんたいをさしたんだよ、マリイ。」

「それならそれと、はつきり仰しやいよ。あいつだなんて、誰があいつか分りやしないわ。一たい文法をご存じないの？」

「それは言葉の調子だよ、マリイ。」とシャートフは呟いた。

「あゝ、そんな調子なんか、どこかへ抛つちまつて頂戴、あき〳〵しちやつたわ。なぜこゝの住民とか讀者とかは、製本といふ事をしないのでせう？」

「つまり讀書と製本は、人智發達の異なつた二つの時代、而も大きな時代を表はしてるからさ。始めのうち、人間は少しづゝ本を讀む事を習ふ譯だ、無論、それには何百年といふ時日を要する。けれど、要するに下らないものとして、ばら〳〵に讀崩したまゝ、打つちやつてしまふ。ところが、製本といふ事は、もう書物に對する尊敬を示してゐる。單に讀むのが好きになつたばかりでなく、眞面目な仕事と認めるやうになつた徵なんだ。露西亞はまだこの時期までに到つてないの

だ。歐羅巴はもうだいぶ前から製本してるよ。」

「それは少々衒學者くさい所があるけれど、でもちよつと氣の利いた言ひ廻しねえ。何だか三年前が思ひ出されるわ。あんた三年前には、かなり機智があつたのね。」

これだけの事を言ふのにも、以前の氣紛れな言草と同じやうに、やはり投げやりな調子だつた。

「マリイ、マリイ、」シャートフは感激の色をおもてに浮かべながら、妻に向つてかう言つた。

「おゝ、マリイ！　この三年間にどれだけの變化が起つたか、それをお前が知つてたらなあ！これは後で聞いたことだが、お前は僕か變節したと言つて、ひどく僕を輕蔑してたさうだね。しかし、僕が見棄てたのは一たい誰だらう？　生きた生命の敵だ、自分自身の獨立獨歩を恐れる時代おくれの自由主義者だ、思想の下男だ、個性と自由の敵だ、死屍と腐肉の宣傳者だ！　彼らの持つてゐるのは何だらう？　耄碌だ、中庸主義だ、思ひきり下司で卑屈な凡庸主義だ、嫉妬に充ちた平等主義だ、自己の尊嚴を持たぬ平等主義だ、下男の意識するやうな平等主義だ、千七百九十三年代の佛蘭西人が意識したやうな平和主義だ……が、何より癪に觸るのは、どこへ行つても陋劣漢の揃つてる事だ、陋劣漢だ、陋劣漢だ！」

「えゝ、陋劣漢の多い事だわ。」マリヤは病的な調子できれ〴〵にかう言つた。

彼女は疲れたやうな、けれど燃えるやうな目で、天井を見つめながら、ちよつと斜かひに頭を枕の上に投げ出したまゝ、身動きするのも恐れるやうに、じつと長くなつて横になつてゐた。その顏は蒼ざめて、脣はから〳〵に乾いてゐた。

「お前もさう思ふかね、マリイ、さう思ふかね！」とシャートフは叫んだ。

彼女は再び顏を枕に埋めて、否定のしるしをして見せようとしたが、とつぜん前と同じ痙攣が起つた。

シャートフの手を、痛いほど握りしめるのであつた。

「マリイ、マリイ！　これは事に依つたら、なか〳〵重態かも知れないよ、え、マリイ！」

「默つてゝ頂戴……わたし厭です、厭です、厭です。」再び仰向けに向き變りながら、彼女は恐ろしい勢で叫んだ。「そんな同情めいた樣子をして、わたしの顏を見ないで頂戴！さあ、部屋中を歩きながら、何か話をして頂戴、話を……」

シャートフはまるで途方に暮れたやうに、また何やら言ひ出した。

「あんたこゝで何をしてらつしやるの？」氣むづかしげな焦燥の樣で相手を遮りながら、彼女は突然かう訊ねた。

「ある商人の店へ通つてるのだ。僕はね、マリイ、その氣にさへなれば、こゝでいゝ金儲けも來るんだがね。」

「そりやお芽出たう……」

「あゝ、マリイ、そんな風な事を考へないでおくれ。僕が言つたのはたゞ……」

「それからまだ何かしてらして？　何を宣傳してらつしやるの？　だつて、あんたは何か宣傳しずにゐられない人なんですもの。さういふ性質なんですものね！」

「神を宣傳してるよ、マリイ。」
「自分でも信じてない神をね。わたしその思想がどうしても合點行かなかつた。」
「やめとかう、マリイ、それは後にしよう。」
「ぢや、こゝにゐたあのマリヤ・チモフェーヴナといふのは、一たい何者なんですの？」
「それもやはり後にしよう、マリイ。」
「わたしにそんな忠告はやめにして頂戴！　あの殺人は……あの連中の兇行だといふ事ですが、一たい本當なんでせうか？」
「間違なくさうなんだ。」シャートフは齒をきり〳〵と鳴らした。
マリヤは急に頭を上げて、病的な聲で叫び出した。
「もうその事をわたしに言はないで頂戴、決して言つちやいけません、決して言つたら承知しませんよ！」
かう云ひながら、彼女は以前と同じひつ吊るやうな痛みに、再び寢床の上へ倒れて了つた。もうこれで三度目だつた。しかも、今度は呻き聲が前より高くなつて、殆どさけび聲に變つてしまつた。
「おゝ、あんたは何て堪らない人だらう！　おゝ、何てやり切れない人だらう！」彼女はもう自分で自分に容赦もなく、上から屈みかゝるシャートフを突きのけながら、夢中になつて身を蹂くのであつた。

「マリイ、僕は何でもお前の好きなやうにして上げる……歩いて……話をしてもいゝ」
「まあ、一體あんたは、何が始つたのか分らないんですか！」
「何が始つたかつて、マリイ？」
「あゝ、わたしの知つた事ですか？　一體これがわたしの知つた事だらうか？……あゝ、呪はれた女！　おゝ、始めつから何もかも呪つてやる！」
「マリイ、本當に何が始つてるのか、お前が言つてくれたらなあ……さうしたら、僕は……そんな風では、僕に何が分るものかね。」
「あんたは、抽象的なお喋りばかりしてる役立ずだわ。おゝ、世の中のものを何もかも呪つてる！」
「マリイ！　マリイ！」
この女は氣が違ひかゝつてるのだと、彼は眞面目にさう考へた。
「一體あんたもいゝ加減、分りさうなもんぢやないの。お產の陣痛よ！」恐ろしい病的な憤怒に顏を歪めて、ぢつと男を見つめながら、彼女は半ば身を起した。「もう今から呪はれるがいゝ、こんな子供なんか！」
「マリイ、」やうやく事の眞相を悟つて、シャートフはかう叫んだ。「マリイ……どうして始めからさう言つてくれなかつたのだ？」彼は急に我に返つた。そして、斷乎たる決心を示しながら、帽子を取上げた。

「こゝへ入つて來る時に、そんな事とは知らなかつたんだわ。でなかつたら、あんたの處へ來る筈がないぢやないの。まだ十日ぐらゐあると言ふ事だつたんですもの！　どこへ、あんたどこへ行くの、そんな事だめよ！」

「產婆を呼びに！　僕は拳銃（ピストル）を賣るのだ。今は何よりも一番に金だからね。」

「なんにもしちやいけない。產婆など呼んだら聞きませんよ。ほんの手傳女でいゝ、どこかの婆さんでいゝの、わたしの慕口に八十哥（カベイカ）あるから……田舍の女なんか、產婆なしでお產をするぢやないの……不具（かたは）になつたら、結句その方がいゝわ……」

「產婆も來る、婆さんも來るよ。だが僕は、僕はお前を一人ぼつちで置いて行かれない、マリイ！」

しかし、後でこの賴りのない女を一人ぼつちにするよりは、今おいて行つた方がまだましだと考へたので、彼はマリヤの烈しい憤怒にも拘らず、その呻聲も、腹立たしげなさけびも聞かないで、自分の早い足に望みをかけながら、まつしぐらに梯子段を馳け下りた。

三

まづ一番にキリーロフの處へ駈けつけた。もう夜中の一時頃だつた。キリーロフは部屋の眞中に突つ立つてゐた。

「キリーロフ君、家內が產をしてるんだ！」

「と言つて、何の事？」

「產をしてるんだ、子供を生んでるんだ！」

「君……思違ひぢやない？」

「いや、さうぢやない、さうぢやない、いま陣痛が始つてるんだ！……產婆が要るんだ、何か婆さんのやうなものが――ぜひ今すぐ要るんだ……いま呼んで來られるか知らん？　君のとこには大勢婆さんがゐたがなあ……」

「どうもたいへん氣の毒だが、僕は產をする事が下手でね。」とキリーロフは考へ深さうに答へた。「いや、つまり、僕が產が下手なのぢやなくつて、產の上手なやうにする事が出來ない……いや……駄目だ、僕には巧く言へない。」

「つまり、君が自分でお產の手傳ひが出來ない、といふ事なんだらう。しかし、僕のいふのはその事ぢやない。婆さんが要るんだ、婆さんが。僕は女を賴んでるんだ。看護婦だ、女中だ！」

「婆さんは呼べるが、しかし今すぐといふ譯には行かない。もし何なら、僕が代りに……」

「あゝ、それは駄目だ。僕はこれからギルギンスカヤの處へ、あの產婆の處へ行くんだから。」

「あの毒婦か！」

「あゝ、さうだよ、キリーロフ。しかし、あの女が一番うまいんだからね！　あゝ、それにあいふ偉大な神祕――新しい生命の出現が、敬虔の念もなければ歡喜もなく、嫌惡と嘲罵と冒瀆をもつて行はれるんだからね！……君、あれはもう今から、赤ん坊を呪つてるんだよ……」

「もし何なら僕が……」

「いけない、いけない。僕が駈け廻つてゐるうちに（大丈夫、僕はギルギンスカヤを引張つて來る）、君はときどき僕の梯子段の處へ行つて、そつと中の樣子に耳を澄してくれ給へ。だが、決して中へ入つちやいけないよ、あれがびつくりするから。どんな事があつても、入つちやいけないたゞ聞いてるだけなんだよ……萬一どんな恐ろしい事がないとも限らないからね。で、もし何か非常の事が起つたら、その時は構はず入つてくれ給へ。」

「分つた。金はまだ一留（ルーブリ）ある。さあ、僕はあす雞（とり）を買はうと思つたんだが、今はもうほしくなくなつた。早く走つて行き給へ。一生懸命に走つて行き給へ。湯沸（サモワール）は一晩ぢうあるよ。」

キリーロフは、シャートフに關する仲間の計畫を、少しも知らなかつた。それに、前からシャートフの身に迫る危險の程度を、まるで知らずにゐたのである。たゞシャートフと『あの連中』の間に、舊くから何やら義務關係がある、といふ事だけしか知らなかつた。尤も、彼自身も外國にゐる時分、ある命令を授けられたため、幾分この仕事に關係してゐたが（彼は何ごとも、餘り深く立入つて仕事をしたことがないので、この命令といふのもごく表面的なものだつた）、しかし最近なにもかも――一切の委託を拋つて、あらゆる仕事（殊に『共同の事業』）からすつかり身をひいて、瞑想生活に沒頭して了つたのである。

ピョートル・ヱルホーヱンスキイは會議の席で、キリーロフが與へられたる時機に、『シャートフの事件』を引受けるかどうかを確めるため、リプーチンを同道して行つたけれど、キリーロフ

との問答中シャートフの事は、一言も仄めかさうとしなかつた。多分、そんなことを言ふのは拙いと、考へたのでもあらうし、キリーロフをあてにならぬ人間とも思つたので、あす何もかも濟んで了つて、キリーロフが『どうだつて同じだ』と考へるまで待たう――少くも、ピョートルはキリーロフのことを、こんな風に判斷したに相違ない。リプーチンもやはり同じやうに、あゝした約束があつたにも拘らず、シャートフの話が少しも出なかつたのに、十分氣がついてゐたけれど、抗議を提出するには、餘り昂奮しすぎてゐたのである。

シャートフはまるで旋風（つむじかぜ）のやうに、蟻（ムラヴィーナヤ）街をさして駈け出した。果しもないやうに思はれる僅かな道のりを咀ひながら、

ギルギンスキイの處では、長いあひだ戸を叩かねばならなかつた。もうだいぶ前に寢て了つたのである。しかし、シャートフは何の遠慮もなく、力任せに鎧戸を叩き續けた。庭に鎖で繫いでゐる犬が、飛びかゝらうと躁きながら、意地惡さうな聲で吠え立てると、町内の犬がみんなその聲に應じて、恐ろしい犬の合唱（コーラス）が始つた。

「何だつてそんなに叩くのです。一體なんの用です？」たうとう窓の中から、主人のギルギンスキイの聲――かうした『侮辱』にふさはしからぬ、物柔らかな聲が響いた。

と、鎧戸が開かれ、續いて通風口もあいた。

「そこに居るのは誰、どこのやくざ者なの？」今度はかうすつかり『侮辱』に相應した聲――ギルギンスキイの親戚に當る老孃（オールドミス）の、意地惡さうなきい〳〵聲が響いた。

「僕はシャートフです。家内が僕のところへ歸つて來て、いま產をする所なんですよ……」
「えゝ、勝手に產でも何でもするがいゝ、早く行つてお了ひなさい！」
「僕はアリーナさんを迎へに來たんです。アリーナさんを連れないでは歸りませんよ！」
「アリーナさんはね、誰の處へでも行く人ぢやありません。夜ふけに出るのは、專門の人があります よ……さつさとマクシェーヴの處へでも行くがいゝ。騷々しくしないで頂戴、失禮な！」
意地くね惡さうな女の聲が、爆ぜるやうにかう言つた。
ギルギンスキイの押止める聲が聞えた。けれど、老孃は彼を突きのけながら、なか〳〵折れて出ようとしなかつた。
「ぼく歸りやしないから！」とシャートフはまた怒鳴つた。
「待つてくれ給へ、ね、待つてくれ給へつてば！」やつと老孃をなだめて、ギルギンスキイはかう喚いた。「シャートフ君、お願だから、五分ばかり待つてくれ給へ。僕アリーナを起すから、どうか叩いたり怒鳴つたりしないでくれ給へ……あゝ、何といふ恐ろしい事になつたもんだ！」
果しのない五分といふ時が經つてから、やつとアリーナが姿を現はした。
「あなたの處へ奥さんが歸つて來たんですつて？」といふ彼女の聲が通風口から聞えた。驚いた事に、その聲は少しも意地惡さうでなく、たゞいつもの癖で、ちよつと命令的に聞えるばかりだつた。アリーナはそれよりほかに、口の利き方を知らなかつたので。
「えゝ、家内が——そして產をしてるんです。」

「マリヤ・イグナーチェヴナ？」
「えゝ、マリヤ・イグナーチェヴナです。勿論、マリヤ・イグナーチェヴナです？」
ちよつと沈默が襲うた。シャートフはぢつと待設けてゐた。家の中では、人々が何やら囁き交してゐた。
「奥さんはもう前から來てらつしやるの？」またマダム・ギルギンスカヤがかう訊ねた。
「今夜八時に來たのです。何うか早くして下さい。」
再び囁きが聞えて、どうやら相談してるらしい風だつた。
「ねえ、思ひ違ひをしてらつしやるんぢやありませんか？　あの人が自分でわたしを迎へに寄越したんですか？」
「いや、あれが自分で寄越したんぢやありません。あれは僕にいろんな費用を負擔させまいと思つて、たゞの婆さんをと言つたのです。しかし、心配しないで下さい、僕ちやんとお禮をしますから。」
「よろしい、お禮はなさらうとなさるまいと、わたし行つて上げますわ。わたしはマリヤさんの獨立不羈な氣象に、いつも感心してゐましたの。尤も、あの人はわたしを憶えてらつしやらないかも知れませんがね。それからあなたの處には、どうしてもなくてはならない物が揃つてますか？」
「なんにもありません。が、みんな揃へます、みんなすつかり……」

『あんな連中にもやはり俠氣があるんだなあ！』リャームシンのところへ急ぎながら、シャートフはかう考へた。『主義と人間性――これは多くの點に於て、全然ことなつた二つのものらしい。俺はあの人達に對しても、ずゐぶん惡い事をしてるかも知れない！……みんな惡いのだ、みんな罪があるのだ、そして、みんなこれに氣がつきさへすればいゝんだがなあ！……』

リャームシンの處では、さう長く叩かなくてもよかつた。驚いた事には、彼はすぐ寢床から跳ね起きて、鼻風邪の危險さへ忘れ、襯衣一枚で跣足のまゝ通風口を開けた。彼はふだん恐しく神經家で、自分の健康を酷く氣にする質だつた。しかし、こんなに目ざとく早速に出て來たのには、また特別な理由があつたのだ。リャームシンは今夜の『仲間』の會議の結果、一晩ぢう戰々兢々として、いまだに寢つけなかつたのである。何だか甚だ望ましくない押しかけ客が、四五人もやつて來さうな氣がしてならなかつた。シャートフの密告といふ情報は、何よりも彼を苦しめたのである……ところが、突然わざと狙つたやうに、恐ろしく猛烈に窓を叩く音が聞えるではないか！……

彼はシャートフを見ると、すつかり慴え上つて、すぐに通風口をぱつたり閉め、寢臺の方へ逃げ出して了つた。シャートフは凄じい勢で、叩いたり喚いたりし始めた。

「何だつて君は夜中にどん〳〵叩くんだね！」やつとシャートフが一人きりで來たのを確めたので、二分ばかり經つてから、もう一ど通風口を開ける事に決心したリャームシンは、恐ろしさに胸を痲痺らせながら、嚴めしい聲でかう叫んだ。

「さあ、こゝに君の拳銃がある。これを元へ引取つて、十五ルーブリ出してくれ給へ。」

「それは一體なんのこつたね、君は醉拂つてるのかい？　そりや强盜ぢやないか。僕が風邪を引くばかりだ。ちよつと待ち給へ、僕は夜着を羽織つて來るから。」

「今すぐ十五ルーブリ借してくれ給へ。もし出してくれなきや、僕は夜明けまでどん〳〵叩いて、喚き續けるよ。僕はこの窓を毀してしまふから。」

「そんな事をすりや、僕は巡査を呼んで、君を留置場へ引張つて行かせるさ。」

「君は僕を啞とでも思つてるのか？　僕にも巡査が呼べないと思つてるのか。一體たれが巡査を恐れなきやならんのだ、君か僕か？」

「君はそんな卑劣な信念を抱き得る人なんだね……君が何を仄めかしてるのか、僕は承知してるよ……待ち給へ、待ち給へ、お願ひだから、叩かないでくれ給へ！　まあ、考へても見るがいい、誰が夜中に金を持つてるものかね。一體なんだつて金が要るんだね、もし君が醉拂つてゐるのでなけれや……」

「家内が戻つて來たんだ。僕は君に十留ひいてやるんだよ。まだ一度も射つて見た事はないんだけれど。さあ、この拳銃を引取つてくれ、すぐ引取つてくれ給へ。」

リャームシンは機械的に通風口から手を延して、拳銃を受取つた。彼は暫くぢつとしてゐたが、とつぜん素早く通風口から首をつき出して、まるで背中に惡寒でも感じるやうに、前後を忘れてかう囁いた。

「君は嘘をついてるんだ。細君が歸つて來たなんて、まるで出たらめだ……それは……それはたゞどこかへ逃げ出さうといふ魂膽なのだ。」

「ばか、僕がどこへ逃げるんだ？　それは君達のゼルホーゼンスキイが逃げ出すんで、僕の事ぢやあないよ。僕はつい今しがた、產婆のギルギンスカヤの處へ行つて來た。すると、あの女もすぐ承知してくれたよ。何なら聞合せて見たまへ。家內は非常に苦しんでるのだ。全く金が必要なんだ。さあ、出してくれ！」

樣々な想念がまるで花火のやうに、リャームシンの素敏い頭の中で閃いた。局面がすつかり一變してしまつたのだ。けれど、恐怖の念が冷靜な判斷を許さなかつた。

「だが、どういふ譯で……だつて、君は細君と同棲してゐないぢやないか？」

「そんな事を聞くと、僕は君の頭をぶち割つて了ふぞ。」

「あつ、こりやどうも、失敬した。いや、分つてるよ。何しろ、僕はすつかり仰天して了つたのでね……いや、分つてるよ、分つてるよ、しかし……しかし、――一體アリーナさんが君の處へ行くだらうか？　君は今あの女が出かけたつて言つたね？　君、そりや嘘だよ。見給へ、そら見給へ、君は一こと一こと嘘をついてるぢやないか。」

「あの女はきつと今ごろ家內の傍に坐つてるに相違ないのだ。もういゝ加減にしてくれ。君が間拔けだからつて、僕の知つた事ぢやないよ。」

「嘘だ、僕は間拔けぢやないよ。失禮だが、僕はどうしても……」

彼はもう何が何やら分らなくなつて、三たび戸を閉めようとしたが、シャートフが恐ろしい勢で喚き出したので、彼はまたもや大急ぎで首を突き出した。

「こりや君、純然たる人權侵害だよ。一たい君は何を僕に要求するんだね、え、何を、何を、はつきり言給へ。それに考へても見たまへ、考へても――こんな眞夜中にさ！」

「十五留の金を要求してんぢやないか、何てばか頭！」

「しかし、僕は全然ピストルを買戻したくないかも知れないんだぜ。君には何の權利もないのだ。君は品物を買つただけだ――それで話はお了ひぢやないか。君にそんな事を要求する權利はない。僕はどうしても、夜中にそんな金を拵へる譯に行かない。どうしてそんな金が手に入るもんかね？」

「君はいつでも金を持つてるよ。僕は十留ひくと言つたぢやないか。何だ、折紙つきの猶太人の癖に。」

「あさつて來給へ――いゝかね、あさつての朝、正十二時に來たまへ。すつかり耳を揃へて上げるよ、いゝだらう？」

シャートフは三ど兇暴な勢で窓を叩いた。

「ぢや十留よこし給へ。そして、明日の朝ひき明けに五留。」

「いかん、明後日の朝五留だ。明日はどうあつても駄目だ。まあ、來ない方がいゝよ、まるで來ない方が。」

「十留よこしやがれ、こん畜生！」

「何だつて君はそんなに悪口をつくんだい？　まあ待ち給へ、あかりをつけなきや。ほら、こんなに硝子を毀しちやつたぢやないか……よる夜中、こんなにどん〳〵叩くやつが、どこにあるものかね？　さあ！」と彼は窓から紙幣を差しのぞけた。

シャートフは引つ摑んだ——紙幣は五留だつた。

「どうしても駄目だ。たとへ殺されたつて出來やしない。明後日は都合できるが、今はどうしても駄目だ。」

「歸りやしないぞ！」とシャートフは喚いた。

「さあ、これを取つてくれ給へ、もう一枚。いゝかね、もう一枚あるだらう。もうそれより駄目だ。君が喉の張裂けるほど怒鳴つたつて、僕は出しやしないから。どんな事があつたつて、出しやしないから。出さないつたら出しやしない！」

彼は前後を忘れて夢中になつて、汗をたら〳〵流してゐた。彼が後から差し出した紙幣は一留二枚だつた。かうして、シャートフの手には合計七ルーブリ出來た。

「ぢや、勝手にしやがれ、明日はまた來るから。リャームシン、八ルーブリ用意して置かなかつたら、僕は君をのしちやうから。」

『ふん、俺は家にゐやしないんだから、ばか野郎！』とリャームシンは腹の中で考へた。

「待ち給へ、待ち給へ！」もう駈け出したシャートフの跡から、彼は氣ちがひのやうに喚いた。

「待ち給へ、引返して來たまへ。ねえ君、いま細君が歸つて來たと言つたのは、ありや本當なのかい？」

「ばか！」シャートフはぺつと唾を吐いて、一目散にわが家をさして駈け出した。

四

斷はつて置くが、アリーナはゆうべ會議を通過した決議の事を、少しも知らずにゐたのである。ギルギンスキイはすつかり倒顚して了つて、まるで力拔けしたやうになつてゐたので、今夜の決議を妻に告げる勇氣がなかつた。けれど、やはり持ちこたへる事が出來ないで、事實の半分だけうち明けた——つまり、必ずシャートフが密告するに相違ないといふ、ゼルホーゼンスキイの獨した報知である。しかし、彼はすぐその場で、どうもこの報知は十分信用できかねると附け足した。アリーナは恐ろしく仰天して了つた。かういふ譯なので、シャートフが迎へに駈け附けた時、ゆふべ夜つぴて一人の產婦を相手に、さん〳〵骨を折らされたにも拘らず、さつそく出かけようと決心したのである。彼女はふだん常々『あんなシャートフのやうなやくざ者は、きつと社會的に卑劣な事を仕出かすに相違ない』と信じ切つてゐたが、しかしマリヤ・イグナーチェヴナの到着は、事件に新しい光を投げた。シャートフの動亂した態度や、助けを乞ふときの絕望的な哀願の調子などは、明かにこの裏切者の感情の轉化を示してゐた。單に他人を亡さんがためのみに、裏切までしようと決心した人間なら、いま實際に見受けられたのとは、ぜん〳〵別な樣子をして

ゐる筈だ。とにかくアリーナは、萬事自分の目ですつかり見きはめようと、決心したのである。ギルギンスキイは妻の決斷に大恐悦だつた——まるで四プード（約十六貫）の重荷を、肩からおろして貰つたやうな氣持がした！　それどころか、一種の希望さへ彼の心に生じた。實際シャートフの容子は、ゼルホーゼンスキイの想像と、少しも一致する所がないやうに思はれたのである。

果してシャートフの想像は誤らなかつた。彼が家へ歸つたとき、アリーナはもうマリイの傍に坐つてゐた。彼女はこゝへ來るとすぐ、階段の下にぽかんと立つてゐるキリーロフを、ばかにし切つた態度で追出して了つた。そして、どうしても彼女を舊知と受取らないマリイと、手早く初對面の挨拶を濟した。產婦は『恐ろしく險惡な徵候』を示してゐた。つまり取亂して、意地惡げで、おまけに『氣の狹い絕望』に陷つてゐるのであつた。アリーナは僅か五分ばかりの間に、產婦のさま〴〵な反抗を、すつかり抑へ附けてしまつた。

「あなた上等の產婆が厭だなんて、何だつてさう駄々をこねるんですの？」シャートフが入つて來た瞬間に、彼女はこんな事を言つてゐた。「ばかげ切つた話ですよ。あなたの變則的（アブノーマル）な狀態から起つた、不正直な考へですよ。たゞのちよつとした婆さん——教育のない取上婆さんの手にかゝつたら、十中の五までは惡い結果を見るものと、覺悟しなきやなりません。さうすると、上等の產婆にかゝるよりも、よけい騷ぎが大きくなつて、餘計お金を費はなきやなりませんからね。それに、どうしてわたしを上等の產婆に決めてお了ひになるの？　なに、拂ひは後でいゝんですよ。あなたから餘計なお錢（あし）は頂きやしませんから。そして、お產の方は請合ひますよ。わたしに

かゝつたら、死ぬやうな事はありません。これどころか、まだ〴〵ひどいのを手がけましたからね。ところで、生れた子供は明日にも養育所へ送つて、それから暫く經つたら、田舍へ里子にやつて上げますよ。そしたら、もう事はお了ひですよ。その中に、あなたもよくおなんなすつて、何か恥しくないだけの仕事に就いたら、いゝぢやありませんか。さうすれば、ごく僅かな間にシャートフさんへ、部屋代だの諸がゝりだのを返せる譯ですよ。諸がゝりだつてほんの知れたもんですからね……」

「わたしの言ふのはそんな事ぢやありません……わたしあの人にそんな迷惑をかける權利がないんですの……」

「そりや筋の立つた、立派な公民らしい感情です。でも、わたしの言ふ事をお聽きなさい。もしシャートフさんが氣ちがひめいた空想家を廢業して、ほんの少しでも正しい思想の人となつたら、殆ど何一つ失はないで濟むんですよ。たゞ馬鹿な眞似をしなきやいゝんです。仰山に太鼓を叩いて、はあ〴〵舌を吐出しながら、町ぢう駈け廻るやうな眞似をしなけりやいゝんです。あの人は、傍から兩手を抑へてゐなかつたら、夜明までにはこの町の醫者を、大方みんな叩き起して了ふでせうよ、全く。さつきも家の通りの犬といふ犬を、すつかり起して了つたんですもの。醫者なんか要りやしません。今も言つた通り、わたしが一さい引受けますよ。しかし、婆さんくらゐは、手廻りの用に傭つてもいゝでせう。幾らもかゝりやしませんから。尤も、あの人だつて、馬鹿な眞似しか出來ないわけぢやない、たまにはなにかの役に立つかも知れませんわ。手もあれ

ば、足もあるんですもの。藥屋へかけ出すぐらゐはしてくれるでせう。それくらゐのことを恩に着せて、あなたの感情を侮辱するやうなことはないでせうよ。それに、なにが恩なものですか！だつて、あなたをこんな境遇に落したのは、あの人ぢやありませんか。あなたがよその家庭教師をしてらつしやる時、あなたと結婚しようといふ利己的な目的で、家の人と喧嘩をさしたのは、あの人ぢやありませんか。わたし達も少しは聞いてゐます　……尤も、あの人は今も自分から、まるで氣ちがひみたいに飛んで來て、往來一杯に響くほど怒鳴たてましたがね。わたしは誰の所へも、押しつけがましく出かけはしないんですが、わたし達はみんな同じやうに、連帶の責任があると信じてればこそ、あなたのためを思つて來たんですの。わたしはまだ家を出ない中から、この事をあの人に宣言したくらゐですからね。もしあなたが、わたしに用がないとお考へなら、これでご免蒙りますよ。たゞ何か不幸が起らなければよござんすがね。しかも、そんなものは、譯なく避ける事が出來るのに。」

彼女は椅子を立つてまで見せた。

マリイはかうした賴りない身の上ではあり、またずゐぶん苦しんでもゐたし、それに實際のところ間近に迫つた產を思ふ怖れが餘り强かつたので、彼女を歸して了ふ勇氣がなかつた。とは言へマリイはこの女がとつぜん憎くて堪らなくなつた。言ふ事がまるで見當ちがひだ。マリイの胸にある事とまるで違つてゐる！　しかし、無經驗な取上婆さんの手にかゝつて、命を落すかも知れないといふ豫言は、遂に嫌惡の念を征服して了つた。けれど、その代りシャートフに對しては、

この瞬間から一層わがまゝになり、一さう容赦がなくなつた。了ひには、自分の方を見るばかりでなく、自分の方を向く事さへ禁じて了つた。陣痛はまた募つて來た。呪詛の聲、罵詈の聲は、だん〳〵狂暴になつて行つた。

「えゝッ、もうあの人をよそへやつて了ひませう。」アリーナは斷ち切るやうにかう言つた。

「あの顏色つたらありやしない。たゞあなたをびつくりさせるだけですよ。まるで死人みたいに蒼い顏をしてるわ！　一體あんた何の用があるの、どうか聞かして頂きたいもんですねえ、何て可笑しな變人さんだらう！　まるで喜劇だわ！」

シャートフは返事しなかつた。もう一さい返事をしまいと決心したのである。

「わたしもかういふ場合に、よく馬鹿げた父親を見ましたよ、やはり氣が狂つたやうになるんですがね、しかし、そんなのは何と言つても……」

「やめて頂戴、それでなければ、わたしを打つちやつといて、勝手に不具にして了つて頂戴！一口も物を言つちやいけない！　厭です、厭です！」とマリイは叫び立てた。

「もしあなた自身が、分別をなくしてゐらつしやらないなら、一口も物を言はずにゐられないぐらゐの事は、お分りになりさうな筈ですがねえ。とまあ、わたしはこの場合、あなた方の事を考へますのさ。何にしても、用事だけは言はなきやなりません。ねえ、何か用意がしてありますか？　シャートフさん、あなた返事して頂戴。あのひとはそれどころでないんだから。」

「つまり、何が要るのか言つて下さい。」

「ぢや、なんにも用意してないんだ。」

彼女はぜひ缺かす事の出來ない品を、すつかり並べて聞かせた。しかし、彼女の察しのよさも認めてやらなければならぬ。彼女はこの際、全く裏長屋のお產同然な、ほんのなくてならぬ物だけで濟したのである。二三のものはシャートフの處に見つかつた。マリイは鍵を取出して、彼の方へさし出しながら、自分の鞄の中を搜してくれと賴んだ。彼は手がわな〳〵と慄へるので、馴れない鞄を開けるのに、普通より少し長くごそ〳〵してゐた。マリイは前後を忘れるほどいらいらしたが、アリーナが飛んで行つて、鍵を引つたくらうとすると、彼女はどうしても、アリーナに鞄を覗かれるのを厭がつた。そして、恐ろしい聲を立てゝ泣き叫びながら、鞄はシャートフ一人にしか開けさせないと言張つた。

ある品は、キリーロフの處へ取りに行かねばならなかつた。シャートフが身を轉じて、外へ出ようとするや否や、彼女はすぐに狂猛な聲を立てゝ、彼を呼返した。シャートフが一目散に引返して、自分はちよつとの間、ぜひなくてならぬ物を取りに行くだけで、すぐに歸つて來ると說明した時、はじめてやつと安心したのである。

「まあ〳〵、奧さん、あなたのご機嫌を取るのは難かしい事ですね。」とアリーナはから〳〵と笑ひ出した。「じつと壁の方を向いて、顏を見てもくれるなと言ふかと思ふと、今度は急に、ちよつとの間も傍を離れては厭だなんか言つて、泣出しなさるんですもの。そんな事をすると、あの人がまた何か考へるかも知れませんよ。さあ、さあ、そんなに泣いたり、目を擦つたりするのをお止しなさい。わたしなんか笑つてるぢやありませんか。」

「あの人は決してそんな事を考へやしませんよ。」

「おつとつと、もしあの人が羊みたいに、あなたに惚込んでゐなかつたら、あんなにはあはあ舌を吐きながら、通りから通りを駈け廻つて、町ぢうの犬を起すやうな眞似はしなかつたでせうよ。あの人は家の窓を叩き毀して了ひましたよ。」

五

シャートフが入つて行つた時、キリーロフは依然として部屋の中を、隅から隅へと歩き廻つてゐたが、すつかり放心狀態になつて、マリイの到着の事など忘れて了つたやうに、相手の言葉を聞きながらも、なんの事か合點が行かない風であつた。

「あゝ、さう、」今まで沒頭してゐた何かの想念から、やつとの事でちよつとの間心を捲ぎ放したやうに、彼は突然おもひ出してから言つた。「さう……婆さん……細君だつたかね、婆さんだつたかね？ いや、ちよつと待ち給へ、細君と婆さんと兩方だつけね、さうだ。おもひ出した——行つて來たよ。婆さんはやつて來るには來るけれど、今すぐといふ譯に行かない。枕、持つて行き給へ。それから何だね？ あゝ……ちよつと待ち給へ、シャートフ君、君はとき〴〵永久調和の瞬間を經驗する事があるかね？」

「ねえ、キリーロフ君、君はこれから、夜寢ない習慣を止めなきや駄目だよ。」

キリーロフは漸く我に返つた。そして(不思議な事には)、いつもよりずつと滑らかに、調子よく話し出した。察するところ、彼はもうずつと前から、この思想をすつかり纏め上げてゐたらしい。或ひは何かに書き附けてゐたかも知れない。

「ある數秒間があるのだ——それは一度に五秒か、六秒しか續かないが、そのとき忽然として、完全に獲得されたる永久調和の存在を、直感するのだ。これはもう地上のものではない。と言つて、何も天上のものだといふ譯ぢやない。つまり、現在のまゝの人間には、到底もちきれないといふ意味なんだ。どうしても生理的に變化するか、それとも死んで了ふか、二つに一つだ。それは論駁の餘地のないほど明白な心持なんだ。まるでとつぜん全宇宙を直感して、『然り、そは正し』と云つたやうな心持なんだ。神は世界を創造したとき、その創造の一日の終る毎に、『然り、そは正し、そはよし』と言つた。それは……それは決して有頂天の歡喜ではなく、たゞ何とはない靜かな喜悅なのだ。人はもう赦すなどといふ事をしない。なぜと言つて、何も赦すべき事がないからだ。愛するといふ感情とも違ふ——おゝ、それはもう愛以上だ！　何よりも恐ろしいのは、それが素敵にはつきりしてゐて、何とも言へない悅びが溢れてゐる事なんだ。もし十秒以上つゞいたら、魂はもう持切れなくなつて、消滅してしまはなければならない。僕はこの五秒間に一つの生を生きるのだ。そのためには、一生を投げ出しても惜しくない。それだけの價値があるんだからね！　ところで、十秒以上もちこたへる爲めには、生理的に變化しなくちや駄目だ。僕はね、人間は生む事を止めなきやならんと思ふ。目的が達しられた以上、子供なぞ何になる、發達なぞ

何になる？　福音書にも言つてあるぢやないか、復活の日には人々生む事をせずして、悉く天使の如くなるべしつて。面白い暗示ぢやないか。君の細君は生んでるんだね？」

「キリーロフ、それはしよつちうあるのかね？」

「三日に一度あつたり、一週間に一度あつたり。」

「君、癲癇の持病はないのかい？」

「ない。」

「ぢや、今に起きるよ。氣をつけ給へ、キリーロフ、癲癇は丁度そんな具合に始つて行くつて、ぼく人から聞いた事があるよ。僕はある癲癇持から、發作の前の感覺を、詳しく話して貰つたが、いま君の言つたのと寸分ちがはない。その男もやはり五秒間と、はつきり區切つたよ。そして、それ以上は持切れないと言つたつけ。君、マホメットが甕から水の流れ出てしまはない中に、馬に乘つて天國を一周した話を思ひ出して見給へ。甕——これがつまりその五秒間なんだ。君の永久調和にそつくりぢやないか。しかも、マホメットは癲癇もちだつたんだからね。氣をつけ給へ、キリーロフ、癲癇だよ！」

「もう間に合はないよ。」　キリーロフは靜かに薄笑ひを洩した。

六

夜はもう明けようとしてゐた。シャートフは使にやられたり、詈られたり、また呼びつけられ

たりした。マリイの生を氣づかふ恐怖の念は、もう極度に達してゐた。彼女は生きたい、『どうしても、どうしても生きたい』、死ぬのは恐ろしいと叫んだ。『もういゝ、もういゝ！』とも繰返した。もしアリーナがゐなかつたら、かへつていけなかつたに相違ない。次第々々に、彼女はすつかり産婦を征服して了つた。産婦はまるで赤ん坊のやうに、彼女の一語々々に從ふやうになつた。アリーナは、優しくして機嫌を取るといふより、寧ろ怖もてで脅しつけたのだが、その代り働く事にかけたら、手に入つたものだつた。やがて夜も白み始めた。ふとアリーナは、シャートフが梯子段の所へ駈け出して、祈りを捧げてゐるのではないか、と考へついて、面白さうに笑ひ出した。マリイもやはり意地悪げに、毒々しく笑ひ出した。しかし、この笑ひのお蔭で、何だか氣分が輕くなつたらしかつた。到頭シャートフは、すつかり部屋を追ひ出されて了つた。濕つぽい冷冷した朝が訪れた。彼は丁度ゆうべエルケリが入つて來た時と同じやうに、隅つこの壁に顏を押しつけた。まるで木の葉のやうに慄へながら、一生懸命に恐ろしい想念を抑へつけようとした。けれども彼の心は、よく夢の中で經驗するやうに、たゞ一むきにその想念に摑みかゝらうとする。さま〴〵な空想は、絶間なく彼をあらぬ方へ誘つて行つては、絶間なく腐つた絲のやうに、ぷつりぷつりと切れるのであつた。やがて部屋の中からは、もう呻吟の聲といふよりも、寧ろ物凄い、純然たる野獸のやうな叫びが洩れて來た。彼は耳に蓋をしたかつたが、それも出來なかつた。そして、いきなり床に膝をつきながら、無意識に繰返すのであつた——

「マリイ、マリイ！」

と、不意にまた叫び聲が聞えた。が、それは新しい叫び聲だつた。シャートフはぴくりとして、跳りあがつた。それは弱々しい、ひゞの入つたやうな、赤ん坊の泣聲なのである。彼は十字を切つて、部屋の中へ飛込んだ。

アリーナの手の中には、小さな、赤い、皺だらけな生物が、大きな聲で泣立てながら、小さな手足をもぞ〴〵動かしてゐた。まるで一片の麻芥のやうに、一吹きの風にも得堪へぬ、恐ろしいほど頼りなげな存在ながら、やはり生の絶對權でも持つてゐるやうに、大きな聲で自己を主張するのであつた……マリイは意識を失つたやうに、ぢつと横になつてゐたが、やがて一分ばかり經つて、目を開けた。そして奇妙な、實に奇妙な目つきでシャートフを見つめた。それは全く別な目つきだつた。けれど、どんな風かと聞かれても、シャートフはまだ答へが出來なかつたらう。しかし、彼女がこんな目つきをしたのは、今まで一度も憶えがない。

「男の子？　男の子？」彼女は病的な聲でアリーナに訊ねた。

「腕白さんですよ！」赤ん坊を布に包みながら、こちらは怒鳴るやうにかう答へた。

彼女がすつかり子供を包み終へて、寢臺に枕を二つ並べた間へ、横向きに臥させる支度をするから、ちよつと抱いてゐてくれと、シャートフに子供を渡した。マリイはアリーナを恐れるやうに、そつと内緒で彼に合圖をした。こちらはすぐにその意を悟つて、赤坊を傍へ持つて行つて見せた。

「何て……可愛い子だらう……」彼女は微笑を浮かべながら、弱々しくかう呟いた。

「ふつ、この人の顔つきはどうでせう！」シャートフの顔を覗き込みながら、得意のアリーナは愉快さうに笑ひ出した。「何て顔をしてるんでせう！」

「お浮かれなさい、お浮かれなさい、アリーナさん……これは全く偉大な悦びですからね……」子供の事を言つたマリイの二ことで、悦びに輝き渡つたシャートフは、間の抜けたお芽出たさうな顔つきでかう言つた。

「まあ、あなた、偉大な悦びなんて、一體なんの事ですの？」アリーナはまるで懲役人のやうに、なりもふりも構はず、忙しさうに後かたづけをしながら、本當に浮かれ出して了つた。

「新しき生の出現の祕密です、說明の出來ない偉大な神祕ですよ、アリーナさん。あなたにそれがお分りにならないのは、どうも實に殘念ですね！」

シャートフは有頂天になつて、取留めもない事を、咽せ返るやうな調子で言つた。ちやうど頭の中で何かがぐらつき出し、それがひとりでに胸から流れ出るやうな具合だつた。

「今まで二人しかなかつた所へ、急に第三の人間が——新しい靈魂が生れる。それは人間の手では到底できない、渾一、完成したものです。新しい思想、新しい愛、本當に恐ろしいくらゐだ……これより立派なものは、この世にまたとありやしません！」

「えゝ、下らない事を喋り立てたものだ！　なあに、たゞ有機體の發展ですよ、それつきりですよ。何にも神祕なんかありやしません。」アリーナは心から面白さうに、から〳〵と笑つた。

「そんな事を言つたら、一匹の蠅だつて神祕になつて了ひまさあね。たゞね、あなた、餘計な人

間は產まれる必要がありませんよ。まづ初め一切の物を鍛へ直して、さういふ人間を有用な材にして置かなきやなりません。子を產むのは、それからの話ですよ。でないと、この子にしてから が、明後日は育兒院へ連れて行つて……尤も、これは是非さうしなきや駄目ですがね。」

「僕は決してこの子を育兒院なんかへやりやしない！」ぢつと床を見つめながら、シャートフはきつぱりと言ひきつた。

「養子になさるの？」

「この子は始めつから僕の子です。」

「無論、この子はシャートフです、法律上シャートフに相違ありませんがね、何もあなた、そんなに人類の恩人を氣取る事は、ないぢやありませんか。この節の人はみんな誰でも、立派さうな文句を並べずにゐられないんだからねえ。まあ、まあ、ようござんすよ。ところでね、」彼女はやつと片附を濟した。「わたしもうお暇しなきやなりません。また朝の中に一ど來ます。もし用があつたら、晩も參りますがね、今のところ萬事めでたく濟んだから、ほかの方へも行つて見なきやなりません。もうとうから待つてるんですから。シャートフさん、どこかあちらの方に婆さんが來てますよ。しかし、婆さんとして、あんたもこゝを離れないやうになさいね、且那さん。傍についてゝお上げなさい。何か役に立つ事もあるでせう。マリヤさんも追拂やしないでせうよ……ま、ま、わたし冗談に言つてるんですよ……」

シャートフが門まで送り出した時、こんどは彼一人だけに向つて、彼女はかう附け足した。

「あなたは本當に笑はしたわね。わたし一生わすれませんよ。お金はあなたから貰はうと思つてやしません。本當に夢にまで笑はされさうだ。今夜のあなたほど可笑しな人は、今まで見た事がない。」

彼女はすつかり滿足の體で歸つて行つた。シャートフの樣子やその話から察したところ、この男が『親父の仲間入をしたがつてゐる、意氣地なしの中の意氣地なし』だといふ事は、火を瞭るよりも明らかだつた。彼女は、そのまゝほかの產婦を見舞ふのが、ついでもあれば近道でもあつたけれど、ギルギンスキイにこの事を知らせたかつたので、わさ〳〵わが家へ駈け戻つた。

「マリイ、あの女は、暫く寢ないでゐる方がいゝと言つたよ。尤も、そんな事は隨分むづかしさうだがね……」とシャートフは臆病さうに言ひ出した。「僕はあの窓の處に坐つて、お前を見てゐて上げよう、ね？」

かう言つて、彼は長椅子の後ろ側の、窓ぎはに腰を下した。で、彼の姿は產婦の目に入らなくなつた譯だ。けれど、一分と經たぬ中に、彼女は彼を呼寄せて、枕の具合を直してくれと、氣難かしげな聲で賴んだ。彼は直しにかゝつた。こちらは腹立たしさうに彼を見つめてゐた。

「さうぢやない、あゝ、さうぢやない……何て無器用な手でせうねえ！」

シャートフはまたやり直した。

「わたしの方へ屈んで頂戴。」出來るだけ相手の顏を見ないやうにしながら、彼女はだしぬけに奇妙な聲でかう言つた。

彼はぎくつとしたが、言はれるまゝに屈み込んだ。

「もつと……さうぢやない……もつとこつちへ。」と言ふかと思ふと、不意にその左の手が、つと男の首にかゝつた。彼は自分の額に力の籠つた、しつとりした接吻を感じた。

「マリイ！」

彼女の脣は慄へた。彼女はぢつと押しこたへてゐたが、不意に身を起して、目を輝かしながら、かう言つた。

「ニコライ・スタヴローギンは惡黨です！」

かう言ふと、彼女はまるで足でも薙がれたやうに、顏を枕に埋めながら、倒れて了つた。ひすてりつくな歔欷の聲を立てゝ、ぢつとシャートフの手を握りしめたまゝ。

この瞬間から、彼女はもう一刻も、男を傍から離さなかつた。彼女はシャートフに向つて、枕もとへ坐つてくれと、どこまでも言張るのであつた。自分では餘り話しが出來なかつたけれど、絕えず男の顏を見つめながら、さも幸福さうにほゝ笑んでゐた。彼女は突然ばかな小娘になつて了つて、何もかもすつかり生れ變つたやうだつた。シャートフは、時には子供のやうに泣くかと思ふと、時には思切つて突拍子もない事を、奇妙な、咽せ返るやうな、有頂天な調子で喋り立てた。時には、マリイの手に接吻する事もあつた。彼女は嬉しさうに聞いてゐたが、言葉の意味はよくわからなかつたかも知れぬ。けれど力の拔けた手で、男の髮を優しくいぢつたり、撫でおろしたり、ぢつと眺めたりするのであつた。彼はキリーロフのことや、また二人でこれから『新し

く永久に』生活を始めようといふことや、神の存在してゐる事や、すべての人が善良だといふ事などを話した。彼は歡喜の餘り、またしても赤ん坊を引出して、眺めるのであつた。

「マリイ。」兩手に赤ん坊を支へながら、彼はかう叫んだ。「古い譫(うは)ごとも、屈辱も、死屍も、そんな事はみんな濟んで了つた。これからは新しい道に向つて、三人で働かうぢやないか、ね、ね！……あゝ、さう〳〵、此の子に何と名を附けたらいゝだらう、マリイ？」

「この子に何といふ名を？」と彼女はびつくりしたやうに問返したが、突然その顏に恐ろしい哀しみの色が浮かんだ。

彼女は兩手を鳴らして、ちらと責めるやうな目つきでシャートフを見やると、そのまゝ枕に顏を埋めた。

「マリイ、お前どうしたんだね？」悲しげな驚きを現しながら、彼は叫んだ。

「あんたまでも、よくもよくもそんな……あゝ、何て不人情な人せう？」

「マリイ、勘忍しておくれ、マリイ……僕はたゞどんな名にしようかと聞いただけなんだよ。僕どうも譯が分らない……」

「イヴン(シャートフの名)ですよ、イヴンと附けるんですよ。」と彼女は火のやうに燃える、涙に濡れた顏を振上げた。「一體まああなたは、何かほかの恐ろしい名が附けられると、思つてらしつたの？」

「マリイ、氣をお落ちつけよ！　あゝ、お前はだいぶ取亂してるんだよ！」

「またそんな失禮な事を――取亂したせゐにするなんて！　わたし受合つて置くわ――もしわたしがこの子に……あの恐ろしい名前を附けようと言つたら、あなたはすぐ賛成なさるに相違ないわ。それどころか、まるで氣がつかなかつたかも知れないわ！　あゝ、何て不人情な下劣な人達だらう、えゝ、みんなみんなさうよ！」

一分の後には、二人はむろん仲直りした。シャートフは彼女に一寢入しろと勸めた。マリイはやがて眠りに落ちたが、それでも男の手を放さうとしなかつた。そして、たび〳〵目を醒しては、もしや行つて了ひはせぬかと、心配するやうに、ぢつと彼の顏を見入りながら、やがてまたすやすやと眠に落ちるのであつた。

キリーロフは、一人の老婆を『お祝ひ』に寄越した。またそのほかに熱いお茶と、たつたいま燒いたばかりのカツレツと、それに『マリヤさんに』と言つて、白麵麭の入つた肉汁(スープ)を屆けてくれた。產婦は貪るやうに肉汁を飲み干した。老婆は赤ん坊の襁褓を變へた。マリイは、シャートフにもカツレツを喰べさせた。

かうして時は過ぎて行つた。シャートフはぐつたりして了つて、椅子に腰を掛けたまゝ、マリイの枕に頭を埋めながら、寢入つて了つた。約束どほりやつて來たアリーナは、かうした二人の樣子を見つけて、愉快さうに彼等を呼び起した。そして、マリイに必要な事を何かと話して、赤ん坊をちよつと檢査して見た。彼女はまたしてもシャートフに、傍を離れるなと云ひつけた。それから、いくぶん輕蔑したやうな高慢な色を浮かべながら、『夫婦』をからかつた後、さつきと同

じやうに、滿足の體で歸つて行つた。

シャートフが目をさました時は、もうすつかり暗かつた。彼は大急ぎで蠟燭をともして、老婆を迎ひに駈け出した。彼が漸く梯子段を一足おりかけた時、自分の方へ向けて登つて來る、誰かの靜かな悠々とした足音が、思はず彼をぎよつとさせた。エルケリが入つて來た。

「入つちやいけない！」とシャートフは囁いた。そしてだしぬけにむづと彼の手を掴んで、門の傍へ引戻した。「こゝで待つてゝくれ給へ、すぐ出て來るから。僕はまるで君の事を忘れてたよ！　あゝ、何だつて君は思ひ出させてくれたんだ！」

彼は恐ろしく急いでゐたので、キリーロフの處へも寄らず、たゞ老婆だけを呼び出して來た。マリイは『わたしを一人で打つちやつて行くなんて、よくもそんな事が考へられたもんだ！』と憤怒の餘り絶望の色さへ浮かべた。

「しかしね、」彼は揚々として叫んだ。「これはもう本當に最後の一歩なんだ！　それから先には、新しい道が展けてるんだよ。そしたらもう決して、決しい古い恐怖の事なぞは、曖にも出しやしない！」

やつとの事で彼はマリイを納得させて、正九時には必ず歸つて來ると約束した。そして、强く彼女に接吻し、赤ん坊に接吻した後、彼は急ぎ足でエルケリの方へ駈けおりた。

二人はスクヴレーシニキイなる、スタヴローギン公園をさして出かけた。それは一年半ばかり前、彼が委托された印刷機械を埋めた處である。公園の中でも一番はじに當る、松林に接した寂

しい荒れた場所で、スタヴローギン家からはだいぶ離れてゐるから、殆んど人目にかゝる心配はなかつた。フィリッポフの持家からは、三露里半ないし四露里（約一里强）歩かなければならなかつた。

「まさか、すつかり歩き通しぢやないだらう！　僕は辻馬軍を雇はう！」

「いや、お願だからは雇はないで下さい。」とエルケリは答へた。「この點をくれ〴〵も注意されたんです……馭者もやはり證人になり得る譯ですからね。」

「ちよつ……ばか〳〵しい！　どうだつていゝや、たゞもう早く片づけちやへばいゝんだ、片づけちやへば！」

二人は恐ろしく早足に歩き出した。

「エルケリ君、可憐なる好少年！」とシャートフは叫んだ。「君はいつか幸福だつた事があるかね！」

「ところで、あなたは今たいへん幸福でゐられるやうですね。」好奇の念を聲に響かせながらエルケリはかう言つた。

第六章　多勞なる一夜

一

ギルギンスキイはこの日二時間ばかり無駄にして、『仲間』の者を一々訪ね廻り、昨夜の出來事を報告しようと思立つた。つまり、シャートフの處へ細君が歸つて來て、子供を生んだので、彼は確かに密告なぞする氣づかひはない。『いやしくも人情を辨へてゐるものは』、この瞬間かれを危險なものとは、たうてい想像が出來ないといふのであつた。しかし、リャームシンとエルケリのほか、どこへ行つて見ても不在なので、彼ははたと當惑した。エルケリは晴やかに彼の目を見つめながら、無言のまゝこの報せを聞終つた。『君は六時に出かけるかどうか！』といふ眞正面からの質問に對して、彼は明るい微笑を浮かべながら、『むろん行きますとも』と答へた。

リャームシンは、見受けたところ、だいぶ重い病氣にでも罹つたらしい樣子で、頭から毛布を引つ被つて、臥つてゐた。ギルギンスキイの入つて來る姿を見て、彼はぎよつとした樣子だつた。そして、客が口を切るや否や、いきなり毛布の下で兩手を振りながら、どうか自分に構はないでくれ、と賴んだ。が、それでもシャートフの一件は、默つて聞終つた。誰を訪ねても留守だと聞いたとき、彼はどういふ譯か、並々ならず驚いた樣子であつた。彼はもうリプーチンを通して、フェーヂカの慘死を知つてゐた。彼は自分からこの事を忙しさうな、取留めのない調子で、ギル

ギンスキイに話して聞かせた。この事實は今度あべこべに客の方を驚かせたのである。『こんや出かけなきやならないかしら、どうだらう！』といふ眞正面からの質問に對して、リャームシンはまたとつぜん兩手を振つて、『僕はぜん〳〵路傍の人だよ、僕は何も知りやしない。どうか構はずに置いてくれ給へ。』と哀願するのであつた。

ギルギンスキイは烈しい不安に惱まされながら、疲憊し切つた體を家へ運んだ。家族に隱さなければならないのも、彼に取つて苦しい事の一つだつた。彼は何もかも妻に打明けるのが癖になつてゐた。もし彼の燒爛れたやうな頭腦に、その瞬間あたらしい想念が照し出さなかつたら――將來の行動に關する一つの新しい、妥協的な計畫が浮かんで來なかつたら、彼も或ひはリャームシンと同樣に、床に就いて了つたかも知れない。けれど、この新しい想念は彼に力を與へた。いな、それどころか、彼はじり〳〵するやうな思ひで、約束の刻限を待兼ねた。そして、少し早目に、打合せた場所へ出かけたのである。

それは、廣いスタヴローギン公園の端にある、恐しく陰慘な場所だつた。わたしは後でわざわざそこへ行つて見たが、この暗澹たる秋の夜には、こゝがどれくらゐ物凄く見えた事だらう、と想像された。この邊から古い禁伐林になつてゐるので、幾百年と經つた巨大な松の木が、陰鬱な糢糊とした斑點をなして、闇の中に見透かされた。それは全く眞の闇で、二歩はなれても、互に見分がつかないほどだつた。しかし、ピョートルとリプーチン、それから後れて來たエルケリは、めい〳〵提灯（ランタン）を携へてゐた。何のためにいつ出來たものか分らないが、こゝには鑿の加らない自

然石で組立てた、何かかなり變てこな洞窟が、世人の記憶を絶した昔から立つてゐた。洞の中にある卓や床几は、もうとうから朽ちて、ばら〳〵に崩れてゐた。三百歩ばかり隔てた右手には、公園の第三の池が盡きなんとしてゐる。この三つの池は、邸のすぐ傍から始まつて、互に繋り合ふやうにしながら、公園の一番はづれまで、一露里以上に亙つて續いてゐるのだ。

こゝからなにかの物音や叫聲が（よしや鐵砲の音であらうとも）主のゐないスタヴローギン邸の、召使か何ぞの耳まで屆かうとは、たうてい想像する事が出來なかつた。昨日スタヴローギンが出立して、老僕アレクセイが引拂つて以來、大きな邸の中には、五六人しか住んでゐるものがなかつたし、おまけに、それも廢物同樣の連中ばかりだつた。また、たとへかうして淋しく引籠つてゐる人達が、人間の悲鳴や救助の叫びを聞きつけたとしても、それは恐怖の念を引起すのみで、誰ひとり暖い煖爐（ストーブ）の傍や、ぬくみの廻つた寢床を離れて、救助に出かけようとするものはあるまいと、十分の確信をもつて斷定が出來る。

六時二十分には、シャートフを迎ひにやられたエルケリを除けて、もうみんなすつかり顏が揃つた。ピョートルも今度はぐづ〳〵してゐなかつた。彼はトルカチェンコと一緒にやつて來た。トルカチェンコは眉を顰めて、心配らしい顏をしてゐた。いつもの取つて附けたやうな、高慢らしい、斷乎たる樣子は、もうすつかり彼の顏から消えてゐた。彼は殆ど少しも、ピョートルの傍を離れなかつた。察するところ、突然ピョートルに對して、限りなき信服を感じ出したものらしく、しよつちうこそ〳〵と傍へ寄添うて、何やら囁きかけるのであつた。けれど、こちらは殆ど

何一つ答へずに濟ましたが、時々いゝ加減にして追拂ふために、何やらいま〳〵しげに呟くぐらゐのものだつた。

シガーレフとギルギンスキイは、ピョートルより少し早目にやつて來た。彼が姿を現はすや否や、二人は明かに前から企らんでゐたらしく、深い沈默を守りながら、少し脇の方へどいて了つた。ピョートルは提灯（ランタン）を揭げながら、無遠慮な人を馬鹿にした態度で、ぢつと穴の明くほど二人を見廻した。『何か言はうとしてるのだな。』といふ考へが、ちらと彼の頭を掠めた。

「リャームシンはゐないんですか？」と彼はギルギンスキイに訊ねた。「あの男が病氣だと言つたのは、誰です？」

「僕はこゝにゐますよ。」不意に木の陰から立現はれながら、リャームシンが答へた。

彼は暖かさうな外套を著て、その上からしつかり毛布に纏（くる）まつてゐたので、提灯を持つてゐながら、その顏がはつきり見分けられないほどだつた。

「ぢや、リプーチンがゐないだけですね！」

ところが、リプチーンものつそり洞（ほら）の中から出て來た。ピョートルは再び提灯（ランタン）をさし上げた。

「何だつて君はあんな處へもぐり込んだのだ、どうして出て來なかつたんだね！」

「僕はね、我々はすべて自分の……行動の自由を保有してると思ふ。」とリプーチンは呟いたが、自分でも何を言はうとしたのか、はつきり意識してゐないらしい。

「諸君、」今までの半ば囁くやうな會話の調子を破つて、ピョートルは始めて聲を張つた。そ

れがかなりの效果を奏したのである。「今となつて、何もぐづ〳〵いふ必要のない事は、諸君もよくご承知の事と思ひます。もうきのふ何もかもすつかり、直截明確に討議し、咀嚼したぢやありませんか。しかし、諸君の顏つきから察するところ、この中に誰か意見の發表を望む人があるやうに思はれます。もしさうだつたら、早く願ひます。冗談ぢやない、時間は幾らもありやあしない。エルケリが今すぐもあの男を連れて來るかも知れないんですよ……」

「先生きつとあの男を連れて來るよ。」何のためかトルカチェンコが口を入れた。

「もし僕の思違ひでないとすれば、まづ始めに印刷機械の授受をやるのでせう?」またしても、何のためにこんな質問を發するのやら、自分でもはつきり分らないやうな調子で、リプーチンはかう問ひかけた。

「あゝ、勿論むだに棄てゝ了ふ必要はないさね。」とピョートルは彼の鼻先に提灯(ランクン)を突きつけた。「しかし、實際に授受をやる必要はないつて、昨日みんなで決めたぢやないか。あの男が自分で埋めた地點を、君に教へて置きさへすれば、後で我々が自分で掘出すさね。それは何でも、この洞の隅から十歩離れた處だ、といふ事だけは僕も聞いてるよ……が、そんなことはどうでもいゝが、君は何だつてそれを忘れたんだね、リプーチン君! あの時の打合せに依ると、まづ君が一人であの男を出迎へて、それから僕らが出て行く事になつてるんぢやないか……君が今さらそんなことを聞くのは變だね。それとも、たゞちよつと言つて見ただけなのかね?」

リプーチンは陰鬱な樣子をして、押默つてゐた。一同も口を噤んだ。風は松の梢を搖ぶつてゐた。

「しかし、諸君、僕は諸君のお〳〵が、自己の義務を履行される事と信じてゐます。」ピョートルはじれつたさうに沈默を破つた。

「僕はシャートフの處へ細君が歸つて來て、子供を生んだ事を正確に知つてるです。」突然ギルギンスキイがかう切り出した。昂奮してせか〳〵しながら、言葉もはつきりと發音できないで、頻りに身振り手眞似をするのであつた。「いやしくも人情を辨へてゐるものは……いま彼が密告する筈のない事を、固く信じていゝ譯です……なぜと言つて、彼はいま幸福に包まれてるんですからね……さういふ事情で、僕は先ほどみんなの處を廻つたけれど、誰も彼も不在だつたのです。かういふ譯で、今となつては、全然なにもする必要がないかも知れん、と思ふのです……」

彼は言葉を切つた。息がつまつたのである。

「ギルギンスキイ君、もし君がとつぜん幸福な身になつたとすれば、」ピョートルは彼の方へ一歩詰め寄つた。「そのとき君は密告なんて事は別としても、何か公民としての冒險的な行爲を延期しますか。それは幸福になる以前に企てたもので、危險とか幸福の喪失とかに拘らず、自己の義務と考へてゐるやうな行爲です。」

「いや、延期しない! どんな事があつても延期しないです!」何だか恐ろしく馬鹿げた熱心を表はしつゝ、ギルギンスキイは全身をむづ〳〵させながら、かう言つた。

「君は陋劣漢たらんよりも、寧ろ再び不幸の人たらん事を望むでせうね?」

「さうですとも、さうですとも……僕はそれどころか正反對に……ぜん〳〵陋劣漢たらん事を……いや、さうぢやない……決して陋劣漢ぢやない。つまり、陋劣漢たらんよりも、寧ろぜんぜん不幸の人たらん事を望みますよ。」

「ね、ところで、いゝですか、シャートフはこの密告を、公民としての義務と考へてる。自己の最も高遠な信念と思つてるのです。その證據には、自分でも幾らか政府に對して、危險を冒す事さへ厭はないぢやありませんか。尤も、あの男は密告のために、十分情狀酌量をして貰へるのは勿論だけれど……あゝいふ男は決して意を飜しはしない。いかなる幸福もこれに打勝つ事は出來ない。一日も經つたら、はつと目が醒めて、自分で自分を叱咤しながら、だんぜん素志を果すに相違ない。それに、あの男の細君が三年間の別居の後、スタヴローギンの子を生みに歸つて來たといふ事に、僕は何の幸福をも見出す事が出來ない。」

「しかし、誰ひとり訴狀を見た者がないぢやありませんか。」突然シガーレフが、一徹な調子で言ひ出した。

「訴狀は僕が見た。」とピョートルは怒鳴つた。「ちやんと出來てるのだ。しかし諸君、こんな事は實に馬鹿げ切つてるぢやありませんか！」

「が、僕は、」急にギルギンスキイが熱くなり出した。「僕は抗議します……全力を盡して抗議します……僕は……僕はかうしたいのです……あの男が來たら、僕等はみんな揃つて出て行つて、みんなであの男を詰問する。もし事實だつたら懺悔さして、あの男に立派に將來を誓はしたうへ、

放免してやる、とかういふ風にしたいのです。とにかく裁判といふ事は必要だ。萬事、裁判に依つて決しなきやならない。みんなが陰に隱れてゐて、不意に飛びかゝつて行くなんて……」

「誓ぐらゐで、共同の事業を危險に晒すのは、それこそ愚の骨頂です！　ばか〳〵しい、諸君今となつてそんな事を言ふのは、實に馬鹿げてるぢやありませんか！　一たい諸君はこの危急存亡の時に當つて、どんな役廻りが勤めたいのです？」

「僕は抗議する、抗議する。」とギルギンスキイは同じ事を繰返すのであつた。

「せめてさう怒鳴るのだけでも、やめてくれ給へ。信號が聞えないぢやないか。諸君、シャートフは……（ちよつ、いま〳〵しい、今となつて何といふ馬鹿げた話だ！）僕がもう前に言つた通り、シャートフは汎スラヴ主義者なのです。つまり、この世で一番ばかな人間の一人なのです……いや、しかしばか〳〵しい、そんな事はどうだつて構やしない、勝手にするがいゝ！　本當に君たちのお蔭で、僕も何が何だか分らなくなつて了つた……諸君、シャートフは世に拗ねた人間なんです。しかし、當人が望んでゐるゐないは別としても、やはりわが黨に屬してゐるのだから、僕は最後の瞬間まで共同の事業のために、あの男を拗ね者として利用する事が出來る、巧く使ひこなす事が出來る、とかう當てにしてゐたので、本部から嚴密な命令を受けてゐたにも拘らず、あの男を容赦して守つてゐたのです……僕はあの男の實際の價値よりも、百倍ぐらゐ餘計に容赦してやつた！　けれども、あの男は結局、密告なんか企てる事になつた。しかし、こんな事はばか〳〵しい、勝手にするがいゝ……ところで、いま誰でもこゝを拔出して見るがいゝ！　君

たちは誰一人だつて、この仕事を抛擲する權利を持つてやしないんだ！　そりや望みなれば、今あの男と接吻したつて構やしないけれど、共同の事業を一片の誓言などに委ねるなんて、そんな事をする權利は君たちにないのだ！　そんな眞似をするのは豚だけだ、政府に買收された間諜だけだ！」

「こゝに誰か政府に買收された者がゐるんですか？」齒の間から押し出すやうな聲で、リプーチンはかう言つた。

「君かも知れないよ。リプーチン君、君はいつそ默つてた方がいゝだらう。君はたゞそんな事を言つて見るだけなんだよ、いつもの癖でね。諸君、政府に買收された間諜といふのは、つまり危險に際して臆病風を吹かす連中です。恐怖といふやつは、いつでも馬鹿者を作り出すものです。こんな連中は最後の瞬間になると、いきなり警察へ駈けつけて、『あゝどうかわたくしだけはお助け下さい。仲間をみんな賣つて了ひますから！』と喚くんだ。しかし、諸君、いいですか、君達はもうかうなつて了つたら、幾ら密告したつて赦して貰へませんぞ。たとへ刑二等を減じられるとしても、それでもやはりめい〳〵西伯利亞ぐらゐ覺悟しなきやなりません。それにね、諸君は今一つの劍をも免れる事は出來ない。この劍は政府のよりも少し鋭いからね。」

ピ■ートルは憤りに驅られて、無駄な事まで喋り立てて了つたのである。シガーレフは決然として、三歩ばかり彼の方へ踏み出した。

「昨日の晩から、僕はとくと事態を熟考して見ました。」と彼は例の信ずる所ありげな、秩序

だつた語調で切り出した（見受けたところ、彼はたとへ足下の大地が崩れ落ちても、やはり聲を張上げたり、秩序だつた敍述の調子を變へたりしなかつたに相違ない）。「とくと事態を熟考した末、僕は次の結論に到著しました。いま企てられてゐる殺人は、單に貴重な時間の浪費であるばかりでなく（實際この時間は少し本質的な、直接的な方法で使用できるのです）、そればかりでなく、正軌（ノーマル）な道を逸した恐るべき彷徨であります。これは常に何よりも一ばん事業を茶毒し、數十年間その成功を遲らせてゐました。何となれば、純粹の社會主義者でなく、政治的色彩の勝つた輕率な人々の勢力に、屈伏するからであります。僕がこゝへやつて來たのは、現に企てられてゐる仕事に反對を唱へて、一同を覺醒せしむるために過ぎません。さうして、どういふ譯か君が危急の時と呼んでゐられる今の瞬間から、自分を除外するつもりなのです。僕が去るのは、この危險を恐れるからでもなければ、シャートフに對する感傷主義（センチメンタリズム）のためでもありません。僕は決して、あの男と接吻なんかしたくないです。たゞ〳〵この仕事が終始一貫して、僕自身の計畫（プログラム）に矛盾するからです。しかし、密告とか政府の買收とかいふ點に就いては、君はぜん〳〵安心して可なりです――密告などしやしません。」

彼はくるりと踵（くびす）を轉じて、すた〳〵歩き出した。

「畜生、あいつは途中であの連中に會つて、シャートフに告口をするに相違ない！」とピ■ートルは叫んで、いきなり拳銃を掴み出した。

かちりと引金を上げる音が聞えた。

「どうかご安心なさい。」再びシガーレフが振返つた。「僕は途中でシャートフに出會つたら、お辭儀ぐらゐするかも知れないが、告口なんかしやしないです。」

「君、分つてるだらうね。そんな事をしたら、それだけの報いを受けなきやならないよ、フリエー君。」

「斷はつて置きますが、僕はフリエーぢやありません。僕をあんな甘つたるい、抽象的な、煮え切らない理論家と混同する事に依つて、君はたゞ一つの事實を證明するに過ぎないです——ほかぢやありませんが、君は僕の原稿を自分の手に握つてゐながら、內容は全然わかつてゐないんです。ところで、君の報復に就いては、僕かう言つて置きませう。君が引金を上げたのは拙いですね。この場合君のために、かへつて不利ぢやありませんか。ところで、明日とか明後日とか言つて僕を脅すとすれば、君は僕を射ち殺すといふ事に依つて、餘計な手數のほか何物も得る所はありませんよ。僕を殺して見たところで、晩かれ早かれ、君は僕の主張に到達する譯ですからね。ぢや、さよなら。」

丁度この瞬間、二百步ばかり隔てた公園の池の方から、口笛の音が響き渡つた。リプーチンは昨日の打合せによつて、早速おなじやうにひうと一こゑ合圖を返した（彼は自分の亂杭齒の口が當てにならなかつたので、このためにわざ〳〵けさ市場で一ヵペイカ出して、土で燒いた玩具（おもちや）の笛を求めたので）。エルケリは前もつてシャートフに、合圖の口笛がある事を知らせて置いたので、彼は何の疑念も起さなかつた。

「心配ご無用です。僕はあの連中を避けて通るから、向うぢや少しも僕に氣がつかないでせう。」シガーレフは諭すやうな調子で囁いた。

それから、一かう足を速める樣子も急ぐ風もなく、彼は暗い公園を拔けて、いよ〳〵わが家をさして步き出した。

今ではこの恐ろしい出來事が、どういふ風に起つたかといふ事は、ごく細かい點までも一般に知れ渡つてゐる。最初リプーチンが洞のすぐ傍で、エルケリとシャートフを出迎へた。シャートフは彼に會釋もしなければ、手を差し出さうともせず、すぐせか〳〵と大きな聲で言ひ出した。

「さあ、一體しよべるはどこにあるんだね。そして、もう一つ提灯（ランクン）はないかしらん？　いや、心配する事はない、こゝにはまるで人つ子一人ゐやしないから。こゝからスクヴレーシニキイまでは、大砲をぶつ放したつて、大丈夫きこえやしないよ。あれはこゝにあるんだ。そら、こゝの所だ、丁度この下に……」

彼は實際、洞の後隅から森へ十步寄つた處を、足でとんと踏んで見せた。この瞬間、木陰からトルカチェンコが現れて、うしろから彼に飛びかゝつた。エルケリもおなじく後から彼の肘を摑まへた。リプーチンは前から跳りかゝつた。三人はすぐに彼の足をすくつて、地びたへ押しつけて了つた。そこへピョートルが例の拳銃（ピストル）を持つて飛び出した。話に依ると、シャートフは彼の方へ首を捩ぢ向けて、その顏を見分けるだけの暇があつたとの事だ。三つの提灯（ランクン）がこの場面を照らし出した。シャートフはとつぜん短い絕望的な叫聲を發した。けれど、いつまでも聲を立てさせ

てはゐなかつた。ピョートルは正確な手つきで、彼の額にしつかり強く拳銃(ピストル)を押し當てると——そのまゝ引金をおろした。發射の音は餘り大きくなかつたらしい。少くも、スクヴレーシニキイでは、誰ひとり耳にしたものがなかつた。勿論、シガーレフは聞きつけた。彼はやつと三百歩はなれるか、離れないかだつたので、叫聲も拳銃の音も耳にしたが、後で彼自身申し立てたところに依ると、後を振向きもしなければ、立止りさへしなかつたとの事である。殺害は殆ど瞬間的に行はれた。

十分に實際的の能力——冷靜な落ちつきといふ譯には行かぬ——を保有してゐたのは、たゞピョートル一人だけだつた。彼はその場に蹲(しゃが)みながら、忙しげな、とは云へしつかりした手つきで死人の衣嚢(ポケット)を捜しにかゝつた。金はなかつた（金入はマリイの枕の下に置いて來たのである）。二三枚のつまらない紙きれが出て來たが、一つは事務所から來た手紙で、一つは何かの本の目次、いま一つは古い外國の酒屋の勘定書だつた。どうしてこんなものが二年間、衣嚢(ポケット)の中で無事に殘つてゐたのか、不思議なくらゐである。この紙きれを、ピョートルは自分の衣嚢(ポケット)に收めたが、ふとみんな一つ處に固まつたまゝ、なんにもしないで、ぽかんと死骸を眺めてゐるのを見ると、急に毒々しく不作法な調子で罵りながら、一同を急きたて始めた。トルカチェンコとエルケリは、我に返つて驅け出したが、忽ち洞窟の中から、もう今朝ほど用意して置いた石を、二つ持つて來た。石はどちらも二十斤くらゐ重さがあつて、もうちやんと支度が出來てゐた。つまり、固くしつかり繩が掛けてあつたのだ。

死骸は、手近かの（第三の）池まで持つて行つて、その中へ沈める事に、手筈が決つてゐたので、人々は足と頸に石を縛り附け始めた。それを縛り附けるのはピョートルの役目で、トルカチェンコとエルケリは、たゞ石を抱へてゐて、順々にそれを差し出すだけだつた。エルケリが始めに石を渡した。ピョートルがぶつ〳〵言つたり、罵つたりしながら、死骸の足を繩で縛つて、それに石を括り附けてゐると、トルカチェンコはこのかなり長い間、さあと云へばすぐ渡されるやうに、恭しげに上半身をぐつと前へ屈めながら、ぢつと石を兩手に抱へたまゝ、ちよつとでもこの厄介ものを下へおろしとかうなどとは、一度も考へなかつたのである。やつと二つの石が縛り附けられて、ピョートルが地びたから身を起しながら、一同の顏を透し見ようとした時、そのとき突然、まるで思ひも寄らぬ一つの奇怪事が生じて、一同の膽を挫いたのである。

前にも言つた通り、トルカチェンコとエルケリをのけたほか、一同は殆ど何もしないで、ぼんやり立つてゐた。ギルギンスキイは、みんながシャートフに飛びかゝつたとき、同樣に跳り出すには跳り出したが、シャートフには手を掛けないで、彼を取抑へる手傳ひもしなかつた。リャームシンは、もう拳銃(ピストル)が鳴つてしまつてから、一同の間に姿を現はした。やがて十分ばかり、死骸の始末でごた〳〵してゐる間、一同はまるで自意識を一部分取落したやうであつた。彼らは輪を作つて、一ところに固まつてゐたが、不安とか心配とかいふよりも、今はたゞ驚愕の念のみに囚はれてゐるらしかつた。リプーチンは誰よりも前に出て、死骸のすぐ傍に立つてゐた。ギルギンスキイは何か一種特別な、まるで人事のやうな好奇の色を浮かべながら、リプーチンの肩ごしに

覗き込んでゐたばかりか、爪立にまでなつて、よく見透さうと努めてゐた。リャームシンはギルギンスキイの後に隱れて、時々おつかなびつくりで覗いて見ては、すぐにまた隱れて了ふのであつた。ところが、死骸に石を括り附けて、ピョートルがやをら立上つたとき、ギルギンスキイは突然からだを小刻みにぶる〳〵慄はせながら、兩手をぱちりと鳴らし、喉一杯に聲を張上げて、悲しさうに叫んだ。

「これは違ふ、まるで違ふ。いけない、まるつきり違ふ！」

彼はこの遲蒔な叫聲に、まだ何か附け足したかも知れなかつたのだ。けれど、リャームシンはしまひまで言はせなかつた。だしぬけに後ろからギルギンスキイを掴んで、力任せに締めつけながら、何かたうてい想像も出來ないやうな聲で喚き始めた。よく人が烈しく驚いた時には、突然いままで思ひも染めなかつたやうな、まるで借物みたいな聲を立てる事がある、それがどうかすると、物凄いほどに思はれるものだ。リャームシンは全く人間と思はれない、獸のやうな聲で叫び出したのである。痙攣的な發作に驅られて次第に強く、兩手で後からギルギンスキイを締めつけながら、彼は一同の方へ向いて眼を剝出し、口をうんと大きく開けたまゝ、絶えずやみ間なしに黃色い聲を立てゝ叫んだ。そして、まるで太鼓で雨垂拍子でも打つやうに、兩足を細かくばたばたと刻むのであつた。ギルギンスキイはすつかり面くらつて、自分でも氣ちがひのやうに喚き出した。そして、ギルギンスキイとしては思ひがけない、思切つて意地の惡さうな物凄い形相で、うしろへ手の屆く限り、リャームシンを引搔いたり、叩いたりしながら、その手から遁れようと

跪き始めた。エルケリも傍から手傳つて、やつとリャームシンを捥ぎ放した。

けれど、ギルギンスキイが度膽を拔かれて、十歩ばかり傍の方へ飛びのいた時、リャームシンは不意にピョートルに氣がついて、再び黃色い叫聲をあげながら、こんどは彼を目ざして飛びかかつた。思はず死骸に躓くと、彼はそのまゝ死骸を飛越えて、ピョートルに倒れかゝつた。そして、相手の胸に頭を押し當てながら、しつかり兩手に抱へ込んで了つたので、ピョートルも、トルカチェンコも、エルケリも、ちよつと最初どうもする事が出來なかつた。ピョートルは怒鳴りつけたり、罵つたり、拳固で頭を撲つたりしながら、到頭やつとの事で捥ぎ放すと、いきなり拳銃を取り出して、依然として喚き續けるリャームシンの開いた口へ向けて、まともに狙ひを定めた。トルカチェンコとエルケリとリプーチンは、もうしつかりリャームシンの兩手を掴まへてゐた。けれどリャームシンは、拳銃をさし向けられてゐるのに、いつまでも叫び續けるのであつた。到頭、エルケリが自分の手巾を丸めて、巧みに彼の口へ押し込んだ。かうして、やつと叫び聲は杜絶えたのである。トルカチェンコはその間に、殘つた繩の切端で、彼の兩手を縛り上げてしまつた。

「これは實に奇體だ。」不安な驚愕に打たれて、この氣ちがひを見廻しながら、ピョートルはかう言つた。

彼は見受けたところ、だいぶ度膽を拔かれたらしい。

「僕はあの男の事を、まるで別な風に考へてゐた。」彼は考へ深さうに附け足した。

一時この男の傍へ、エルケリを附けて置く事にした。まづ何よりも、死人の始末を急がなければならなかつた。ずゐぶん大きな聲で長い間わめいたので、どこかで聞き附けた者があるかも知れない。トルカチェンコとピョートルは提灯(フンタン)を取上げて、死骸の頭に手を添へた。リプーチンとギルギンスキイは足を持つて、やがて一同は歩き出した。二つの石をつけたこの荷物はずゐぶん重かつた。それに距離は二百歩以上あつた。中で一ばん力もちは、トルカチェンコだつた。彼は、歩調を揃へたらよからうと注意したが、誰一人それに答へるものはなかつた。で、人々は出たらめに歩いたピョートルは右側から歩いて行つた。そして、すつかり前へのめりながら、死人の頭を肩に擔いで、右手で石を下から支へてゐた。トルカチェンコは道のり半分ばかりの間、その石を支へる手助けをしようなどと、まるで氣がつかなかつたので、ピョートルはたうとう罵聲を交へながら、彼を怒鳴りつけた。その叫聲は極めて唐突で、淋しかつた。一同は無言のまゝ運び續けた。やつと池の傍まで來た時、ギルギンスキイは荷物の重みに疲れたやうに、妙に背中を屈めながら、前と同じ高い泣くやうな聲で出しぬけにかう叫んだ。

「これは違ふ、いけない、いけない、これはまるつきり違ふ！」

彼らが死人を運んで來たこの第三の、かなり大きな、スクヴレーシニキイの池は、公園の中でも一ばん荒寥とした場所で、殊にこの頃のやうな晩秋の頃になると、殆ど訪れる人とてもなかつた。池もこちらの端になると、岸に草が生え茂つてゐた。人々は提灯(フンタン)を置くと、死骸を二つ三つ振つて、池の中へ抛り込んだ。鈍い音が長く尾を曳いた。ピョートルは提灯(フンタン)を取上げた。つゞいて

一同も身を乘出しながら、死骸の沈んで行くさまを、物珍しさうに見透したが、もうなんにも見えなかつた。石を二つ附けた死體は、すぐに沈んで了つた。水の表面に起つた大きな波紋は、みるみる中に消えて行つた。もう事は終つた。

「諸君、」ピョートルは一同に向つて、かう言つた。「これでもう我々は別れるのです。疑ひもなく諸君は、自由な義務の遂行に伴ふ自由な誇りを、感じてゐられる事と思ひます。もし遺憾にも今この際、さういふ感覺を味ふべく、餘りに昂奮してゐられるとすれば、明日は間違ひなく感得されるに相違ありません。明日それを感得しないのは、もう恥です。ところで、あの醜惡を極めたリャームシンの昂奮に到つては、僕は單に熱に浮かされたものと見做して置きます。まして本當にあの男は、今朝から病氣だといふ話ですからね。それからギルギンスキイ君、君はほんの一分間でも、自由な氣持で省察して見たら、共同の事業のためには、誓など當てに行動する譯に行かない、どうしても僕らのやつたやうにしなきやならない、といふ事が分つて來るでせう。實際、訴狀があつたといふ事は、結果が君に示してくれますよ。僕は君の叫んだ言葉を忘れる事にしませう。危險なんかつて、そんなものは斷じてありません。誰にもせよ、僕らに嫌疑をかけようなどとは、思ひも寄らないこつてすよ。殊に、君がたが上手に立廻つたら、なほさらです。なぜと言つて、大切な點は要するに、君がたと君の十分な信念にかゝつてるんだからね。君がたはこの信念を、明日にもさつそく獲得される事と囑望します。しかるに、君がたは目下共同の事業のために、互に精力を分ち合ひ、必要に應じては、互に注意監督するの目的をもつて、同志の自

由結社たる獨立の機關に入つてをられる。從つて、君がたは一人々々、最高の責任を帶びてゐる譯なのです、停滯のために惡臭を發する、古ぼけた事物を一新するの使命を持つてゐるのです。これは勇氣を失はないために、いつも念頭に置いて貰ひたいです。目下のところ君がたの進むべき道は、たゞ一切の破壞——國家とその道德の破壞あるのみです。その破壞の後には、あらかじめ權力の繼承を期してゐる我々ばかりが殘る事になる。さうして、賢者は自分たちの仲間に加へ、愚者はどん〳〵馬蹄にかける。それを君がたは心苦しく思つてはいけない。自由を辱しめないやうにするためには、一代の人間を鍛へ直さなければならない。これから先でも、まだ幾千人のシャートフが、進路に横たはつてゐる事でせう。我々は、大體の方向を摑むために團結したのです。だから、のん氣さうに臥そべつて、ぼんやり口を開けながら、僕らを見てゐるやうなやつを、手で拾ひ上げないのは、寧ろ恥辱なくらゐです。

「これから、僕はキリーロフの處へ行きます。そして、明日の朝までに例の遺書が出來る譯です。それはあの男が死に臨んで、政府に對する辯明書といふ意味で、一切を自分に引受けてくれるのですが、何しろこれくらゐ眞しやかな組合せはほかにありやしませんよ。第一に、あの男はシャートフと仲が惡かつた。二人は亞米利加で長く一緒に住んでゐたのだから、その間には喧嘩ぐらゐしたに相違ない。またシャートフが變節した事も、遍く知れ渡つてゐる。して見ると、主義上の敵視、密告を恐れての敵視といふやつが、あるに違ひない——つまり、たうてい妥協の道のない敵視なのです。これがすつかり遺書の中に書込まれるわけですよ。まだその上に、あの

男の住んでゐるフィリッポフの持家に、フェーヂカが寢起きしてゐることも書かせます。かういふ譯で、我々に對する嫌疑は悉く排除される譯です。なぜつて世間の間拔けどもは、すつかり五里霧中に彷徨するに決つてるから。ところで諸君、明日はもう僕らは會ふ事が出來ません。僕はほんのちよつとの間、郡部の方へ出かけなければならないのです。明後日になれば、諸君に新しい報告を傳へる事が出來ます。なるべくならあす一日、君がたは家に籠つてゐる方がいゝですよ。さてこゝで僕等は二人づゝ、違つた道を行く事になりますね。トルカチェンコ君、君はお願ひだから、リャームシンの面倒を見て、家へ送り屆けてくれ給へな。君なら、あの男に勢力があるから。それに第一、あんな氣の狹い事では、どれだけ自分を害ふ事になるか知れないと、よくあの男に言聞かしてもらひたいね。それから、ギルギンスキイ君、君の親戚のシガーレフ君の事は、僕も君自身と同樣に、少しも疑念を挾まないです。あの人は密告などしやしない。たゞあの人の行動を惜むのみです。しかし、あの人はまだ退會を宣言した譯でないから、あの人を葬るのは尙早です。ぢや、諸君少しも早く、幾ら間拔なやつ等だと言つても、やはり用心に如くはないです……」

ギルギンスキイは、エルケリと一緒に歸る事となつた。エルケリは、リャームシンをトルカチェンコに引渡すとき、彼をピョートルの處へつれて來て、この男はもう正氣に返つて、自分の行爲を後悔してゐる。あの時はどうしたのか、自分でも憶えてゐないほどだと告げた。

ピョートルはたゞひとり迂路を取つて、公園の外に當る池の向う側を歩いて行つた。驚いた事

には、もうおほかた半分道も來た頃に、リプーチンが後から追ひかけた。

「ピョートルさん、リャームシンはきつと密告しますぜ！」

「いや、あの男は今に正氣に返つて、もし密告なぞしたら、自分で一番に西伯利へ行かなきやならない、といふ事に氣がつくでせうよ！　もう今となつては、誰ひとり密告するものはない。君だつてしやしません。」

「ぢや、あなたは？」

「言ふまでもない、もし君らが裏切りしようと思つて、ごそとでもするが早いか、僕は君達をみんな片づけて了ふから。君だつてそれはご承知だらう。しかし、君は裏切りなんかしない。一たい君はたつたそれだけの事で、二露里も僕の跡を追つかけて來たんですか！」

「ピョートルさん、ねえ、ピョートルさん、僕らはもう永久に會はれないかも知れませんね！」

「何だつて君はそんな事を言ひ出したんです！」

「ねえ、僕はたつた一つ聞きたい事があるんですが。」

「一たい何です？　尤も、僕は君にとつとと行つて貰ひたいんだがなあ。」

「たつた一つ、けれど、正確な返事が聞きたいんです。僕らの五人組は、世界中でたつた一つきりでせうか、それとも、こんな五人組が何百もある、といふのが本當でせうか！　僕は一段高い見地から聞いてるんですよ、ピョートルさん。」

「それは君の昂奮した樣子で分るよ。君はリャームシンより、もつと危險な人間だつて事が、

自分でも分つてますかね！」

「分つてます、分つてます、しかし――返事は、あなたの返事は！」

「君は馬鹿な男だねえ！　もう今となつたら、五人組なんか一つだらうが、千だらうが、君に取つては同じ事だらうに。」

「ぢや、一つきりなんだ！　僕もさうだらうと思つてた！」とリプーチンは叫んだ。「僕はもう始終、いまの今まで、一つきりだらうと思つてゐた……」

かう言ひ捨てて、彼はもう次の返事を待たないで、くるりと踵を轉じると、そのまゝ闇の中に消えて了つた。

ピョートルはちよつと考へ込んだ。

「いや、誰も密告しやしない。」彼はきつぱりとかう言つた。「しかし、集團はやはりどこまでも集團として、命令に服從しなくちやならない。それでなければ、俺はやつらを……しかし、何といふやくざな野郎どもだらう！」

二

彼はまづ自宅へ立寄つて、悠々と几帳面に鞄を詰めにかゝつた。朝の六時には、急行列軍が立つ事になつてゐた。この急行は一週に一度しか出ないそれもごく最近、當分のあひだ試驗的に、運轉して見る事になつたばかりである。ピョートルは仲間の者に、ちよつと暫く郡部の方へ出か

けると斷はつたが、實際あとで判明した所に依ると、彼の目算はぜん〳〵別だつた。鞄の方の始末をつけると、もう前もつて出立を知らせて置いた主婦に拂を濟まして、停車場近く住つてゐるエルケリの處へ、辻馬軍を傭つて出かけて行つた。それからほゞ夜中の二時ちかい頃、キリーロフのところへ行つた。やはり例のフェーヂカの拵へた、祕密の拔け穴から忍び込んだのである。

ピョートルは恐ろしい氣分になつてゐた。彼に取つて非常に重大な二三の不滿を別にして（彼はいまだにスタヴローギンの事を、何一つ探り出せなかつたので）、彼はこの日の中にどこからか（多分ペテルブルグからだらう）、近い將來に自分を待受けてゐる或種の危險に關して、祕密な通知を受けたらしいのである（かういふ曖昧な言方をするのは、わたし自身も明確にさうと斷言できないからなので）。勿論この時分の事に就いては、今だに町で昔噺めいた噂が、いろ〳〵と行はれてゐる。けれど、もし何か正確な事を知つてる人があるとすれば、それはたゞその筋の人くらゐのものである。わたし一個の想像するところでは、ピョートルは實際この町以外、どこかにまだ脈絡を保つてゐて、事實さういふ所から情報を得たものらしい。それどころか、リプーチンの皮肉で絶望的な疑ひに反して、彼は本當にこの町以外の土地、例へば兩首都あたりで、二三の五人組を組織してゐたものと、かうわたしは信じてゐる。たとへ五人組と言へないまでも、いろんな關係や聯絡があつたに相違ない——しかも非常に突飛なものかも知れない。

彼の出發後三日とたゝない中に、即時かれを捕縛するやうにといふ命令が、この町に達した。それはどういふ事件のためか——この町の出來事か、それともまたほかの事か、その點はわたし

にも分らない。この命令は、丁度かの神祕的な意味深い大學生シャートフの慘殺（それはこの町に續けて起つた怪事件の頂點を示すものであつた）と、この事件に伴ふさま〳〵な謎めいた事情が發見されたため、町の官憲を始めとして、今まで頑なに輕佻な態度を持して來た社交界を、俄然あらしのやうに襲つた神祕的な恐怖の印象を、一さう強めたのである。しかし、命令の來やうが遲かつた。ピョートルはもうそのとき名前を變へて、彼得堡に忍んでゐたが、少し怪しいと嗅ぎつけると、すぐ外國へ辷り拔けて了つた……が、わたしは恐ろしく先廻りをしたやうだ。

彼は意地惡さうな、喧嘩腰ともいふべき顏つきで、キリーロフの部屋へ入つて行つた。彼は主な用むき以外に、また何やら個人的にキリーロフに癇癪を吐き出して、何かの敵討でもしたさうな風つきだつた。キリーロフは彼の來訪を悅ぶやうに見えた。彼は恐ろしく長いあひだ、病的な焦燥を抱きながら、彼を待設けてゐたのである。その顏はいつもよりもつと蒼褪めて、暗色の眼ざしは重々しく据はつてゐた。

「僕はもう來ないかと思つてた。」と彼は重苦しくかう言つたが、長椅子の隅に坐つたまゝ、出迎へに身を動さうともしなかつた。

ピョートルはその前に立ちはだかつて、何かロを切るより先に、ぢつと相手の顏に見入るのであつた。

「つまり、萬事きちんとなつてるんですね。例の決心を飜すやうな事はありませんね、いや、豪い！」彼は人を馬鹿にしたやうな、如何にも保護者氣取の微笑を浮かべた。「で、どうです。」

と彼は厭味なふざけた調子で附け足した。「少しくらゐ遲れたつて、何も君が不足をいふ譯はないぢやありませんか。僕は君に三時間めぐんで上げたんですからね。」

「僕はそんな餘計な時間なんぞ、君から惠んで貰ひたくないです。それに、君なんか僕に惠む事が出來るものか……ばか！」

「なに！」とピョートルは言ひかけたが、すぐに自分で自分を制止した。「何といふ怒りつぽい人だらう！　おや〳〵、僕らは啀み合つて了つたぢやありませんか！」依然として人を馬鹿にしたやうな、高慢ちきな態度で、彼は一語々々刻むやうに言つた。「かういふ場合には、どつちかと言へば、落ちつきの方が必要ですね。まあ、自分がコロンブスになつた氣で、僕なんかは鼠か何ぞのやうに思つて、腹を立てないのが一番いゝですよ。それは僕きのふもお勸めしたんですがね。」

「僕は君を鼠か何ぞのやうに思ひたくない。」

「それは何です、お世辭ですか？　尤も、お茶も冷たくなつてる――して見ると、何もかも滅茶滅茶なんですね。いかん、どうも賴りなささうな事がもちあがつてるやうだ。おや！　あの窓の上に何やらある。ほら皿の中に（彼は窓に近寄つた）。ほゝう、米と一緒に煮た鷄肉ですな！……だが、どうして今まで手が附けてないんだらう！　はゝあ、なるほど、僕らはいま鷄肉も喰べられないやうな氣分になつてるんですね……」

「僕は喰べたよ。君の知つた事ぢやない、默つてゐ給へ！」

「おゝ、勿論、それに、どつちにしたつて同じ事ですからね。しかし僕に取つてはいま同じ事ぢやないんですよ。ねえ、僕はまだ殆ど食事をしてゐないから、もし僕の想像通り、もうこの鷄肉が君に不用だとすれば、ね！」

「もし喰べられゝばやり給へ。」

「それは有難い。それから後でお茶もね。」

彼はさつそく長椅子の反對側に陣取つて、恐ろしくがつ〳〵した樣子で、喰物に飛びかゝつた。しかしそれと同時に、絶えず自分の犧牲を觀察してゐた。キリーロフは毒々しい嫌惡の色を浮かべて、まるで目を離すことが出來ないかのやうに、ぢつと瞬きもせず彼を見つめるのであつた。

「ときに、」依然として貪り續けながら、ピョートルはどつぜん身を反らした。「ときに、用件の方は！　僕らは決心を飜しやしないんですね、え！　ところで、遺書は！」

「僕は今夜いよ〳〵、どうなつたつて同じ事だと決めて了つた。書くよ。檄文の事だね？」

「えゝ、檄文の事も。尤も、僕がすつかり口授しますよ。一たい君はこんな間際になつても、遺書の內容なぞが氣になるんですか？」

「君の知つたこつちやないよ。」

「むろん僕の知つたことぢやない。尤も、たゞの二三行でいゝんですがね。まあ言つて見れば、君がシャートフと一緒に檄文を撒散らしたことや、それには君の宿に隱れてゐたフェーヂカの力を借りた事だの……この最後の點、つまりフェーヂカと宿の事は、極めて重要なんです。一ぱん

重大なと言つていゝくらゐ。ねえ、ご覽なさい、僕あなたにはぜん〳〵開けつ放しでせう。」

「シャートフ！　何のためにシャートフの事なんか！　僕は決してシャートフの事なんか……」

「ほうらまた、一たい君に取つてどうだと言ふんです！　もうあの男の害になる事なんかしようたつて出來ないのですよ。」

「あの男の所へは細君がやつて來たんだ。さつき細君が目を醒して、あの男の居どころを僕の處へ聞きに寄越したんだ。」

「細君が君の所へ、あの男の居どころを聞きに寄越したんですつて！　ふん……それは拙いなあ。多分また使を寄越すだらう。僕がこゝにゐる事は、誰にも知らしちやいけないんです……」

ピョートルは氣を揉み出した。

「細君は知りやしない、また寢てるんだから。あの女のところには產婆がゐる、アリーナ・ギルギンスカヤが。」

「そ、その通り……しかし、聞き附けやしないでせうね！　入口に鍵をかけなくつてもいゝでせうか？」

「決して聞きつけやしない。もしシャートフが來たら、君をあつちの部屋へ隱して上げる。」

「シャートフは來やしません。そこで、君は裏切りと密告のために……今夜あの男と喧嘩をして……それがあの男の死因となつた、とかう書いて貰ふんですよ。」

「あの男が死んだ！」キリーロフは長椅子から跳り上りながら、かう叫んだ。

「今夜の七時すぎ、といふより、寧ろ昨夜の七時すぎですな。今はもう十二時すぎてますからね。」

「それは貴樣が殺したんだ！……それは僕も昨日から見拔いてゐた！」

「見拔かずにゐられるものですか？　ほら、この拳銃でね（彼はいかにもちよつと見せるためらしく拳銃を取出したが、もうそれつきり藏はうとしないで、いつでも用意が出來てゐるやうに、引續いて右手にぢつと持つてゐた）。しかし、君は奇妙な人ですね、キリーロフ君、あの馬鹿な男の最後がかうなるに決つてゐたのは、君も自分で承知してたんぢやありませんか。この場合、見拔くも何もあつたものぢやない。僕はもう何遍となく、君に嚙んで含めるやうに言つたんですよ。シャートフは密告を企てたので、あの男を監視してゐた。ところが、どうしても打つちやつて置けなくなつたのです。それに、君だつて監視の命令を受けたんですよ。現に三週間前、君が自分で僕に知らせてくれたぢやありませんか……」

「默れ！　貴樣があの男を殺したのは、あの男がジュネーヴで貴樣の顏に、唾を吐きかけたからなんだ！」

「それもあるし、またほかにもあるんです。色々ほかの原因があるんですよ。しかし、一さい私憤なしにやつた事です。何だつてさう飛び上るんです！　何のために芝居めいた所作をするんです！　ほゝう！　なるほど君はこんな事にまで！……」

彼は跳ね起きて、拳銃を前へ差し出した。それはかういふ譯なのである。キリーロフがだしぬ

けに、もう今朝から用意して裝塡してあつた自分の拳銃を、窓の上から取り上げたのだ。ピョートルは身構へをして、自分の武器をキリーロフに差し向けた。こちらは毒々しく笑ひ出した。

「白狀しろ、惡黨め、貴樣が拳銃を取り上げたのは、僕が貴樣を射つかと思つたからだらう……僕は貴樣なんか射ちやしない……尤も……尤も……」

かう言ひながら、彼は自分が相手を射ち倒す光景を想像する、その快感をむざ〳〵棄て兼ねるやうに、狙ひでも定めるやうな恰好で、再びピョートルに拳銃をさし向けた。ピョートルはやはり身構へをしたまゝ、ぢつと待ち構へてゐた。自分で先に彈丸を額に受ける危險を冒しながら、最後の瞬間まで待設けてゐた。實際こんな『氣ちがひ』だから、さういふ事があるかも知れないのだ。けれど『氣ちがひ』はたうとう手を下した。そして、せい〳〵息を切らして、身を慄はせながら、物を言ふ氣力もなかつた。

「ちよつと巫山戲て見たんです。もう澤山。」とピョートルも拳銃を下した。「君が巫山戲てるつて事は、僕もちやんと承知してましたよ。たゞね、君は冒險したんですよ。僕は引金を下す事も出來たんですからね。」

彼はかなり平然と長椅子に腰を下し、自分で杯に茶を注いだ。尤も、その手は幾らか慄へてゐた。キリーロフは拳銃を卓の上に置いて、部屋の中をあちこち歩き出した。

「僕はシャートフを殺したとは書かない。そして……今はもう何も書きやしない、書置きなんか拵へないよ！」

「拵へない？」

「拵へない。」

「何といふ卑怯な事だ、何といふ馬鹿げた事だ！」ピョートルは憤怒の餘り眞蒼になつた。

「尤も、僕はこれを見拔いてゐた。ねえ、出し拔けに僕の度膽を拔かうたつて、そりや駄目ですよ。しかし、どうともご勝手に。もし無理に君を强制できるものなら、さうもしたんだがなあ。だが、君は卑怯者だ。」ピョートルはだん〳〵我慢が出來なくなつて來た。「君はあの時われわれから金を無心して、むやみにいろんな事を約束したぢやないか……が、それにしても、僕は何か結果を握らなきや、出て行かないよ。少くも、君が自分で自分の額を、打ち割るところでも見なきやね。」

「僕は貴樣に今すぐ出て行つて貰ひたいのだ。」とキリーロフはしつかりした足どりで、彼の眞正面に立止つた。

「いや、それはどうしても出來ませんよ。」とピョートルはまたもや拳銃に手をかけた。「おほかた君は今つらあてと臆病のために、何もかも中止して了つてさ、また金でも握るつもりで、明日あたり密告に行く氣になつたんだらう。だつて、さうするとお禮が貰へるものね。畜生、君のやうな小人輩は、どんな事でもし兼ねないからなあ！　たゞ心配はご無用ですぜ。僕はあらゆる場合を豫想してるんだから。もし君が臆病風を吹かして、あの決心を翻すやうな事があつたら、シャートフの畜生と同樣に、君の頭の鉢を打割らずにや歸らないんだ、いま〳〵しい！」

「貴樣はどうしても僕の血まで見たいんだな？」

「僕は意地で言つてるんぢやありませんよ。考へてもご覽なさい、僕に取つちや同じ事なんですぜ。僕はたゞ共同の事業に就いて、安心がしたいからこそ言ふんですよ。人間といふものは當てにならない、それは君もご承知の通りです。一たい君の自殺の妄想はどういふ點に存するのか、僕には一向わからない。これは何も、僕が君のために考へ出したのぢやなくつて、君が自分で、僕に會ふ前から、思ひついたんぢやありませんか。しかも、それを始めて聞かされたのは僕ぢやなくつて、外國にゐる會員連だつたんですからね。それに、ご注意ねがひたいのは、誰も强制的に君から聞き出したのでない、といふ事です。その會員連は、當時まるで君を知らなかつたのに、君が自分の感傷癖から勝手にやつて來て、打明けたんぢやありませんか。ねえ、當時きみ自身の提言によつて（いゝですか、きみ自身の提言によつてですよ！）君の承諾を經て、この町に於ける我々の運動計畫を、君のこの決心の上に築き上げたんですからね、どうも仕樣がないぢやありませんか。今となつて、それを變更する譯にや行きませんよ。君は今さういふ地位に身を置いて、餘りたくさん餘計な事を知り過ぎてるんです。だから、君が馬鹿げた了見を起して、明日にも密告に出かけるやうな事があれば、それは我々に取つて不利益ぢやありませんか。この點をどうお考へになります？　いけませんぜ、君は義務で縛られてるんですよ、誓を立てたんですよ。金を取つたんですよ。これは君だつて、どうしても否定する譯に行きませんぜ……」

ピョートルは恐ろしく熱くなつて了つた。けれどキリーロフは、もうだいぶ前から耳を貸してゐなかつた。彼は物思はしげに部屋の中を歩き廻つてゐた。

「僕はシャートフが可哀さうだ。」再びピョートルの前に足をとめながら、彼はかう言ひ出した。

「そりや僕だつて可哀さうですよ。一體……」

「默れ、惡黨め！」もはや疑ふ餘地もない恐ろしい身振をしながら、キリーロフは咆えるやうにかう喚いた。「打殺すぞ！」

「ま、ま、ま、それは嘘ですよ。その通り、少しも可哀さうな事はないです。さあ、もう澤山、澤山ですよう！」ピョートルは手を前の方へ差延ばしながら、心配さうにちよつと腰を持上げた。

キリーロフはとつぜん靜かになつた。そして、再びこつ〳〵と歩き出した。

「僕はもう延ばしやしない。僕はどうしてもいま自殺したいのだ。みんな卑劣漢ばかりだ！」

「いや、それは確かですね。もちろん誰も彼も卑劣漢ばかりで、立派な人間はこの世界で暮すに堪へられないから……」

「ばか、僕もやはり君と同じやうな、ほかの連中と同じやうな卑劣漢だ、立派な人間ぢやない！」

「たうとう氣がつきましたね。キリーロフ君、一たい君はそれだけの理性を持つてゐながら、今まで氣がつかなかつたんですか？　誰だつてみんな同じやうなものですよ。この世には、善人も惡人もありやしない、たゞ賢い者と馬鹿なものがあるだけです。もしみんな卑劣漢ばかりだと

すれば(尤も、そんな事は下らない話ですがね)、當然卑劣漢にならずにやゐられないぢやありませんか。」

「あゝ！　君は本當に冷かしてるんぢやないのかい？」キリーロフはちよつと驚いた樣子で相手を見つめた。「君は熱心に正直な態度で……一たい君みたいな男でも信念を持つてるのかね？」

「キリーロフ君、僕はなぜ君が自殺しようと云ふのか、どうしても合點が行かなかつたです。たゞ信念、堅い信念……から出た事だけは分つてますがね。が、もし君が何といふか、その衷心を披瀝したいといふ要求を感じるなら、僕は喜んで聽きますよ……たゞ時間の點に氣をつけなくちや……」

「何時だね？」

「おゝ、ちやうど二時です。」とピョートルは時計を眺めて、卷煙草に火をつけた。

『まだ話を附ける事が出來さうだて。』と彼は腹の中で考へた。

「僕は何も君なんぞに言ふ事はない。」とキリーロフは呟いた。

「僕は何でも、神の話があつたやうに覺えてますよ……ねえ、いつか君が說明してくれた事があるぢやありませんか、確か二度までもね。もし君が自殺したら、君はそのまゝ神になる、といつたやうな事でしたねえ？」

「あゝ、僕は神になるんだ。」

ピョートルはにこりともしないで、ぢつと待つてゐた。キリーロフは微妙な表情で、彼を見つめた。

「君は政治詐欺師で陰謀家だ。君は僕を哲學と熱情の境へ誘き出して、和睦を成立させ、さうして僕の怒りを紛らして了はうと思つてるのだ。和睦が成立したとき、僕がシャートフを殺したといふ遺書を、ねだり取る魂膽なのだ。」

ピョールは如何にも自然らしい、素直な調子で答へた。

「まあ、僕が假りにそんな卑劣漢だとしても、最後の瞬間になつたら、そんな事はどうでもいいぢやありませんか、キリーロフ君？　ねえ、一たい僕らは何のために爭論してるんでせう、一つ伺ひたいもんですね。君はさういふ人間だし、僕はまたかういふ人間なんです。それがどうしたといふんでせう？　それに二人ながらおまけに……」

「卑劣漢だ。」

「さう、或は卑劣漢かも知れない。君だつてそんな事は、たゞの言葉だといふことを、承知してるぢやありませんか。」

「僕は一生涯の間、これがたゞの言葉でないやうに願つてゐたのだ。僕はさうあらせたくないと思ふからこそ、これまで生きてゐたのだ。今でも毎日のやうに、たゞの言葉でないやうにと願つてゐるのだ。」

「仕方がないですね、めい〳〵がよりよい居場所を搜してるんだから。魚は……いや、つまり、どんな人でも自分流に、それ〴〵愉樂を求めてるんです。それだけの事でさあ。ずうつと昔から、

知れ切つた事ですよ。」

「君は愉樂といふんだね？」

「まあ、言葉爭ひなんかしたつて、仕方がないぢやありませんか。」

「いや、君は巧い事を言つたよ。ぢや、愉樂として置かうよ。神は必要だ、だから存在すべきだ。」

「ふん、それで結構ぢやありませんか。」

「けれど、神は存在しない、かつ存在し得ないといふ事を、僕は確かに知つてるんだ。」

「その方が一さう正確ですな。」

「一たい君には分らないのか？　こんな二重の思想を持つてゐる人間は、たうてい生きて行く譯に行かないのだ。」

「自殺しなけりやならん、とでも言ふのですかい？」

「これ一つだけでも、じうぶん自殺に價するといふことが、一體に君に分らないのか？　何十億といふ君らのやうな人間の中で、たつた一人だけ、そんな生活を欲しない、またそれに堪へ得ないやうな人間がゐる事を、君はまるで理解してゐないのだ。」

「僕は、たゞ君が迷つてゐるらしいといふ事だけは、理解してゐますよ……それは非常に悪いことですぜ。」

「スタヴローギンもやはり思想に呑まれたのだ。」キリーロフは、氣難かしげに部屋の中を歩き廻りながら、相手の言葉には氣も附かないで、から言つた。

「え？」とピョートルは耳を欹てた。「どんな思想に？　あの人は君に何か言ひましたか？」

「いや、僕が自分で想像したのさ。スタヴローギンはたとへ信仰を持つてゝも自分が信仰を持つてる事を信じないし、また假りに信仰を持つてなかつたら、その信仰を持つてない事を信じない男だ。」

「ふむ、スタヴローギンにはもつと違つたものもありますよ、も少し氣の利いたものがね……」不安げに會話の方向と、キリーロフの蒼褪めた顏つきを注視しながら、ピョートルは喧嘩腰でかう呟いた。

『畜生、こいつとても自殺しやしないぞ。』と彼は考へた。『前から直感してゐたよ。要するに、頭腦の產物だ、それつきりだ。何といふやくざな連中だらう！』

「君は僕と席を共にする最後の人間だ。だから、厭な心持で君と別れたくない。」突然キリーフが言ひ出した。

ピョートルはすぐには答へなかつた。『この畜生、今度はまた何を言ひ出すんだらう？』彼は再びかう考へた。

「キリーロフ君、全くのところ、僕は個人として君に對して、別に悪意なぞ持つてやしないんですよ、いつも……」

「君は卑劣漢だ、君は僞りの智慧だ。しかし、僕もやはり君と同じやうな卑劣漢だ。ところが、

僕は自殺して、君は生き殘るんだ。」

「つまり、君が言ふのは、僕が生存を望むほど卑屈なやつだ、といふ意味ですか？」

彼はかういふ場合、かういふ會話を續けるのが、果して有利か不利か決し兼ねたので、『なり行きに任せよう』と決心した。しかし、キリーロフの優越の調子と、まるで隱さうともしないいつもながらの侮蔑の色が、以前からしじう彼をいら〳〵させてゐたが、今はどういふ譯か、前より一層ひどく感じられた。或はかういふ譯かも知れない――もう一時間ばかり經つたら、死なねばならぬキリーロフが（彼は今でもやはりそれを念頭に置いてゐたので）、彼の目から見ると、何かかう、半人とも言ふべきもののやうに思はれて、たうてい傲慢な態度なぞ許さるべきでないやうな氣がしたのである。

「君はどうやら僕に對して、自殺を自慢してるやうですね？」

「僕はみんながのめ〳〵生き殘つてゐるのを、いつも不思議に思つてるんだよ。」キリーロフは相手の言葉に耳も借さなかつた。

「ふん、それも一つの觀念だが、しかし……」

「猿、君は僕を丸め込まうと思つて、相槌ばかり打つてるぢやないか。默てろ、君なんか何も分らないんだ。もし神がないとすれば、その時は僕が神なのだ。」

「それそれ、僕は君の說の中で、その點がどうしても腹に入らなかつたのです。なぜ君が神なんでせう？」

「もし神があれば、神の意志がすべてだ。從つて、僕も神の意志から一歩も出られない譯だ。ところが、神がないとすれば、もう僕の意志がすべてだ、從つて、僕は我意を主張する義務がある譯だ。」

「我意？　しかし、なぜ義務があるんでせう？」

「なぜつて、一切が僕の意志だからだ。人間は神を滅ぼして、我意を信じてをりながら、最も完全なる意味に於いて、この我意を主張する勇氣のあるものは、わが地球上に果して一人もゐないのだらうか？　それは丁度、貧しいものが遺產を相續して、度膽を拔かれたため、自分でそれを領有する力がないと思ひ込んで、金の袋に近寄る勇氣が出ないのと同じ理窟だ。僕は我意を主張したいのだ。一人きりでも構はない、僕は敢て斷行する。」

「斷行したらいゝでせう。」

「僕は自殺する義務があるのだ。なぜつて、僕の我意の最も完全な點は――ほかでもない、自分で自分を殺す事にあるからだ。」

「だつて、自殺するのは君一人つきりぢやありませんぜ。自殺する者は澤山あります」

「しかし、みなそれ〴〵理由がある。ところが、一さい理由なしに、自分の我意のためのみに自殺するのは、僕一人きりなんだ。」

『自殺しやしない。』またしてもピョートルの頭に、かういふ考へが閃めいた。

「ねえ、君、」と彼はいらだたしげに言ひ出した。「僕が君の位置に立つたら、自分の我意を

示すために、自分を殺さないで、誰かほかの人を殺しますよ。その方がよつぽど役に立ちますぜ。もしびつくりなさらなけりや、誰を殺したらいゝか、僕が教へて上げますがね。さうすれば、或ひはけふ自殺しなくてもいゝかも知れませんよ。相談のしやうがありますぜ。」

「他人を殺すのは、僕の我意の中で最も卑劣な點なのだ。その言葉の中に、君の全面目が現れてるよ。僕は最高の點を欲する、だから自殺するのだ。」

『自分相當の所まで行きついたな。』とピョートルは毒々しげに呟いた。

「僕は自分の不信を宣告する義務がある。」キリーロフは部屋の中を歩き廻つた。「僕に取つては、『神はなし』といふより以上に高遠な思想は、ほかにないのだ。僕の味方は人類の歴史だ。人間は自殺しないで暮すために、神を考へ出す事ばかりして來たものだ。從來の世界史は、これだけの事だつたのだ。ところが、僕は全世界史中のたゞ一人として、始めて神を考へ出す事を拒否したのだ。人類はこれを知つて、永久に記憶しなければならぬ。」

『自殺しやしない。』とピョートルは内心氣を揉んだ。

「誰が知るもんですか？」彼は突つついた。「こゝには君と僕しかゐないぢやありませんか。リプーチンの事でも言つてるんですか？」

「みんな知らなきやならない。みんな知るに相違ない……この世には、明るみへ出ないやうな祕密は一つもない。これは『彼』の言つた事だ。」

かう言ひながら、彼は熱病やみのやうな昂奮の體で、救世主の聖像を指さした。その前には燈

明が燃えてゐた。ピョートルはすつかり業を煮やして了つた。

「ぢや、君はやはり『彼』を信じて、お燈明なんか上げてるんですね。それはまさか、『萬一の場合』のためぢやないでせうね？」

こちらはいつまでも默つてゐた。

「ねえ、僕の目から見ると、君はどうも坊さん以上に信仰してるらしいですよ。」

「誰を？『彼』を？　まあ聞き給へ。」ぢつと坐つて動かぬ、激昂した目つきで、前方をぢつと凝視しながら、キリーロフは急に歩みを停めた。「一つ君に偉大なる思想を聞かしてやらう。嘗てこの地上に一つの日があつた。そして、この地球の眞中に、三つの十字架が立つてゐた。十字架の上にあつた一人は、極めて深い信仰を有してゐたので、いま一人の者に向つて『お前は今日わしと一緒に天國に赴くだらう。』とまで斷言した。やがてその日は終つて、二人とも死んで了つた。そして、共に旅路に上つたけれど、天國も復活も發見できなかつた。豫言は遂に的中しなかつた。いゝか、この人は全地球上に於ける最高の人で、地球の生活の目的となつてゐたのだ。この一箇の遊星も、その上にある一切のものも、この人がなかつたら、たゞの狂亂世界に過ぎない。この人の前にも後にも、これくらゐの人は嘗て出て來なかつた。それはじつさい奇蹟と言つていゝくらゐだ。つまり、かういふ人はこれまでにもなかつたし、今後も決して出て來さうにない、そこに奇蹟が含まれてる譯なのだ。もしさうとすれば、もし自然律がこの人をも容赦しないで——自分の奇蹟さへ容赦しないで、『彼』をして僞りの中に生き、僞りのために死なしめたとす

れば、當然この遊星ぜんたいが虚僞の塊りで、愚かしい嘲笑と僞瞞の上に立つてる譯なのだ。して見ると、この遊星の法則その物が虚僞なのだ、悪魔の喜劇なのだ。一體なんのために生きるのだ、もし君が人間なら答へて見ろ。」

「それは話が別の方向へそれたんですよ。君の頭の中では二つの異なつた原因が、一緒くたになつてゐるらしいですね。これはどうもよくない兆候ですぜ。しかし、失禮ですがね、もし君が神だとすれば、どうなんでせう？　もし虚僞が終りを告げて、君が忽然と『一切の虚僞は古き神があつたからに過ぎない』と悟つたとすれば、一體どうなんでせうね？」

「たうとう君も分つたな！」とキリーロフは歡喜の聲を上げた。「君のやうな人間でさへ分つたとすれば、つまり誰でも理解できる譯なのだ。今こそ分つたらう、萬人のための救ひの道は、すべての者にこの思想を證明するにあるんだ。ところで、誰がそれを證明するのだらう？　僕なのだ！　僕は合點が行かない――どういふ譯でこれまでの無神論者（アテイスト）は、神がないといふ事を知りながら、同時に自殺せずにゐられたのだらう？　また神が無いと自覺しながら、同時に自分が神になつたと自覺しないのは、もう全く無意味だ。さうでなかつたら、どうしても自殺しずにゐられない筈だ。もしそれを自覺したら――もうその人は帝王だ、もう自殺などしないで、最高の榮譽の中に生きて行けるのだ。けれどたゞ一人だけ、つまり最初にそれを自覺した者は、必ず自殺しなければならぬ。でなけりや、誰が一たい始めるんだ、誰が一たい證明するんだ？　僕はそれを始めるために、それを證明するために、必ず自殺をするつもりだ。僕はまだ仕方なしの神だか

ら不幸だよ。なぜつて我意を主張する義務があるからだ。すべての人は不幸だ。それは我意を主張する事を恐れてゐるからだ。今まで人間があんなに不幸で慘めだつたのは、我意の一ばん肝要な點を主張する事を恐れて、まるで小學生のやうに、そつと隅つこで我意を振つてゐたからだ。僕は恐ろしく不幸だ、それは恐ろしく怖がつてるからだ。恐怖といふ奴は人間の呪ひだ……しかし、僕は我意を主張する。僕は自分の無信仰を信ずる義務がある。僕は開始して、そして終結する。僕は扉を開く。さうして救つてやる。すべての人間を救つて、次の時代に、彼らを生理的に改造することの出來る方法は、たゞこれ一つしきや無いのだ。だつて僕の考へる限りでは、今のやうな生理的狀態では、人間が古い神なしにやつて行く事は、たうてい不可能だからね。僕は三年の間、自分の神の屬性を求めて、やつとこの頃それを發見した。僕の神の屬性は――ほかでもない我意だ！　これこそ僕が最高の意味に於て自分の獨立不羈と、新しい恐るべき自由を示し得る、唯一の方法なのだ。實際この自由は恐ろしいものなんだからね。僕は自分の獨立不羈と、新しい恐るべき自由を示すために、自分で自分を殺すのだ。」

彼の顏は不自然に蒼褪めて、目つきは堪へ難いまでに重苦しさうだつた。彼はまるで熱病やみのやうだつた。ピョートルは、今にも彼が倒れやしないかと思つた。

「さあ、ペンを取つてくれ！」突然キリーロフは、感激の頂點に立つたかのやうに、思ひがけなくかう叫んだ。「口授しろ、僕は何にでも署名してやる。シャートフを殺した事にも署名してやる。さあ、僕が滑稽に感じてる中に、何でも口授するがいゝ。僕は高慢ちきな奴隷どもの意見

なぜ、少しも恐れやしないんだ！　すべて祕密なものは、やがて明るみへ出るものだといふ事を、君も自分で合點するだらうよ！　君なんかは押し潰されて了ふんだ……僕はそれを信じる、信じなくつてさ！」

ピョートルは座を跳り上がつて、早速インキ壺と紙を持つて來た。そして、適當な瞬間を狙ひながら、成功を氣づかつて胸を踊らせつゝ、口授し始めた。

『余アレクセイ・キリーロフは左の事實を宣言す……』

「ちよつと待つてくれ。僕は厭だ！　一たい誰に宣言するのだ？」

キリーロフはまるで熱病やみのやうに慄へてゐた。この宣言といふ事と、それに關する一種特別な思ひがけない想念は、とつぜん彼の全心を呑盡したらしかつた。それは惱み疲れた彼の魂が、ほんの瞬間ではあるけれど、まつしぐらに飛びかゝつた一縷の光明であつた。

「誰に宣言するのだ？　僕は是非それを知りたい！」

「誰でもない、すべての者です、最初にこれを讀む人間です。何もそんな事を決めてかゝる必要は、ないぢやありませんか。つまり、全世界ですよ！」

「全世界！　ブラーヴー！　そして、後悔めいた事は拔きだ。僕は、後悔なんかするのは厭だ。官憲などに呼びかけるのは厭だ！」

「えゝ、無論ですよ。そんな必要はありやしない。官憲なんかくそ食らへだ！　さあ、お書きなさいよ、もし君が眞面目にその氣があるなら！……」とピョートルはひすてりつくに叫んだ。

「待つてくれ！　僕は上の方に、舌を吐き出した面を描きたいんだ。」

「えゝ、下らない事を？」ピョートルは業を煮やして了つた。「畫なんかなくたつて、そんな事はみんな調子一つで出せるんですよ。」

「調子で？　そいつはいゝ。さうだ、調子だ、調子だ！　調子で口授してくれ！」

『余アレクセイ・キリーロフは、』キリーロフの肩先に屈みかゝつて、昂奮の餘りぶる〳〵慄へる手で、記し行く文字を一つ〳〵注視しながら、ピョートルはしつかりした命令的な語調で口授しはじめた。『余キリーロフは左の事實を宣言す。即ち今十月――日午後七時すぐる頃、大學生シャートフを公園内にて殺害せり。その原因は彼が節を變じて、余ら兩人の居住せるフィリッポフの持家に、十日間滯在宿泊したるフェーヂカ、並びに檄文の件に關して、密告を企てたるがためなり。さはれ、余が今夜拳銃（ピストル）をもつて自殺せんとするは、敢て後悔恐怖のゆゑに非ず、既に外國在留時代より、自己の生命を斷たんとの意志を、有したるがためなり。』

「たつたそれだけかい？」驚きと不滿の色を浮かべながら、キリーロフかう叫んだ。

「もう一ことも書いちやいけません！」隙もあらばこの證書を、彼の手から捥ぎ取らうと狙ひながら、ピョートルは手を振つて見せた。

『待つてくれ！」キリーロフは手をしかと紙の上に載せた。「待つてくれ、そんな馬鹿な事があるものか！　僕は誰と一緒にやつたか書きたいのだ。それにフェーヂカの事なぞ何のために？　そして火事は？　僕はみんな書きたいのだ、もつと調子で罵倒してやりたいんだ、調子で！」

「澤山ですよ、キリーロフ君、本當に澤山ですよ！」今にも手紙を引裂かれはしないかと、びくびくしながら、ピョートルは殆ど祈らないばかりに言つた。「人を本當にさせるには、出來るだけぼんやりさせとかなくちや。つまりこれでいゝんです、ほんのちよつと匂はしただけでいゝんです。事實といふやつは、ほんの隅つこだけ見せなきや駄目です。つまり、みんなを揶揄ふだけで澤山です。人間てやつはいつでも人に騙されるよりは、自分で自分によけい嘘をつきたがるものです。そして、むろん人の嘘よりは、自分の嘘の方をよけい信じるんです。しかも、それが何より好都合なんですよ。一ばん好都合なんですよ！　さあ、お寄越しない、それで結構。さあ、お寄越しなさいといふのに！」

かう言ひながら、彼は紙を捩ぎ取らうと努めた。キリーロフは目を剝き出して、何やら一生懸命に理解しようと、骨折つてゐるらしかつた。もう彼は理解力を失つたやうな風だつた。

「えゝ、畜生！」不意にピョートルは怒り出した。「あゝ、まだ署名してないんだ。何だつて君はさう目を剝き出すんです？　署名おしなさい！」

「僕は罵倒したいんだ……」とキリーロフは呟いたが、それでもペンを取り上げて、署名した。

「僕は罵倒したいんだ……」

「Vive la république（共和國萬歳）と書き給へ、それで澤山ですよ。」

「うまい！」キリーロフは嬉しさの餘り、咆えるやうに叫んだ。「Vive la république démocratique, sociale et universelle ou la mort！（民主的、社會的、國際的共和國萬歳、然らずんば死あるのみ）……いや、これでは違ふ。Liberté, egalté, fraternité ou la mort！（自由、平等、同胞愛、然らずんば死あるのみ）あ、この方がいゝ、この方がいい。」彼はさも心地よげに、自分の署名の下にかう書いた。

「澤山です、澤山です。」とピョートルは繰返した。

「待つてくれ、もう少し……ねえ君、僕はも一ど佛蘭西語で署名するよ。de Kirilloff, gentilhomme russe et citoyen du monde（露西亞の貴族にして世界の市民キリーロフ）はははは！」と彼は笑ひ崩れた。「いや、いや、いや、待つてくれ、もつといゝのを考へついたぞ、こいつは素敵だ。Gentillonmme séminariste russe et citoyen du monde civilisé！（露西亞の貴族的神學生にして文明世界の市民）これが何より一番だ……」彼はいきなり長椅子から跳上つて、不意に素早い手つきで窓から拳銃を取上げると、そのまゝ次の間へ駈け込んで、しつかりと戸を閉めて了つた。

ピョートルは一分間ばかりもの思はしげに、戸を眺めながら立つてゐた。

『今すぐなら、或はやつつけるかも知れないが、考へ始めでもしようものなら、何の事もなしに濟んで了ふに相違ない。』

彼はこの間にと、紙を取つて座に着くと、もう一度それを讀み返した。宣言の書き方はいま讀んで見ても、やはり彼の氣に入つた。

『今のところ、どういふ事が必要なのかなあ？　暫くの間、すつかり世間のやつ等を間誤つかして了つて、注意をそらしてやらねばならない。公園……しかし、この町には公園がないから、いやでもスクヴレーシニキイと氣がつくだらう。かう氣がつくまでに、だいぶ時日がかゝる、そ

れから捜してる中に、また時日が經つ。その中にやつと死骸が見つかつて、なるほど本當が書いてあつたと、合點が行くに相違ない。して見ると、何もかも本當だ、フェーヂカの事も本當だといふ事になる。ところで、フェーヂカとは一たい何者だらう？　フェーヂカは火事の本體だ、レビャードキン事件の本體だ。從つて、何もかもあすこから――フィリッポフの家から出たのだ。それだのに、自分たちは何にも氣がつかなかつた、何もかも見落してゐたのだ、とかういふ事になるんだから、あいつ等の目はすつかり眩んでしまふ譯だ！　仲間の事なんぞは思ひ初めもしない。シャートフにキリーロフ、それにフェーヂカとレビャードキンだ。一體この連中がどういふ譯で互に殺し合つたのか、こいつがまだちよつとした疑問になると。えゝ、こん畜生、まだ拳銃の音が聞えないぞ！……』

彼は遺書を讀んで、その書き方に興味を持つてはゐたけれど、それでも絶えず惱しい不安の念を抱きながら、一心に耳を澄ましてゐた――と不意にむら〳〵となつた。彼は不安げに時計を眺めた。もうだいぶ遲かつた。キリーロフが去つてから、もう十分ばかりになる……彼は蠟燭を取つて、キリーロフの閉籠つた戸口へ赴いた。ちやうど戸口の所で、もう蠟燭はだいぶ殘り少なになつて、いま二十分も經つたら燃え盡きて了ふ、しかもほかには一本もないのだ――といふ事がふと頭に浮かんだ。彼は把手に手を掛けて、用心ぶかく耳を澄ましたが、こそとの物音も聞えなかつた。彼はいきなり戸を開けて、蠟燭をかゝげた。と、何物かが呻り聲を立てながら、彼の方へ飛びかゝつて來た。彼は力任せに戸をぴしやんと叩き附けて、再びそれを肩で強く抑へた。けれども、あたりはもうひつそりして、再び死のやうな靜寂に歸つた。

長いあひだ彼は蠟燭を手にしたまゝ、決し兼ねたやうに佇んでゐた。いま戸を開けた一瞬間に、彼はほんのちらりとしか、中の樣子を見分ける事が出來なかつたが、それでも部屋の奥の窓ちかく立つてゐるキリーロフの顏と、不意に自分の方へ飛びかゝつて來た彼の野獸のやうな、獰猛な意氣組みとが目を掠めたのである。ピョートルはぎくりとなつて、手早く蠟燭を卓の上に置くと、拳銃を用意して、反對側の隅へ爪立でひよいと飛びのいた。で、もしキリーロフが戸を開けて、拳銃を手に卓の方へ飛び出したにしても、彼はキリーロフに先んじて狙ひを定め、引金を下す事が出來るのだつた。

自殺などといふ事は、ピョートルも今は全く本當にしなかつた。

『部屋の眞中に立つて、考へ込んでゐたつけ。』かういふ想念がまるで旋風のやうに、ピョートルの頭腦を駛り過ぎた。『それに、眞暗な恐ろしい部屋だ……あいつ恐ろしい呻り聲を立てゝ飛びかゝつたが、あれには二つの可能が含まれてる譯だ――つまり、あいつが引金を下ろさうとした瞬間に、俺がかへつて邪魔をしたのか、それとも……それとも、あすこにぢつと立つてゐて、どうして俺を殺したものかと、考へてたのかも知れない。さうだ、それはさうに違ひない、あいつ考へてたのだ……もしあいつが臆病風を吹かしたら、俺はあいつを殺さずに歸らないつて事を、彼奴も自分で承知してるのだ――つまり、あいつの身になつたら、僕に殺されない先に、自分の方から僕を殺さなきやならない譯だ……あゝまた、またしても向ふがひつそりした！　本當に恐

ろしいくらゐだ。出しぬけに戸を開けたらどうだらう……何よりもいまくしいのは、彼奴が坊主以上に神を信じてる事だ……もう決して自殺なんかしつこない！……あの『自分相當の所へ行着いた』連中が、このごろ馬鹿に殖えて來やがつた。やくざ者め！　ふう、こん畜生、蠟燭が、蠟燭が！　もう十五分たつたら、きつとなくなつて了ふ……早く片づけて了はなきや。どんな事があつたつて、片づけなきやならない……どうなるものか、かうなつたら、もう殺したつて構はないのだ。この手紙があつたら、どんなやつだつて、俺が殺したなどと、考へる氣づかひはない。あいつの手に拳銃を握らせて、床の上に具合よく臥かして置いたら、必ずやつが自分でやつたものと、思ふに違ひない……えゝ、あん畜生、どうして殺してやらうかなあ？　俺が戸を開けると、やつがまた飛びかゝつて來て、俺より先に火蓋を切つたら……えゝ、畜生、屹度しくじるに相違ない！』

彼は相手の心中を測り兼ねて、自分の不決斷に身を慄はしながら、惱み續けてゐたが、たうとう蠟燭を手に取つて、拳銃を差し上げて身構へしながら、戸口の方へ近づいた。そして、蠟燭を持つてゐる左の手で、錠前の把手(ハンドル)をぐつと抑へた。けれど、それが巧く行かなかつた。把手(ハンドル)がかちりと鳴つて、軋むやうな音を立てたのである。『もうきつと射つ！』といふ考へが、ピートルの頭に閃めいた。彼は力任せに足で戸を蹴放して、蠟燭を上げながら拳銃を差しつけた。けれど、發射の音も叫聲も聞えなかつた……部屋の中には誰一人ゐないのだ。

彼はびくつとした。それは通り拔けられないがらんとした部屋で、逃げ出す道などはどこにもなかつた。彼はなほも蠟燭をさし上げて、ぢつとあたりを見透かした。全く誰一人ゐなかつた。彼は小聲にキリーロフを呼んで見た。それからまた一度、やゝ大きな聲で……が、誰も答へるものがなかつた。

『まさか窓から逃げ出しやしまいな？』

實際、一つの窓の通風口が開いてゐた。『馬鹿な、通風口から逃げ出す筈はない。』ピートルは部屋を突つ切つて、窓に近寄つた。『決してそんな筈はない。』と、不意に彼はくるりと振返つた。何やら異常なある物が、彼の全幅を震撼したのである。

窓に向つた壁に沿うて、戸口から右手に戸棚が一つ立つてゐた。この戸棚の右側に當つて、壁と戸棚の間に出來た凹みの中に、キリーロフが立つてゐたのである。しかもその樣子が、恐ろしく奇怪千萬なものだつた――ぢつと身動きもしないで、全身を反り返らせ、兩手を洋袴(ツボン)の縫目に當てたまゝ、首をぐつと上げて、うしろ頭をぴつたり壁の眞隅に押し附けてゐる樣子は、まるで姿を搔き消して隱れて了ひたさうな風つきだつた。あらゆる點から推して、本當に隱れようとしたものに相違なかつたけれど、何だか本當に出來なかつた。ピートルはその隅から少し斜めに立つてゐたので、たゞ飛び出た所だけしか觀察できなかつた。彼はもつと左の方へ歩を移して、キリーロフの全身を見すかした上、謎の意味を解かうといふ決心が、まだ附かなかつたのである。彼の心臟は烈しく打ち始めた……と、不意に極度の狂憤が彼を襲うた。彼は身を躍らして、叫聲を立てると、地團太を踏みながら猛然として、かの氣味わるい場所へ飛びかゝつた。

しかし、ぴたりと傍へ近寄つたとき、再び前にも增した恐怖に打たれて、まるで釘附けにされたやうに立止つた。彼が心を打たれた主な原因は、恐ろしい叫聲にも、氣ちがひじみた飛びかかりやうにも拘らず、この立姿がまるで化石したものか、または蠟細工か何ぞのやうに、少しも身動きしないばかりか、手一本、足一本ぴくりともさせない事だつた。蒼褪めた顏色も不自然だし、黑い兩眼もきつと据はつて、どこか空中の一點を凝視してゐた。ピョートルは蠟燭を上から下へ、それから更に下から上へ移しながら、あらゆる點をも洩さず照し出して、この顏を見極めようとした。彼はふと氣がついた。キリーロフはどこか前の方を見つめてはゐるけれど、横目でピョートルの方を見てゐるばかりか、事によつたら、仔細に觀察してゐるかも知れないのだ。この時あるる考へが彼の心に浮かんだ——一つこの灯をいきなり『あん畜生』の鼻先へ持つて行つて、火傷(やけど)をさして、どうするか見てやらう。と、不意にキリーロフの頤がぴくりと動いて、その脣の上には、まるでこつちの腹の中を察したかのやうに、冷笑的な薄笑ひが辷つて通つたやうな氣がした。彼は思はず身震ひしながら、我を忘れて、强くキリーロフの肩を摑んだ。

これに續いて、何かしら思ひ切つて醜惡な事が、電光石火のやうに起つたのである。ピョートルも後になつて、この時の記憶を秩序だつて整頓することが、どうしても出來なかつた。彼がキリーロフに觸るか觸らないかに、こちらは素早く首を前へ屈めて、頭で蠟燭を彼の手から叩き落して了つた。燭臺はからりと音を立てゝ床へ飛び、あかりは消えてしまつた。その瞬間、彼は自分の左手の小指に、恐ろしい疼痛を感じた。彼はきやつと叫んだ。そして、たゞもう前後を忘れて三度ばかり、自分の指に咬みついたキリーロフの頭を、拳銃(ピストル)で力任せに撲りつけた事を、憶えてゐるばかりだつた。やつと彼は指を捥ぎ放すと、暗闇の中に道を探りながら、後をも見ずに家を駈け出した。その後から追ひ掛けるやうに、恐ろしい叫び聲が部屋の中から飛んで出た。

「すぐ、すぐ、すぐ、すぐ！……」

これが十度ばかり繰返された。しかし、彼はひた走りに走つて、やつと玄關口の廊下まで走り出た。と、不意に拳銃(ピストル)の音が高々と鳴り渡つた。このとき彼は廊下の暗闇に足を停めて、五分ばかり想像をめぐらしてゐた。遂に彼は再び部屋へ引つ返した。まづ蠟燭を手に入れねばならなかつた。それには、戸棚の右手で床の上へ叩き落された燭臺を、拾ひ上げさへすればよい譯だが、しかしどうして燃えさしの蠟燭に火を點けたらよからう？　ふと彼の心に、一つのぼんやりした記憶が浮かんだ。きのふ臺所へ駈け下りて、フェーヂカに飛びかゝつたとき、片隅の棚の上に燐寸の赤い大きな箱を、ちらと見たやうな氣持がするのであつた。彼は手探りで、左手にある臺所の戸をさして進んだ。戸はすぐ目つかつた。彼は壁傳ひに歩きながら、階段を下りた。棚の上には、いま彼が思ひ浮かべたのと丁度同じ場所に、まだ口を立てゝない、大きな燐寸の箱が置いてあるのを、彼は暗闇の中で探り當てた。そのまゝ火をつけないで、上の方へ引返した。例の戸棚の傍——さつき彼の指に咬附いたキリーロフを、拳銃で撲りつけた場所まで來ると、彼はとつぜん咬まれた指の事を思ひ出した。その瞬間、殆ど堪へ難い痛みを覺え始めた。

彼は齒を食ひしばりながら、やつとの事で、蠟燭の燃え殘りに火をつけると、それをまた燭臺

にさして、あたりを見廻した。通風口を開けた窓の傍ちかく、足を部屋の右隅へ向けながら、キリーロフの死體が横はつてゐた。彈丸は右の蟀谷から打込まれ、頭蓋骨を突拔けて、左側から上の方へ出てゐた。血や腦味噌のはねてゐる痕が見えた。拳銃（ピストル）は床の上に投出された自殺者の手中に殘つてゐた。死は瞬間的に遂げられたものらしい。すつかり綿密にすべての模樣を檢査すると、ピョートルは身を起して、爪先立で部屋を出た。そして後の戸を閉めて、蠟燭を元の部屋の卓の上に立てた。彼はちよつと思案したが、火事など起す心配はないと考へたので、消さずに置く事に決心した。卓の上に載せてある遺書に、もう一ど目を落すと、彼は機械的ににたりと笑つて、なぜか依然として爪先立で、足音を偸みながら、今度はいよ〳〵この家を出て了つた。彼はまたもやフェーヂカの拔け穴を潛つて、再び几帳面にその後を塞いで置いた。

三

ちやうど六時十分まへ、停車場のプラットフォームに、かなり長く續いてゐる列車の傍を、ピョートルとエルケリが歩いてゐた。ピョートルがこれから出發するので、エルケリは別れを告げに來たのである。手荷物はもう預けて了つたし、手鞄は二等車内に取つて置いた自分の場所へ運んで了つた。第一鈴はもう疾うに鳴つて、人々は第二鈴を待兼ねてゐるのであつた。ピョートルは列車の中へ入つて行く旅客を觀察しながら、公然とあたりを見廻してゐた。親しい知人は殆ど見當らなかつた。たゞ二度ほど輕く會釋したばかりである。一人は間接に知つてゐる商人で、い

ま一人は二停（ふた）車場ほど先にある、自分の敎區へ出かける若い田舍牧師だつた。エルケリはこの最後の瞬間に、もつと重大な事を話したくて堪らないらしかつた——尤も、はつきりどういふ事なのかは、自分でも分つてゐないのかも知れぬ——けれど、自分の方から切出す勇氣もなかつた。彼はどうもピョートルが自分を邪魔にして、早く最後の鈴（ベル）が鳴ればいゝと、じり〳〵しながら待つてるやうな氣がしてならなかつた。

「あなたは思切つて公然と、みんなの顏を見てゐますね。」彼は相手を警戒しようとでもするやうに、何となく臆病げな調子で注意した。

「どうしていけないんだらう？　僕はまだ隱れる譯に行かないよ。早すぎるからね。心配しないでくれ給へ。僕はたゞあのリプーチンの野郎が來やしないかと、それだけびく〳〵してゐるんだよ。嗅ぎつけて、やつて來るかも知れないからね。」

「ゼルホーゼンスキイさん、あの連中は望みがありませんよ。」斷乎とした調子でエルケリが言つた。

「リプーチンかい？」

「みんなですよ、ゼルホーゼンスキイさん。」

「下らない事を。今あの連中は、みんな昨日の事で結びつけられてるのだ。一人だつて裏切るものはありやしない。理性といふものを失はない限り、誰がみす〳〵滅亡の淵に飛びこむものかね？」

「ピョートルさん、あの連中はみんな理性を失ひますよ。」

かうした懸念はもう一度ならず、ピョートルの心に忍び込んだものらしい。それでエルケリの意見は、一さう彼をむら〳〵とさせたのである。

「エルケリ君、君まで臆病風を吹かせ出したのぢやないかね？　僕はあの連中をすつかり束にしたよりも、寧ろ君一人の方に望みを囑してゐるんだよ。僕は一人々々の仲間が、どれだけの價値を有してゐるか、今こそすつかり分つた。君けふにも早速あの連中に、口頭ですつかり報告してくれ給へ。僕はあの連中をぜん〳〵君に一任するから。一つ朝からみんなの所を廻つてくれ給へ。僕の訓令は明日か明後日、みんなに聞分けるだけの落ちつきが出來た頃、どこかに集めて、讀んで聞かしたらいゝよ……。しかし、僕が受合つて置くがね、あの連中は明日にもそれだけの落ちつきが出來るよ。人間はおぢけが附くと、まるで臘のやうに從順になるものだからね……が、何よりも第一に、君の方から元氣を落さないやうにし給へ……」

「あゝ、ゼルホーゼンスキイさん、あなたいらつしやらなきやいゝんですがねえ！」

「なに、ほんの二三日の旅だよ。すぐ歸つて來る。」

「ゼルホーゼンスキイさん。」用心深い、けれどもしつかりした聲で、エルケリは言ひ出した。「あなたが彼得堡（ペテルブルグ）へ行かれたつて構やしません。僕はちやんと承知してゐますよ。あなたは共同の事業のために、必要な事しかなさらないんですからね。」

「僕はそれ以下の好意を、君から期待してゐなかつたよ、エルケリ君。もし彼得堡へ行く事を

察したのなら、あの晩あの際、皆の者を驚かさないために、こんな長旅をするなんて言へなかつた譯は、君も察してくれる事と思ふ。あの連中がどんな風だつたか、君も自分で見て知つてるんだからね。しかし僕は仕事のために――大切な重要な共同の仕事のために――出かけるので、リプーチン輩の想像するやうに、辷り拔けたりなんかするのでない事は、君も理解してくれるだらう。」

「ピョートルさん、たとへあなたが外國へいらつしやらうと、僕は十分理解しますよ。あなたは自分の一身を護る必要があります。なぜなら、あなたはすべてであつて、我々は無ですからね。僕はちやんと理解してゐますよ、ゼルホーゼンスキイさん。」

哀れな少年は聲さへ慄はすのであつた。

「有難う、エルケリ君……あつ、君は僕の痛い指に觸つちやつた（エルケリは無器用に彼の手を握りしめたのである。痛い指は體裁よく黑い絹の布（きれ）で縛つてあつた）。しかし、僕は明確に言つとくがね、僕が彼得堡へ行くのは、ほんの匂ひを嗅ぐだけの目的で、一晝夜もゐたら、またこ處へ引つ返すつもりだ。歸つて來たら、僕は世間の目を誤魔化すために、田舍のガガーノフの所へ落ちつかうと思つてゐる。もしあの連中が何かで危險を感じたら、僕は第一番に出かけて行つて、ともにそれを頒つ覺悟だ。もし彼得堡で滯在が延びるやうだつたら、すぐ……例の方法で君にお知らせするよ。そして、君から更に連中へ傳へて貰ふんだ。」

第二鈴が響き渡つた。

「あゝ、發車までにもう五分きりだね。僕はね、君、こゝの仲間がちり〳〵になるのが、望ましくないのだ。僕は少しも恐れやしない。僕の事は心配しないでくれ給へ。結社の網の箇々の結目は、僕の掌中にかなり澤山あるんだから、こゝの五人組なんか、何も特別に大切がる必要はないけれど、結目が一つくらゐ餘計にあつても、邪魔にはならないからね。尤も、僕も君の事は安心してるんだよ。あの不具者どもの傍へ、君一人だけ殘して行くんだけれどね……心配することはないよ、あの連中は決して密告しやしない、そんな勇氣はありやしない……あゝ、あなたも今日？」不意に彼は、挨拶に近寄つて來るごく年若な男に向つて、まるつきり別な浮々した聲で叫んだ。「あなたもやはり急行で立たれるとは、少しも知りませんでしたね。どちらへ、お母さんの所へ？」

この青年の『お母さん』は、隣縣で指折りの女地主だつたが、ユリヤ夫人の遠緣の親戚に當つて、二週間ばかりこの町に滯在してゐたのである。

「いや、わたしはもつと先まで、R——まで行きます。八時間ばかり汽車の中に坐つてなきやなりませんよ。彼得堡ですか？」と青年は笑ひ出した。

「どうして僕が彼得堡へ行くものと、いきなり想像なすつたのでせう」一層あけつ放しな調子で、ピョートルも同じやうに笑ひ出した。

青年は手套を嵌めた指を立てゝ、脅かすやうな手つきをした。

「えゝさう、お察しの通りです。」ピョートルはさも祕密らしく囁いた。「僕はユリヤ夫人の

手紙を持つて、三四人ばかり歴訪しなきやならん所があるのです。それがどんな人達でせう、全くのところ、ばか〳〵しくなつて了ひますよ。厭なお役目つたらありやしない！」

「しかしねえ、一體あの女は何だつて、あんなに臆けて了つたんでせう？」と青年も同樣に囁いた。「昨日あの女は、わたしさへも部屋へ通してくれないんですよ。わたしなどに言はせれば、あんなに配偶の事を心配する必要はないのです。それどころか、あの人は全く見事に、火事場で倒れたんぢやありませんか、いはゆる生命まで犧牲にした譯ですからね。」

「いや、まあお聞きなさい。」とピョートルは笑ひ出した。「あの女はね、もうこゝから……ある人達が手紙を出してやしないかと、それを恐れてるんですよ。つまり、これに就いてはスタヴローギン、といふより寧ろK公爵が主な役者なんです……まあ何しろ、これには入組んだ譯があるんです。事によつたら、道々なにかの事を、あなたにお話するかも知れませんよ。もちろん騎士道の許す範圍内に限りですがね……これは僕の親類で、少尉補のエルケリです。郡部の方から出て來たものです。」

今までエルケリの方へ横目を使つてゐた青年は、ちよつと帽子に手を添へた。エルケリは擧手の禮をした。

「ねえ、ゼルホーゼンスキイさん、汽車の中の八時間は恐ろしい難行ですよ。實はわたしと一緒に、ベレストフといふ實に面白い大佐が、一等の車に乘つてるんです。隣り領の地主で、ガーリナ——née de Garine（ガーリン家に生れた人）を細君にしてるんですがね。なか〳〵歴とした人なんですよ。

おまけに、自分自身の思想も持つてゐます。この町には僅か二晝夜しか逗留しなかつたです。エララーシュの勝負が馬鹿に好きなんですがね、一つやつて見ませんか、え？　もう一人の相手はもう物色して置きました――プリブーフロフといふT――町の商人で、頤髯を蓄へた百萬長者です、いや、本當の百萬長者です。これはわたしが請合つて置きます……一つあなたをご紹介しませう。實に面白い金袋です。大いに笑はうぢやありませんか。」

「エララーシュなら僕も結構ですね。汽車の中でやるのは殊に愉快ですが、しかし僕は二等ですからね。」

「えゝ、ばか〳〵しい、そりや斷じていけません。わたし達の方へ越していらつしやい。早速あなたを一等へ移すやうに云ひつけます。列車長は、わたしの言ふ事なら聞いてくれるんです。あなたの荷物は何々です、鞄？　膝掛？」

「結構、行きませう！」

ピョートルはすぐさま自分の鞄と、膝掛と、書物を持つて、恐ろしく氣さくに一等車へ移つた。エルケリもそれを手傳つた。やがて第三鈴が鳴つた。

「ぢや、エルケリ君。」もう今度は汽車の窓から手を差し伸べながら、ピョートルは忙しさうな樣子で、せか〳〵と言ひ出した。「僕はあの連中と勝負を始めるんだよ。」

「何だつて僕に言ひわけめいた事を仰しやるんです、ゼルホーゼンスキイさん。僕ちやんと心得てますよ。僕すつかり心得てますよ、ゼルホーゼンスキイさん。」

「ぢや、また會はう。」と彼は言つたが、このとき勝負仲間に紹介しようと呼んでゐる青年の方へ、くるりと振向いて了つた。

かうしてエルケリは、崇拜してやまぬピョートルを、もうそれきり見なかつたのである。

彼は極めて憂鬱な樣子で家へ歸つた。それは何も、ピョートルがとつぜん彼らを棄てた事が、心配なためではなかつた、が……しかし、彼はあの若い洒落者が呼んだとき、餘りにも思切りよく自分に背を向けて了つた……それに『また會はう』などといふ言葉以外に、何かもつと言ひ方がありさうなものだ……せめて手なりと、も少し強く握り締めてくれたら……

この最後の事實が一番重大なことだつた。何かしら一種異樣なものが、彼の哀れな胸を搔搖り始めた。それが果して何であるかは、彼自身にもまだ分らなかつたが、とにかく昨夜の出來事に關聯したものであつた。

第七章　スチェパン氏の最後の放浪

一

わたしは固く信じてゐる――スチェパン氏は、自分の氣ちがひじみた計畫を遂行すべき時期が、迫つて來るのを感じたとき、非常な恐怖に襲はれたに相違ない。わたしはまたかうも信じてゐる――彼は殊にその前夜、かの恐ろしい出來事のあつた夜などは、一方ならぬ恐怖に惱まされたに相違ない。ナスターシャが後で言つた所に依ると、彼はもうだいぶ遲くなつて床に就いて、それからぐつすり寢込んだとの事である。けれど、そんな事は何の證明にもならない。死刑を宣告されたものは、刑の執行の前夜ですらも、非常に深い眠りを貪るといふ話である。實際、彼が家出をしたのは、どんな神經質な人間でも少しは元氣を恢復する、夜明け後ではあつたけれど（ギルギンスキイの親戚の少佐なぞは、夜が明けるが早いか、神に對する信仰さへ失ふと言ふではないか）、しかしわたしの信ずる所では、彼は今まで一度も恐怖の念を抱かずには、こんな狀態でたゞひとり街道をさ迷ふ自分の姿を、想像する事が出來なかつたに相違ない。彼が二十年間すみ馴れた場所と Stasie（ナスタシヤ）を見すてゝ、とつぜん踏み込んだ世界の孤獨の恐ろしい感覺も、勿論はじめ暫くの間は、彼の心に含まれてゐる自暴自棄的な或物のために、だいぶ力を弱められた事と思はれる。しかし、それはどうでもよい。假りに彼が、自分を待設けてゐるすべての恐怖を、どんなにはつきり意識してゐたとしても、それでもやはり街道へ踏み出して、どこまでも進んで行つたに相違ない！　どんな事があるにもせよ、この事實の中には何かしら誇らしい、心を躍らせるやうなところがあつた。あゝ、彼はヴルヴーラ夫人の豐かな條件を受納して、夫人のお情のもとに『世間なみの寄食者として』終る事も出來たのだ！　けれど、彼はそのお情を有難く頂戴して、踏みとゞまる事を潔しとしなかつた。かうして、彼は自ら夫人を捨てゝ、『偉大なる理想の旗幟』を掲げ、その理想のために街道へ死にに行つたのだ！　彼はかういふ風に感じたに相違ない。かういふ風にこの行爲は彼の目に映つたに相違ない。

それからまた別な疑問が、一度ならずわたしの腦裡に浮かんだ。他でもない、どうして彼はあんな風に逃げ出したのだらう？　つまり、なぜ字義的に自分の足で逃げ出して、馬車に乘らなかつたのだらう？　わたしは初めこの事實を、彼の五十年に亙る非實際的生活と、烈しい感動に基く突飛な思想の昏迷だと說明してゐた。替馬貸與命令狀だの、馬車だのといふ事は（たとへ鈴が附いてゐるにもせよ）彼には餘り單純で、散文的に思はれたに相違ない。ところが、その反對に巡禮旅行といふやつは、たとへ蝙蝠傘など提げて行くにもせよ、遙かに美しく、そして復讐的な懷しさを持つてゐるやうに感じられる――かうわたしは想像してゐたのである。しかし、一切が終りを告げた今となつて見ると、かういふ事はその當時、ずつと簡單に決行されたものらしく思はれる。第一、彼は馬車を雇ふことを恐れたに相違ない。そんな事をすれば、ヴルヴーラ夫人が嗅ぎつけて、無理やりに引留める虞れがあつたからである。實際、夫人はそれを實行したらうし、

彼も必ずそれに從つたに相違ない――さうしたら、偉大なる理想もおぢやんになつて了ふ。

第二の理由としては、替馬貸與命令狀を貰ふには、少くも、目的地を知つてゐなければならない。ところが、その目的地を知るといふ事が、この際彼に取つて、一ばん大きな苦痛だつたのである。彼はその土地を決めて名ざす事が、どうしても出來なかつた。なぜと言つて、もしどこそこの町と決めて了つたら、もうその瞬間から彼の企ては、彼自身の目から見ても、ばか〳〵しい不可能なものとなつて了ふからである。彼はこの點を十分に感じてゐたのである。實際どこそこの町ときまつた所で、彼は何をしようといふのだらう？　なぜどこかほかの町ではいけないのだ？　例の商人（スマルシヤン）でも搜さうといふのか？　しかし、一體どんな商人（マルシヤン）だらう。こゝでまたしても、彼に取つて何よりも恐ろしい、この第二の疑問が浮かび出たのである。事實かれに取つては、この商人（マルシヤン）ほど恐しいものはほかにないのだ。彼は今とつぜん向う見ずに、この商人（マルシヤン）を搜しに飛出したけれど、勿論、實地にそれを搜し當てるのが、何より恐しかつたのである。いや、もう寧ろたゞの街道がいゝ。たゞ飄然と街道へ踏込んで、考へずにゐられる間は、なんにも考へないで、ただ歩けばいゝのだ。街道――それはまるで人生その物のやうに、人間の空想のやうに、何かしら長い、長い、果しも見えないやうなものだ。街道の中には思想が含まれてゐる。ところが、替馬貸與命令狀にどんな思想がある？　替馬貸與命令狀は思想の終焉だ……街道萬歲（ギーヴラグランドルート）。先になつたらまた先の事だ。

リーザとの思ひがけない唐突な邂逅の後（この事はもう前に記して置いた）、彼は一さう忘我の

境に陷ちながら、先へ先へと進んで行つた。街道はスクヴレーシニキイから、半露里ばかりの所を蜿（うね）つてゐたが――不思議なことには――彼は始めどうして街道へ踏み込んだか、まるで氣がつかなかつたくらゐである。物事を根本的に判斷したり、はつきりと意識したりするのは、このとき彼に取つて堪へ難い事であつた。細かい雨ば止んだり、また降つたりしてゐた。けれど、彼は雨などにはまるで氣がつかなかつた。また鞄を肩へ振掛けて、そのために歩きよくなつたのにも、やはり氣がつかないでゐた。かういふ風にして一露里か、一露里半も歩いたらうと思ふ頃、彼はとつぜん足を停めて、あたりを見廻した。車の輪で一面に抉られた、古い、黑々とした街道は、兩側にお決りの楊（やなぎ）をつらねながら、果しもない絲のやうに眼前に延びてゐた。右側は、もうとうの昔に刈入れの濟んだ眞裸の畑で、左側は灌木の茂みの向ふに、ちよつとした林が續いてゐる。ずつと遙か向うの方には、鐵道線路が斜めに奥へ入り込んでゐるのが、あるかなきかに眺められて、その上には、何か列車の煙が見えてゐるが、音はもう聞えなかつた。

スチェパン氏は少し臆ぢけがついて來た、が、それもほんの一瞬間だつた。何といふ譯もなく、ほつと溜息をつきながら、彼は鞄を楊の傍に置いて、一休みすべく腰を下した。腰を下さうとして、身を動かした時、彼は身内に厭な惡寒を覺えて、膝掛に身を纏んだ。と、そのとき始めて雨に氣がついて、蝙蝠傘を擴げた。彼はをり〳〵肩をもぐ〳〵させながら、しつかりと傘の柄を手に握りしめて、かなり長い間かうして坐つてゐた。樣々な幻像があとから〳〵と、急速に變りながら、奇怪な列をなして、彼の目の前を通り過ぎた。

『リーズ、リーズ、』と彼は考へた。『あの娘と一緒にモーリイス（マヴリーキイ）がゐたつけ……奇妙な人たちだ……しかしあの火事は、何といふ不思議な火事だつたらう。それに、あの娘は一體なんの事を言つたんだらう？　一たい誰が殺されたんだらう？　大方スタシー（ナスターシヤ）はまだ何にも知らないで、珈琲でも用意して俺を待つてるだらう……骨牌？　一體おれは骨牌に負けて、人を賣つたかしら？　ふむ！　この露西亞では、いはゆる農奴制時代に……あつさうだ、フェーヂカ！』

彼は驚きの餘りぴくりとなつて、あたりを見廻した。

『あゝ、もしどこかその邊の藪の陰に、あのフェーヂカが隱れてたらどうだらう。なんでも、人の話では、あいつはどこか街道で、追剝の徒黨を作つてるさうだからなあ！　あゝ、そのとき、おれは……その時こそ俺はあの男に向つて、自分が惡かつたと、正直に有りのまゝを言つて了はう……そして俺が十年間といふもの、あの男が軍隊で苦勞したより、ずつと餘計あの男のために苦しんだ事を聞かしてやらう、そして……そして、紙入をくれてやつてしまはう。ふむ！　じゃ、でも、やはり俺は殺すだらうなあ）』

en tout quarante roubles; il prendra les roubles et il me tuera tout de même.（俺はみんなで四十ルーブリゐる。あいつはその金を取つ

彼は恐怖の餘り、何のためやら傘を窄めて、自分の傍へ置いた。このとき遙か向うの町の方から、何か田舎馬車のやうなものが街道に現れた。彼は不安げに見透し始めた。

『有難い（グラースデイウ）、あれは田舎馬車だ、そして、ゆつくりやつて來てるやうだ。あれならべつに危險な筈がない。あれはへと〳〵にこき使れた、この邊のやくざ馬だ……俺はいつも馬種を論じてゐたものだが……いや、あれはピョートル・イリッチが倶樂部で馬種を論じたので、俺はあの男を骨牌で負かしたんだつけ。そして……しかし、あのうしろにゐるのは何だらう？　どうやら百姓の女房が馬車に乘つてゐるらしい。百姓と女房——cela commencera être rassurant.（これはどうやら泰平無事になつて來たやだ）女房が後について、百姓が前に立つてる——これはしごく泰平無事だ。あの夫婦の後には牛が角に繩を附けられて、馬車に縛りつけられてゐるのだ。これはます〳〵もつて泰平無事だ。』

馬車は傍までやつて來た。それはかなりしつかりした、體裁の惡くない百姓馬車だつた。女房は、何やらぎつしり詰めた袋の上に坐つてゐるし、百姓は馭者臺に腰かけて、スチェパン氏の方へ横向きに足をぶら下げてゐた。後には、本當に赤い牝牛が角を縛られて、のそり〳〵と歩いてゐる。百姓夫婦は目を丸くしながら、スチェパン氏を眺めた。スチェパン氏の方でも、やはりそれと同樣に、二人を見つめるのであつた。けれど、二十歩ばかり傍をやり過したとき、彼は突然そは〳〵と立上つて、馬車を追つかけ始めた。馬車とならんで歩いてゐたら、自然こゝろ丈夫な譯だ、と感じたのである。しかし、馬車に追附いた時には、もうそんな事をすつかり忘れて、またもや例の千切れ千切れな想念や、幻像に沒頭して了つたのである。彼はてく〳〵歩いた。そして、この際自分が百姓夫婦に取つて、こんな街道では思ひも寄らぬ謎のやうな、不思議な存在だといふ事などは、もちろん考へもしなかつたのである。

「まことにはや失禮でござりますが、お前樣はどなた樣でござえますかね？」不意にスチェパン氏がぼんやりと女房を見つめた時、彼女は到頭こらへ兼ねてかう訊ねた。

女房は年の頃二十七ばかり、肉附のいゝ、眉の黑い、血色のいゝ女で、赤い脣は優しげに笑ひを含み、その陰から白く揃つた齒が光つてゐた。

「あんたは……あんたは、わたしに言つてるんですか？」愁はしげな驚きの色を浮かべながら、スチェパン氏はかう呟いた。

「きつと商賣する方だべえ。」と百姓は自信ありげに言つた。

それは脊の高い四十恰好の男で、幅の廣い利口さうな顏は、赤い髯でぐるりと取卷れてゐた。

「いや、わたしは商人といふ譯ぢやない、わたしは……わたしは……わたしは少し別なものだ。」スチェパン氏はいゝ加減に胡麻化した。そして萬一の用意に、心もち馬車の後へさがつたので、彼は牛と並んで歩くやうになつて了つた。

「おほかた旦那がただべえ。」露西亞語とは違つた言葉を聞きつけて、百姓はかう決めて了つた。そして、ぐいと手綱をしやくつた。

「かうしてお前さまの樣子を見てると、まるで散歩にでも出かけなすつたやうでごぜえますね！」女房はまたしても、不思議さうにかう言つた。

「それは……それはわたしの事を聞きなさるのかね？」

「よく外國の人が汽車に乘つて來さつしやるが、お前さまの靴も、何だかこゝら邊のと違ふやうでごぜえますね……」

「軍人の穿く靴だあ。」いかにも得意さうに氣取つた調子で、百姓は口を容れた。

「いや、わたしは軍人といふ譯ぢやない、わたしは……」

『何といふ執拗い女だらう。』とスチェパン氏は、心のなかでぷり〳〵してゐた。『それに、あの二人が俺をじろ〳〵見る事はどうだ！……しかし要するに……手短かに言へば、まるで俺はあの人達に對して、何か惡い事でもしたやうな氣がする、それがどうも不思議なのだ。俺はあの人たちに對して、何一つ惡い事をした覺えはないんだがなあ。』

女房は百姓と囁き合つた。

「もしお厭でなかつたら、お前さまを乘せて上げてもよろしうごぜえますが……もしその方が樂だと思ひなされば……」

スチェパン氏は急に氣がついた。

「いや、これはどうも、わたしは大變うれしいですよ、ずゐぶん疲れたからね。しかし、どうして上つたらいゝだらう？」

『これはどうも驚いた。』と彼は腹の中で考へた。『俺はこの牛と並んで、あんなに長く歩きながら、一緒に乘せて貰はうといふ考へが、起らなかつたんだからなあ……この「現實」といふやつは、何か恐しく特異な點を有してゐるものだ。』

しかし、百姓はそれでも馬を止めなかつた。

「だが、お前さまはどこへ行かつしやるんだね？」と彼はいくぶん信用し兼ねたやうに、かう訊ねた。

スチェパン氏はすぐには合點が行かなかつた。

「きつとハートヲまでだべえ？」

「ハートフの所へ？　いや、ハートフの所といふ譯ぢやない……それに、まるで知合ぢやないから。尤も、聞いた事はあるけれど。」

「ハートヲと言つて村のこんだよ。こゝから九露里ばかりある村だあ。」

「村？　それは面白い。さう言へば、何だか聞いた事がある。」

スチェパン氏はやはり歩いてゐた。なぜかいつまで經つても、乘せてくれなかつた。素晴しい考へが彼の腦裡に閃いた。

「あんた達は、事に依つたら、わたしを……わたしは旅券を持つてる。そして、わたしは大學教授なのだ。いや、何なら先生と言つてもいゝが、しかし先生の頭なんだ。わたしは先生の頭だ。Oui, c'est comme ça qu'on peut traduire（さうだ、こんな風に飜譯することが出來るやうだ）。わたしはぜひ乘せて貰ひたいのだが、どうだらう……お禮に酒を半シュトーフ買つて上げるが。」

「五十カペイカ貰はねえとね、旦那、惡い道だあもの。」

「でないと、どうもはあ、實に詰りましねえだ。」と女房も口を入れた。

「五十カペイカ？　いや、五十カペイカ結構。C'est encore mieux, j'ai en tout quarante roubles, mais ……（それはなほ都合がいゝ、俺はみんなで四十留持つてる、しかし……）」

百姓は馬を留めた。そして、二人がゝりでスチェパン氏を馬車へ引張上げ、女房とならんで袋

の上に坐らせた。旋風のやうな想念は彼の腦裡を去らなかつた。ときゞ、彼は自分の心持に氣がついた。そして、どうしたのか酷くぼんやりして了つて、まるで必要のない事ばかり考へてゐるのに、自分ながら驚くのであつた。こんなに頭が病的に衰弱してゐるのを意識すると、彼は堪らないほど心が重くなつて、寧ろ腹立たしいくらゐであつた。

「あれは……あれは一體どういふ譯で、うしろに牛なんか繋いだんだね？」彼は出し抜けにかう女房に問ひかけた。

「何を仰しやりますね、旦那さま、まるで今まで見た事がないみてえに。」と女房は笑ひ出した。

「町で買つたのでござりますよ。」と百姓が口を入れた。「うちの牛がねお前さま、この春くたばつて了ひましただ。はやり病でね。近所の牛がみんなやられて了つて、半分も殘りやしねえ。泣いたつて喚いたつて、追つ附く事でねえだ。」

かう言ひながら、彼は轍の跡の凹みに落ちて、容易に動けないでゐる馬に鞭をくれた。

「さう、それは露西亞の田舍でよくあるやつだ……それに、全體としてわれ〳〵露西亞人は……いや、全くよくあるやつだ。」スチェパン氏は言ひさしにして、やめて了つた。

「もしお前さまが先生だとすると、ハートヲなんかへ行つて何しなさるだね？　それとも、どこか先の方かね？」

「わたしは……いや、わたしはどこか先の方へ行くといふ譯でもないが……まあ云つて見ると、

ある商人の所へ行くんだよ。」

「きつとスパーソフだべえ？」

「さうだ、そのスパーソフなんだ。が、そんな事はどつちでもいゝのだ。」

「お前さまスパーソフさ行かつしやるとすれば、そんな靴で歩いて行つたら、一週間もかゝりますべ。」と女房は笑ひ出した。

「さうだ、さうだ。しかし、そんな事はどうでも構はない。我友（メーザニー）よ、どうだつて構はないんだよ。」スチェパン氏はじれつたさうに遮つた。

『恐ろしく好奇心の強い人たちだ。しかし、女房の方が亭主より話が巧い。どうも俺の觀察するところでは、二月の十九日（一八六一年、農奴解放令公布の日）からこの方（かた）、百姓の言葉使が違つて來たやうだ。が、俺の行先がスパーソフだらうと、スパーソフでなからうと、この連中になんの關はりがあるんだらう？　俺はちやんと金を拂つてやるのだ。さうすれば、何もこんなに執拗（しつこ）く聞く必要はないぢやないか。』

「スパーソフへ行かつしやるなら、蒸汽に乘らにやなりましねえだ。」百姓はまたしても話しかけた。

「それはほんの事でごぜえますよ。」と女房は活氣づきながら、言葉を挾んだ。「だによつて、この岸を馬車で行かつしやると、三十露里ばかり廻りになりますべ。」

「四十露里よ。」

「あした二時頃に、丁度ウースチェヴで蒸汽に間に合ひますだよ。」と女房は決めて了つた。

しかし、スチェパン氏は頑なに默つてゐた。二人の訊問者も口を噤んだ。百姓は馬の手綱をしやくりしやくりした。女房はとき〴〵簡單に、亭主と言葉を交はすばかりだつた。スチェパン氏はうとうと眠りに落ちた。と、恐ろしく面食つてしまつた――女房に笑ひながら搖ぶり起されて見ると、いつの間にやら、かなり大きな村に入つて、窓の三つついた、とある田舍家の車寄せの傍まで、來てゐるのであつた。

「旦那、休まつしやりましたかね？」

「これはどうしたのだ？　どこへ來たのだ？　あつ、なるほど！……いや……どうだつて構やしない。」とスチェパン氏は溜息をついて、馬車から下りた。

彼は沈んだ目つきで邊りを見廻した。かうした村の光景が、彼の目には何となく奇妙な、恐ろしく緣遠いものに映つたのである。

「あゝ、五十哥（カベイカ）、わたしは忘れてゐた！」何だか並はづれてせか〳〵した身振で、彼は百姓の方へ振向いた。

彼はもうこの人達と別れるのを、恐れてゐるらしかつた。

「どうか部屋ん中で勘定して貰ひていだね。」

「あつちの方がよろしうござりますべ。」と百姓が勸めた。

スチェパン氏はやにつこい階段を上つた。

『一體どうしてこんな事になつたのだらう？』彼は臆病な、とはいへ、痛切な怪訝の念に囚はれながら、かう呟いた。が、それでもとにかく家の中へ入つた。『彼女はこれを望んでゐたのだ。』何やらぐさと、彼の胸を突刺したやうな氣がした。

と、彼はまたもや何もかも忘れて了つた――家へ入つた事さへ忘れたのである。

それはかなり小綺麗な明るい百姓家で、窓が三つついて、二つの部屋に分れてゐた。宿屋といふほどではないが、昔からの習慣で、知合の通行人が立寄るやうな、ちよつとした休み場所だつた。スチェパン氏は別に鼻白むこともなく、正面の隅へ歩いて行つた。そして、挨拶するのも忘れて腰を下ろすと、そのまゝ考へ込んで了つた。さうしてゐるうちに、街道の濕氣のなかで三時間も過した後の事とて、並々ならぬ快い溫氣の感觸が、急に彼の全身に漲つた。かくべつ神經の强い人が熱病にかゝつた時には、いつもよくある事だが、寒い所からとつぜん暖い所へ移つたために、時々さつと脊筋を流れる惡寒までが、何だか急に快く感じられるやうになつた。彼は首を上げた。と、煖爐の傍で主婦さんが、一生懸命に燒いてゐる熱い薄餅の甘い匂が、彼の嗅覺を擽つた。彼は子供らしい微笑を浮かべながら、かみさんの方へ首を伸して、不意に子供らしい調子で言ひ出した。

「それは一たい何ですか？　ブリンですか？　これは結構。」

「旦那樣、いかゞでございますね？」すぐに主婦さんが丁寧な調子で引取つた。

「ほしいよ、全くほしいよ。そして……それから一つお茶もお願ひしたいね。」とスチェパン

氏は元氣づいて來た。

「湯沸を上げませうか？　はい〳〵、それならいつでも出來ますよ。」

大きな青い模樣の附いた皿に載せて、ブリンがそこへ運ばれた――ふつう百姓の家で拵へる薄つぺらな、半分小麥の入つたブリンで、熱い新しい牛酪のかゝつた、素敵に甘いやつだつた。スチェパン氏はさも甘さうにそれを試みた。

「この油つ氣の多い事、このうまい事！　たゞね、ブランディがぽつちり手に入つたらなあ。」

「それは、旦那樣、ヲォートカがお望みなんぢやありませんか？」

「そ、そ、その通り、ほんの少しでいゝんだ、全く少しでいゝのだ。」

「ぢや、五哥もあつたらよろしうございますね？」

「五哥だ――五哥――五哥――五哥、全く少しでいゝのだ。」さもお芽出たさうな微笑を浮かべながら、スチェパン氏は相槌を打つた。

試みに、農民に何かしてくれと賴むと、その者は出來る事なら、そしてしようといふ氣になつたら、一生懸命に愛想よく世話を燒いてくれる。ところが、その者に火酒を買つて來てくれと賴むと、ふだんの落ちついた愛想のいゝ態度が、急に何かしらせかく〳〵した、嬉しさうな深切に變る。それは、親身の者に對する心遣ひと言つてもいゝくらゐである。火酒を買ひに行く當人は、それを飲むのが賴み主で、自分ではないといふ事を、前からちやんと知つてゐても、やはり賴み主の未來の快感を、いくぶん自分でも感じるやうな具合である。三四分も經たぬ中に（酒屋はつ

いそこにあつた)、スチェパン氏の前の卓の上に、火酒(ヲオートカ)が四分の一シュトーフと、薄い綠色した大きな杯が現れた。

「これがみんなわたしのかね!」スチェパン氏は一方ならず驚いた。「家にもしじう火酒(ヲオートカ)があつたが、五哥(カベイカ)でこんなに澤山くれるものとは、今まで少しも知らなかつた。」

彼は杯になみ〳〵と注いで、立上つた。そして、幾分もの〳〵しい顏つきをしながら、部屋を横切つて、向うがはの隅へ行つた。そこには、彼と一緒に袋の上に坐つてゐた女房。——途中うるさくいろんな事を問ひかけた、眉の黑い女房が陣取つてゐる。女房はちよつとてれて、煮切らない調子で辭退を始めたが、禮儀の要求するだけの事を言つて了ふと、到頭たち上つて、ふつう女がするやうに、行儀よく三口に飲み乾した。そして、さも大仰な苦しみを顏に描いて見せながら、スチェパン氏に杯を返して、會釋した。彼も物々しく會釋を返して、得意げな色さへ浮かべながら、卓の方へ戻つた。

これは一種の感興(インスピレーション)によるのであつた。彼自身ですら一秒前には、あの女房をもてなしに出かけようとは、まるで考へてもゐなかつたのである。

『俺は人民に應對する術を完全に、完全に心得てゐる。それは俺がいつもあの連中に言つた事だ。』殘りの酒を壜の中から注ぎながら、彼は滿足げにかう考へた。酒は盃一杯なかつたけれど、それでも彼に元氣をつけて、體を溫めてくれた。少し頭にも上つたくらゐである。

『Je suis malade tout a fait, mais ce n'est pas trop mauvais d'être malade (俺はすつかり病氣になつて了つた、けれど病氣になるといふ事は、それほど惡い事ぢやないよ)』

「これをお購め下さいませんか?」といふ女の聲が傍で響いた。

彼はふと目を上げた。と、驚いた事には、自分の前に一人の婦人——一人の婦人(ジーム)、しかも相當(エル)の身なり(ナヂー)をした婦人(レール)——が立つてゐるではないか。年の頃はもう三十過らしく、一見したところ、甚だつゝましやかな女で、暗色(あんしよく)の著物を町風に著こなして、大きな鼠色の布(きれ)を肩に掛けてゐる。その顏には、何か非常に愛想のいゝ所があつて、それがすぐスチェパン氏の氣に入つたのである。彼女はたつたいま小屋へ歸つて來たばかりなので、それまで自分の荷物を、スチェパン氏の占領してゐる場所に近い、床几の上に置いてゐたのである——その中に折鞄が一つあつたが、彼は入りしなに好奇心をおこして、それに目をつけたのを覺えてゐる。それは恐しく大きな、模造皮で造つた袋だつた。この袋の中から、彼女は美しく製本した二册の本を取出して、スチェパン氏の傍へ持つて來た。表紙には十字架が捺してあつた。

「Eh……mais je crois que c'est l'Evangile (あゝ、これはきつと聖書ですね)。えゝ、えゝ悅んで頂戴します……あゝ、やつと分つた……あなたは世間でいふ聖書賣ですね。わたしはたび〳〵新聞で見ましたよ……五十哥(カベイカ)ですか?」

「三十五哥(カベイカ)づつでございます。」と聖書賣は答へた。

「えゝ、悅んで頂戴します。je n'ai rien contre l'Evangile (わたしも決して聖書には反對ぢやありません) そして……もう前から、讀み直して見たいと思つてゐたのです……」

この瞬間、自分はもう少くとも三十年ばかり、福音書といふものを讀んだ事がない、たゞ七年ばかり前に、ルナンの『耶蘇傳』を讀んだとき、ほんの少しばかり思ひ出した事があるきりだ、といふ記憶がちらと彼の心を掠めた。

小錢の持合せがなかつたので、彼は例の十留札を四枚（これが身上ありつたけなのだ）取出した。主婦さんは兩替の世話を燒いた。このとき彼は邊りを見廻して、始めて氣がついた——小屋の中にはかなり大勢の人が集つて、もう前から彼の樣子をじろ〳〵眺めながら、どうやら彼の噂をしてゐるらしかつた。町の火事の話も出てゐたが、例の牛を引張つた馬車の持主が、いま町から歸つて來たばかりなので、誰よりも一ばん熱心に話してゐた。放火とかシュビグーリンの職工とかいふ聲も聞えた。

『あの男は俺を乘せて來る時に、いろんな事をやたらに話した癖に、火事の話は少しもし掛けなかつたつけ。』何か妙な考へが、スチパェン氏の頭に浮かんで來た。

「旦那樣、ヱルホーヱンスキイの旦那樣、まあ、これはあなた樣でござりますか？　どうもまるで思ひも寄りません事で！……それとも、お思出しなさいませんか？」一人のかなりな年配をした小柄な男が、出し抜けにかう叫んだ。見かけたところ、昔風の家僕らしい樣子で、頤髯を綺麗に剃落し、折返し襟のついた長い外套を着てゐた。スチェパン氏は自分の名を聞いてぎよつとした。

「どうも失禮。」と彼は呟いた。「わたしはどうもはつきり思ひ出せないので。」

「お忘れでございますか！　わたくしはアニーシム——アニーシム・イワノフでございますよ。亡くなられたガガーノフの旦那にご奉公してをりました。あなた樣はよくスタヴローギンの奥樣とご一緒に、亡くなられたアヴドーチヤ樣の所へお見えになりましたので、始終お目にかゝつてをりました。わたくしはよく奥樣のお使で、あなた樣の所へ本を持つて參りましたし、彼得堡のお菓子も、二度ばかり持參した事がございます……」

「あゝ、さうだつけ、思ひ出したよ、アニーシム。」とスチェパン氏はほゝ笑んだ。「お前ここに住んでるのかね？」

「いえ、スパーソフの町はづれにある、B僧院にをります。アヴドーチヤ樣のお妹御マルファ樣の所でござります。お憶えでもございませう。舞踏會へお出かけのとき、幌馬車から落ちて、足をお折りになつたお方……いま僧院の近所に住つてをられますので、わたくしもそのお傍に附いてをります。ところで、たゞ今はご覽の通り、親類の所へ行かうと思つて、町の方へ出向きます所で……」

「ふん、なるほど、なるほど。」

「あなた樣にお目にかゝつて、まことに嬉しうございました。いつも優しくして頂きましたので。」とアニーシムはさも嬉しさうに微笑した。「一たい旦那樣、どこへお出かけになるのでございます。お見受けしたところ、まるでお一人つきりのやうでございますが……以前は決して、一人でお出かけの事はございませんでしたに。」

スチェパン氏は臆病さうに相手を見やつた。

「もしやわたくし共の方へ、スパーソフへいらつしやるのでは？」

「あゝ、わたしはスパーソフへ行くのだ。Il me semble que tout le monde va à Spassoff.（何だか世間の人達が、みんなスパーソフへ行くやうだ）」

「もしやフョードル樣の所ではございませんか？　それは、さぞお喜びなさる事でございませう。むかし大層あなた樣を尊敬してゐらつしやいましたからね。今でも始終あなた樣のお噂をしてをられますよ……」

「さうだ、さうだ、そのフョードルさんの所だ。」

「さうでせうとも、さうでせうとも。この百姓どもはね、旦那樣、何だかあなた樣が徒歩で街道を歩いてゐらつしやる所を、お見受けしたとか言つて、不思議がつてをるのでございますよ。どうも馬鹿なやつ等でございまして。」

「わたしは……わたしはその……わたしはね、アニーシム、英吉利人のやうに賭けをやつてね、ぜひ歩いて行つて見せるつて、そして……」

彼は額や蟀谷に汗を滲ましてゐた。

「さうでございませうとも、さうでございませうとも。」アニシームは容赦のない好奇の色を浮かべながら、耳を傾けるのであつた。しかしスチェパン氏は、その上おしこたへる事が出來なかつた。彼は當惑の餘り立上つて、小屋を出て行かうかと思つた。けれど、そこへ湯沸が出た。

その瞬間、今までどこかへ行つてゐた聖書賣が歸つて來た。彼は、一生懸命にげ路を捜さうとする人のやうな身振で、彼女の方へ振向いて、茶を薦めた。アニーシムは席を讓つて、立去つた。

實際、百姓たちの間には疑念が起つてゐたのである。『一體どういふ人なんだらう？　街道をてく〳〵歩いてる處を見つかつて、自分では先生だとか言つてるさうだが、みなりはまるで外國人みたいで、智惠と言つたら、小さな赤ん坊みたいだ。そして、辻褄の合はぬ返事ばかりしてゐる。まるで誰かの處から逃げ出したやうだ。しかも金を持つてる！』警察へ屆けようか、といふ考も湧いたくらゐである。『おまけに町の方もだいぶ物騒なんだから。』

けれども、これはアニーシムが卽座に丸く納めた。彼は表廊下へ出ると、樣子を聞きたがつてゐる人々に、スチェパン樣は先生どころではなく、『大層もない偉い學者で、立派な學問を仕事にしてをられる方だ。それに、以前はこの邊の地主で、もう二十二年の間スタヴローギナ大將夫人のお邸に暮して、一ばん大切な人に扱はれてをられる。また町でも皆の人から、並大抵でない尊敬を受けてをる方だ。貴族たちの倶樂部では、よく一晩の中に鼠色札（五十留）や虹色札（百留）を、骨牌の勝負に抛り出したものだ。位は高等官で、陸軍の中佐と同じ譯だから、もう一段で大佐といふ所なんだ。金があるたつて、金はスタヴローギナ大將夫人から、幾らでも際限なしに貰へるんだよ。』などと喋り立てるのであつた。

『Mais c'est une dame et très comme il faut（しかしこの女は立派な婦人だ、どこと言つて難のない婦人だ）』アニーシムの攻擊を免れてほつとしながら、スチェパン氏は快い好奇の念をもつて、隣に坐つてゐる聖書賣を觀察す

るのであつた。もつとも、こちらは茶を皿に移して、砂糖を嚙りながら飲んでゐた。『Ce petit morceau de sucre ce n'estrien（あの砂糖の塊り、ありや何でもない）……あの女には何かしら上品な、しつかりした、しかも同時に物靜な所がある。全く難（ルコム）のない婦人（フオー トウビユール）だ。尤も、普通のとは少し趣きを異にしてゐるけれど。』

彼は間もなくこの女の口から、名はソフィヤ・マトヴエーエヴナ・ウリーチナといふ事、本當の住所はK町で、そこに後家ぐらしをしてゐる姉がある事、町人の生れだといふ事、自分もやはり後家の身の上だといふ事、夫は軍曹あがりの少尉だつたが、セヴストーポリで戰死した事――などを知つた。

「だが、あなたはずゐぶん若い。まだ三十にならない（ヴー ナエー パー トラント アン）でせう。」

「三十四でございます。」とソフィヤはほゝ笑んだ。

「えゝ、あなたは佛蘭西語も分るんですか？」

「ほんの少しばかり。わたしはその後で四年ばかり、立派なお邸に暮しまして、お子さん方から習つたのでございます。」

彼女の物語つた所によると、僅か十八で夫に死なれた後、暫くセヴストーポリで看護婦をしてゐたが、その後、處々方々で暮した擧句、今では福音書を賣り歩くやうになつたとの事である。

「あゝ、メーモン ディユー、さうだ、いつか町で奇怪な、極めて奇怪な事件が起つたのは、あれはもしやあなたぢやありませんか？」

彼女は顏を赤くした。果して彼女であつた。

「Ces vauriens, ces malheurenx（あのやくざ者めらが、あの情けない奴等が！）……」と彼は昂奮の餘り慄へる聲で言ひ出した。病的な憎惡に充ちた記憶が、彼の心中に苦しいまでに呼醒されたのである。彼は瞬間、前後を忘れるほどであつた。

『おや、あの女はまた出て行つたぞ。』彼女がまたしても部屋にゐないのに氣がついて、彼ははつと我に返つた。『あの女はしよつちう外へ出て行つて、何やら忙しさうにしてゐる。心配さうな樣子さへしてゐる……やつ（バー）、俺は自我主義（シユ ドゼノン）になつて（エゴイスト）行くぞ！』

彼は目を上げた。と、再びアニーシムの姿が見えた。けれども、今度は周圍が非常に不氣味な光景を呈してゐた。小屋の中は百姓で一杯になつてゐた。それは明かに、アニーシムが連れて來たものらしい。そこにはこの家の亭主も居れば、牛を連れてきた百姓もゐるし、その他二人百姓と（これは馭者だといふ事だつた）、それからまだ小柄な半分醉つ拂つた男などがゐた。これは百姓風の服裝（なり）をしてはゐるけれど、酒で身を持崩した町人ともいふべき面がまへで、髯を綺麗に剃つてゐた。この男は誰よりも一番よく喋つた。みんな彼の事――スチェパン氏の事を、話してゐるのであつた。牛を連れた百姓は、どこまでも意見を曲げないで、岸づたひに四十露里も行くのは大まはりで、ぜひ蒸汽に乘らなければならぬと主張してゐた。半分醉つ拂つた町人と亭主は、熱くなつて反對した。

「そりやあお前、言ふまでもなく、且那樣は蒸汽でお出でになつた方が、近いに違ひない。そ

りやその通りさ。だけど、この頃のやうな天氣ぢや、蒸汽が向うへ行くまいよ。」

「行くよ、行くよ。まだ一週間ぐらゐは通ふよ。」とアニシームが誰よりも一番あつくなつた。

「そりや、まあそんなものだ！　だけど、出入りに決りがなくつてね。何しろ、もうだいぶ寒くなつて來たから。どうかすると湖尻で、三日くらゐ泊つてる事があるよ。」

「あした二時頃にや間違ひなく入つて來るよ。旦那さま、晩までにや大丈夫、スパーソフへお著きになりますよ。」とアニーシムは夢中になつてかう言つた。

『Mais qu'est ce qu'il a cet homme.（一體この男は何をしようと云ふんだらう）』この先どうなるのだらうと、スチェパン氏は恐しさに身を慄はしてゐた。

やがて、馭者も前へしやしやり出て、賃金の押問答を始めた。湖尻まで三留といふのであつた。ほかの連中もそれなら決して無法ではない、それが當りまへの値だ。湖尻までは夏ぢう、その値で行つてたのだと喚いた。

「だけど……こゝも大變いゝ所だ……わたしは別に行きたくないのだ。」とスチェパン氏はもぐもぐ言ひ出した。

「こゝがいゝんですつて、旦那さま、それは全くでございます。けれど、スパーソフの方が今どれだけいゝか分りませんよ。それにフョードル樣も、どんなにお悅びなさることやら。」

「あゝ困つた、皆の衆、これはどうもわたしに取つて、餘り思ひがけないことなので……」

そこへやつとソフィヤが歸つて來た。が、彼女は恐しく當惑したらしく、さも悲しさうに床几

へ腰を下ろした。

「わたしはとてもスパーソフへ行かれない！」と彼女は主婦さんに言つた。

「え、ぢやあなたもスパーソフへ行くんですか？」スチェパン氏は思はずぴくりとなつた。

話を聞いて見ると、スヴェトリーツイナといふ一人の女地主が、もう昨日から彼女をスパーソフへ連れて行くと約束して、このハートヲで待つやうに云ひつけたので、かうしてやつて來たとの事である。

「わたしこれからどうしたらいゝのでせう？」とソフィヤは繰返した。

「わたしの親愛な新しい友、ねえ、わたしだつてその女地主のやうに、その、何とか言つたつけなあ、あのわたしが馬車を傭つた村へ、あなたを連れて行つて上げますよ。そして明日――さう、あす二人でスパーソフへ行かうぢやありませんか。」

「あら、あなたもやはりスパーソフへいらつしやるのでございますか？」

「Mais que faire, et je suis enchanté！（だつて仕方がないんです、それにわたしは非常に嬉しいのです）わたしは心から悅んであなたをお連れしませう。そら、あの連中が頻りに望むもんですから、わたしは馬車を傭つたのです……わたしが傭つたのは、君達のうち誰だつたかねえ。」スチェパン氏は急にスパーソフへ行きたくなつた。

十五分ばかり後に、二人は蔽ひの附いた二輪車に座を占めた。彼は恐しく活氣づいて、さも滿足さうな樣子だつた。彼女は例の袋を持つて、感謝に充ちた微笑を浮かべながら、その傍に坐つ

た。アニーシムは二人を助け乗せた。

「ご機嫌よろしう、旦那さま。」彼は一生懸命に馬車の周りを奔走した。「あなた様にお目にかゝつて、こんな嬉しい事はございませんん！」

「さようなら、さやうなら、ご機嫌よう。」

「フョードル・マトヴェーギッチにお會ひになりますか、旦那様……」

「あゝ、會ふよ……フョードル・ペトローギッチにね……ぢや、さやうなら。」

二

「ねえ、あなた、あなたを友と呼ぶことを許して下さるでせう、さうでせう？」二輪馬車が動き出すや否や、スチェパン氏はかう口を切つた。「ねえ、わたしは……J'aime le peuple, c'est indispensable, mais il me semble que je ne l'avais jamais vu de près, Stasie……cela va sans dire qu'elle est aussi du peuple……mais le vrai peuple（わたしは人民を愛します。それは避くべからざる心持です。けれど、わたしは今まで人民に接近した事がないやうな氣がする。ナスターシヤ……あの女がやはり人民から出たのは言ふまでもない事です。がしかし本當の人民）つまり街道に立つてゐるやうな、本當の人民の事を言ふのです。どうもあの連中は、わたしの行くへばかり氣にしてるやうだ……が、こんな厭な話は止めませう。わたしはどうも少し喋り過ぎるやうだが、それは多分せつかちのためでせう。」

「あなたはお氣分が勝れないやうでございますね。」鋭い、けれども恭しい目つきで、ソフィ

ヤはぢつと彼を見入つた。

「いや、なに、ちよつと何かに包つたら、それでいゝんです。全體として、何だかせい〳〵した風が吹きますね、何だか少しせい〳〵しすぎる。しかし……まあ、そんな事は忘れませう。わたしが主に言はうとしたのは、そんな事ぢやないのです。親愛な比類なき友、わたしは殆ど幸福になつたやうな氣がする。しかも、その原因はあなたなんですよ。しかしわたしに取つて、幸福は不利益なんです。だつて、わたしはすぐに自分の方から、すべての敵を赦して了ふからです……」

「だつて、それはたいへん結構ぢやございませんか。」

「いつもさうとは限りませんよ、無垢な友よ、福音書といふものは……ねえ、これからは二人で傳道して歩かうぢやありませんか。わたしも悦んで、あなたの美しい本を賣りますよ。これはいゝ思ひつきかも知れない、そんな氣がする。quelque chose de très nouveau dans ce genre（さういふ風な事の中では何か非常に新しいもののやうだ）。露西亞の人民は宗教心に富んでゐます。それはもう認められてゐるけれど、まだ福音書を知らない。わたしはそれを彼らに說いて聞かせよう……口づからの說明に依つて、或ひはこの驚くべき書物の誤りを、正す事が出來るかも知れません。尤も、わたしはこの書物に對して、非常な尊敬を拂ふ事を惜まないのですがね。わたしは街道に於いても有用な材となります。わたしは常に有用の材でした。わたしはいつもあの連中にさう言つてたのです。そしてのあの愛すべき思知らずの女にも……おゝ、赦しませう。赦しませう。何よりも第一に、い

つでも、あらゆる人を赦してやりませう。そして、自分も人から赦して貰へるものと、當てにしようぢやありませんか。だつてあらゆる人はお互に、罪を犯し合つてゐるんですからね！　えゝ、みんな罪があるんです！……」

「それは大變よく仰しやいました。わたしにも何だかさう思はれます。」

「さう、さう……わたしも大變よく言つたやうな氣がします。わたしは世間の人たちにも非常に巧く話すつもりです。しかし、わたしは何を主に話すつもりだつたのかしらん？　わたしはしじう話が脇へそれて、はつきり覺えられないんですよ……ねえ、あなたは許して下さるでせうか、わたしはあなたと分れたくないのです。わたしはかう感じるのです、あなたの目とそして……わたしは、あなたの身のこなしにも驚嘆してるんです。あなたは本當に素直（そつちよく）です。あなたの言葉にも何だか賤しい所があるし、お茶を茶碗から皿へ移して、あの酷い砂糖の塊を嚙つたりされるけれど、しかしあなたには何かしら美しい所があります、それは顏つきでも分ります……あゝ、赤い顏をしないで下さい、わたしを男として恐れないで下さい、Chère et incomparable, pour moi une femme c'est tout（親しく類ひなき友よ、わたしに取つて女といふものは生活の全部なのです）わたしは女の傍に暮さずにはゐられない。けれどたゞ傍にゐるだけです……わたしは恐ろしく、全く恐ろしく脇へそれて了ひましたね……わたしは何を言はうと思つたのか、どうしても思ひ出せない。あゝ、常に神に依つて女を送らる る者は幸なりです、そして……わたしは一種の歡喜さへ覺えるやうな氣がしますよ。街道にも高遠な思想があります！　さうだ――わたしが思想の事を言はうとしたのは、この事だつたのです。

やつといま思出した。今までは言ふ事が壺に嵌らなかつたのです。が、何だつてあの連中は、わたしをこんなに先の方へ連れて來たんだらう？　あすこもなか〳〵よかつたんですがねえ。こゝは――cela devient trop froid. A propos, j'ai en tout quarante roubles et voilà cet argent（何だか寒くなつて來る。ところで、わたしはこゝに四十留もつてゐます。これがその金です）さあ、取つて下さい。わたしはどうも扱ひ方が下手です。落したり、取られたりして了ひます。それに……わたしは何だか眠くなつて來たやうな氣がする。何だか頭の中がくる〳〵廻るやうだ。あゝ、廻る、廻る、廻る。おゝ、あなたは何といふ深切な人でせう。それは何を掛けて下すつたのです？」

「あなたはきつと酷い熱病にかゝつてゐらつしやるんですよ。わたし毛布を掛けて上げましたの。たゞお金の事はわたし……」

「おゝ、お願ひだから、n'en parlons plus, parce que cela me fait mal（もうそんな話は止めませう、何だか氣持が惡くなるか）。おゝ、あなたは何て親切なんでせう！」

彼は何だか急にぱつたり言葉を切つて了つた。と、思ひがけないほど早く、熱病やみらしい惡寒に苦しめられながら、寢入つてしまつた。十七露里も續いた村道は、餘り平坦な方でなかつたので、馬車は容赦なくがたぴし搖れるのであつた。スチェパン氏はたび〳〵目を醒した。そして、ソフィヤがそつと當てがつてくれた枕から、ちよつと頭を持上げて、彼女の手を取りながら、かう聞くのであつた。

『あなたはこゝにゐますね？』

それは彼女が自分の傍を去りはせぬかと、恐れるかのやうであつた。彼はソフィヤに向つて、何かの獸が齒を剝出しながら、大きな口を開けてゐるのを夢に見て、それが厭で堪らなかつたと話した。ソフィヤは彼の身が恐ろしく心配になつて來た。

馭者は二人の客をいきなり一軒の大きな田舍家へ連れて行つた。それは、窓の四つもついた家で、庭の中には幾つかの離れもあつた。目を醒したスチェパン氏は、大急ぎで中へ入つて、家ぢうで一ばん廣く、一ばん綺麗な二つ目の部屋へ通つた。寢ぼけたやうな彼の顏は、恐しく忙しげな表情に變つた。彼は早速おかみを摑まへて（それは四十恰好の眞黑な髮をした、まるで鼻髯でも蓄へたやうに見える、脊の高いしつかりした女房だつた、）自分は一人でこの部屋を借切つて了ふ。『そしてちやんと閉切めて了つて、誰もこゝへ入れる事はならん。parce que nous avons à parler. Oui, j'ai beaucoup à vous dire, chère amie（わたし達は話があるんだから。さうですよ、ソフィヤさん、わたしは澤山あなたに話したい事があるんです）。わたしはそれだけの事をする、きつとするよ！』と彼はお主婦に手を振つて見せた。

彼は恐ろしく急き込んでゐたけれど、何だか舌がよく廻らなかつた。お主婦は無愛想な樣子で聞いてゐたが、承諾のしるしに沈默を守つてゐた。とはいへ、その沈默には何かしら無氣味なところが感じられた。彼はそんな事には一さい頓著なしに、せか〳〵した調子で（彼は恐ろしく急き込んでゐた）、すぐにあちらへ行つて、さつそく出來るだけ早く、『一刻も猶豫しないで』何か喰べるものを拵へてくれと、おかみに命じた。

このとき口髯の女房は怯へ兼ねた樣子で、

「こゝはあなた宿屋ぢやありませんよ。わたし達はお客さんに食事の用意は致しません。まあ、蝦でも煑て、湯沸（サモワール）を立てるぐらゐの事で、そのほかには何も出來ませんよ。新しい魚は、明日でなければ出來ませんからね。」

けれども、スチェパン氏は兩手を振りながら、『それだけの事はするよ。早く、早く。』と腹立しげな、じれつたさうな聲で繰返すのであつた。到頭魚汁（ウハー）に烙雞（やきとり）といふ事に決つたが、おかみは村中さがしても、雞は手に入らぬと言つた。けれど、とにかく捜しに行くのを承知したが、まるで大變なお慈悲でもかけてやるやうな顏つきだつた。

お主婦（かみ）が出て行くや否や、スチェパン氏は、すぐさま長椅子に腰を下ろし、ソフィヤをも自分の傍に掛けさせた。部屋の中には長椅子や、安樂椅子があつたけれど、恐ろしい姿になつたものばかりであつた。全體として部屋はかなり廣く、一部分は板で仕切られて、その向うに寢臺など置いてあつた。黃色い、ぼろ〳〵の古い紙を張つた壁には、神話か何かを描（か）いた恐ろしい石版繪が掛けてあるし、正面の隅には額のやうになつたのや、折屏風のやうになつた銅（あか）の聖像が、長い列をなしてかゝつてゐる。全體に、道具類は奇妙な寄せ集め物だつた。何か都會風なところと、太古の俤を持つた百姓風のところが、見苦しく一緒くたになつたやうな部屋である。しかし、彼はこんな事には聊かの注意も拂はなかつた。それどころか、家から十間ばかりの邊から展けてゐる大きな湖を、窓から覗いて見ようともしなかつた。

「やつとわたし達は二人きりになりましたね。もう誰も入れやしない！　わたしはあなたに何

もかもすつかり、そも〳〵の始りから聞いて貰ひたいのです。」

ソフィヤは烈しい不安の色を浮かべながら、彼を押し止めた。

「あなたご存じでございますから、スチェパン様……」

「Comment, vous savez déjà mon nom ?（えつ、あなたはもうわたしの名を知つてるんですか？）」彼は悦しさうに微笑した。

「さつきアニーシムさんと話をしてゐらしつた時、ちよつと傍から伺つたんですの。ところで、生意氣なやうでございますが、わたしの方から一つご注意申したい事がありますので……」

かう言つて彼女は、誰か立聽でもしてはゐないかと、閉切つた戸口の方を振返りながら、早口にかう囁いた。ほかでもないこゝに――この村にゐるのは、飛んでもない災難だ。こゝの百姓はみんな漁師で、それをなりはひにしてゐるけれど、毎年夏になると、旅客の懐から思ふ存分の金を絞り取るのである。この村は通り抜けが出來ないで、行止りになつてゐるので、汽船が入つて來て泊る事になつてゐるけれど、よく汽船の來ないことがある。ちよつと少し天氣模樣が悪くなると、どんな事があつてもやつて來ない。すると二三日の中に、旅客がうんとたて込んで、村中の家が一杯になつてしまふ。村の者はそればかり待構へてゐるので、すべての値段を三倍ぐらゐ高く絞り取る。それに、この家の亭主は、土地でも一番の金持なので、恐ろしく高慢な無作法な男である。何しろ、網だけでも千留からのものを持つてゐる、とかういふのであつた。

スチェパン氏はソフィヤの恐ろしく元氣づいた顔を、殆どなじるやうな目つきで見つめながら、幾度か押し止めるやうな手つきをした。けれども、彼女は少しもそれに怯まないで、言ひたいだけの事を言つて了つた。彼女の言葉に依ると、ソフィヤはもうこの夏、ある一人の『ごく立派な婦人』と町からこゝへ來て、やはり汽船の著く間、まる二日泊つた事があるが、その時の辛かつた事は、今おもひ出しても恐しいくらゐだ、といふのであつた。

「ところが、スチェパン様、あなたはこの部屋を、一人で借切つて了ふと仰しやいましたね……わたしはたゞ前もつてお知らせしたいと思つて……あの向うの部屋にも、やはりお客さんがあるのです。一人はだいぶ年配の人で、一人はまだ若い方でございます。それから、子供をつれた奥さんのやうな方もゐらつしやいます。ところで、明日の二時頃までには、この家が一杯になるほど人が集ります。もう二日ばかり汽船が入りませんでしたから、明日は必ず來るに相違ないのでございます。かういふ譯で、部屋を借切にしたり、食事をご註文になつたり、ほかの客を斷らせたりなすつた、そんな事でうんと取られるに違ひありません。都會でも聞かないやうな値段を吹つかけるに違ひありません……」

けれども、彼は苦しかつた、しんから苦しかつたのである。

「やめて下さい、あなた、お願ひだから、やめて下さい。Nous avons notre argent et après――et après le bon Dieu（わたし達にはあの金がある。その後は神様のお心に任せませう。そして後はあなたはわたしを苦しめるんです。）」と彼はヒステリックな聲で叫んだ。「わたし達の前には未來がある。それだのにあなたは……あなたはその未來の事で、わたしを脅しつけるんですよ……」

たのやうな高尚な考へを持つた人が、どうして……Assez, assez, vous me tourmentez（澤山です、澤山です、）わたしは不思議なくらゐです。あな

彼はさつそく自分の經歴を語り始めた。けれど、餘り急き込んでゐたので、始めの中はよく分り兼ねるほどであつた。物語はかなり長い間つゞいた。魚汁が出、雞が出て、遂に湯沸が出たが、彼はいつまでもいつまでも語り續けた……物語はいくぶん奇妙な病的な感じを與へたが、しかし彼自身もう病氣だつたのである。それはとつぜん襲つて來たはげしい智力の緊張だつた。かういふ狀態は勿論すぐ後で、彼自身の組織内に於ける異常な力の沮喪となつて、反動を來すに相違なかつた。ソフィヤも彼の物語を聞いてゐる中に、これを豫感して、憂慮の念を禁じ得なかつた。彼は『まだ若々しい胸を抱きつゝ、野を馳け廻つた』幼年時代から話を始めた。一時間も經つて、やつと二回の結婚と、伯林の生活まで進んだのである。尤も、わたしはかうした彼を嘲笑しようとは思はない。そこには實際、彼に取つて最も崇高なある物があつた。新しい言葉で云へば、生の爭鬪が含まれてゐるのであつた。彼は將來の行路の友として擇んだ女を、自分の目の前に置いてゐるので、少しも早く一切の事を彼女に頒たうと思つたのである。彼の天才は、今後生涯を俱にする女に取つて、祕密として埋めらるべきでない……事に依つたら彼はソフィヤの事を、無上に誇張して考へてゐたかも知れぬ。けれど、彼はもう選擇を了へたのである。彼は女なしに生きてゐられなかつた。彼女が彼の言葉を殆ど少しも理解してゐない、一ばん肝腎な點さへ會得できないでゐるといふ事は、彼も自分で相手の顏つきに依つてはつきり見て取つた。

『こんな事は何でもない、も少し待つて見よう。まあ、當分の間は、直覺ででも悟つてくれるだらう……』

「わが友よ、わたしはたゞあなたの心臓がほしいだけなんです！」物語を止めて、彼はかう叫んだ。「それから、今わたしを見つめてゐらつしやる、その優しい魅力に富んだ目つきとあゝ、どうか顏を赤くしないで下さい！　もうお斷はりしたぢやありませんか……」

やがて物語が進行して、今まで一度も誰一人として、スチェパン氏を理解し得るものがなかつた事や、『わが露西亞に於いては、多くの才あるものが空しく滅びて行く』事や、さういふ殆ど天下の大議論と言つていゝやうな條に移つた時、この憐れな囚の女に取つては、ます〳〵雲を摑むやうな所が多くなつて來た。

『どうも餘り高尚な事ばかりで。』彼女は後でしほ〳〵とした聲でかう言つた。

彼女は少し眼を丸くしながら、いかにも骨の折れるらしい樣子で、耳を傾けてゐた。スチェパン氏が『現代第一流の先覺者連中』に對して、諧謔や皮肉を弄し始めたとき、彼女はもう心細くなつて了つた。二度ばかり彼の笑ひに對する答として、につこりほゝゑまうと試みたが、その結果は泣くよりも惡かつた。で、スチェパン氏の方でも、到頭ばつが惡くなつて、一さう猛烈な毒毒しい調子で、虛無主義者や『新しい人々』の攻擊にかゝつた。彼女はもうてもなく慴えあがつて了つた。彼女が始めて、幾分ほつと息をついたのは（尤も、それは極めて皮相な安心であつた）、彼の戀物語が始つてからである。女といふものは、たとへ尼であらうとも、やはり常に女である。彼女は微笑を浮かべたり、首を振つたりしたが、すぐその後から顏を眞赤にして、伏目になつた。それがすつかりスチェパン氏を有頂天にして了つた。彼は感興にかられて、隨分たくさ

ん嘘をついた。彼の話によると、ヴルヴーラ夫人は世にも美しい黑髪女(ブリユーネット)であつた（彼得堡ばかりでなく、歐羅巴の多くの首都を熱狂せしめた事さへある）。夫は『セヴストーポリの戰ひで彈丸に貫かれて』斃れたが、その原因は自分が夫人の愛に價しない事を感じて、妻を競爭者（と云つて、つまりスチェパン氏の事なので）に讓るためであつた。

「さう氣まりを惡がらないで下さい、わが淑やかな友(マドランキーズ)よ、わが基督教徒(クレスチエンス)よ！」自分で自分の物語を殆ど全部信じながら、彼はソフィヤに向つてかう叫んだ。「それは一種きはめて高尚な感情でした。實際あまりに微妙な感情だつたものだから、わたし達は二人とも一生の間、一度も口に出して言はなかつたくらゐです。」

かういふ狀態になつた原因は、彼の引續いて話した所によると、一人の金髪女(ブロンド)であつた（この金髪女(ブロンド)はダーリヤとでも假定しなければ、スチェパン氏が誰の事を言つたのか、わたしには見當がつかない）。この金髪女(ブロンド)はいろ〳〵と黑髪女(ブリユネット)の恩になつてゐて、遠い親類として、恩人の家に生長したのである。遂に黑髪女(ブリユネット)はスチェパン氏に對する金髪女(ブロンド)の戀に氣がついて、自分といふものの中に閉籠る人となつて了つた。金髪女(ブロンド)もまた同じやうに、スチェパン氏に對する黑髪女(ブリユネット)の戀に氣がついて、やはり自分といふものの中に閉籠るやうになつた。かうして、三人の者は互に義理をたて合つて、惱ましい心を抱きながら、めい〳〵自分の中に閉籠つたまゝ、二十年の沈默を守り通したのである。

『おゝ、それは何といふ熱情だつたらう、本當に何といふ烈しい熱情だつたらう！』僞りなら

ぬ歡喜の情にすゝりなきながら、彼はかう叫んだ。『わたしは彼女の（つまり黑髪女(ブリユネット)の）美の眞盛りを見た。わたしは毎日彼女が自分の傍を、まるで我とわが美しさを恥ぢるやうな風情で通り過ぎるのを（一度など彼は『充實した自分の肉體を恥ぢるやうに』と言つたものだ）、胸を掻搔られるやうな思ひで眺めた。』

遂に彼はこの熱に浮かされたやうな、二十年の夢を棄てゝ逃れた。

『二十年(ダンタン)！　そして、いまこの街道に立つたのです……』

それから彼は、何かまるで腦に炎症でも起したやうな調子で、『この思ひがけない運命的(フエータル)な二人の邂逅――永遠に續くべきこの邂逅が』、果して何を意味してゐるかといふ事を、ソフィヤに說明して聞かせた。到頭ソフィヤは恐しく當惑した樣子で、長椅子から立上つた。女の前に跪かうとするやうな、素振さへ見せたからである。彼女はほとんど泣き出さないばかりだつた。黃昏の色は次第に濃くなりまさつた。二人はこの閉切つた部屋の中に、もう幾時間もこもつてゐたのである……

「いえ、もうあちらの部屋へやつて下さいまし。」と彼女は澱み澱み言ひ出した。「でないと、人が何とか思ひますから。」

彼女はたうとう振切つて行つて了つた。彼は、すぐ横になつて休むと約束して、彼女を外へ出してやつたが、別れ際に恐ろしく頭が痛いと訴へた。ソフィヤは入つて來た時から、自分の鞄やほかの荷物を、取つつきの部屋へ殘して置いた。それは、お主婦(かみ)などと一緒に寢るつもりだつた

ので。けれども、彼女は體を休める事が出來なかつた。

夜更になつて、スチェパン氏は腹痛の發作を起した。それはわたしを始めとして、友人一同に熟知されてゐるいつもの病氣で、ふつう神經的昂奮や、精神的動搖の結果として現れるものであつた。哀れなソフィヤは、一晩ぢう寢る事が出來なかつた。彼女は病人を看護する必要上、度々おかみの部屋を通つて、小屋を出たり入つたりしなければならなかつたので、そこに眠つてゐる旅客やおかみが、ぶつ〳〵言ひ出して、夜明ごろ、彼女が湯沸(サモワール)を立てようと思ひ立つた時などは、たうとう口汚く罵り始めたほどである。スチェパン氏は發作の間ぢう、半意識の狀態にあつた。時々、ゆめうつゝのやうに、湯沸(サモワール)の用意をしてゐる事だの、自分が何か飲まして貰つてゐる事や（それは木苺入りの茶なので）、何かで腹や胸を暖めて貰つてゐる事などが感じられた。けれども、彼は絶えず彼女を自分の傍に感じてゐた。これはあの女(ひと)が來たのだな、あの女(ひと)が行つたのだな、あの女(ひと)が自分を寢臺から起したのだな、あの女がまた寢さしてくれたのだな、と感じた。夜中の三時頃から、少し樂になつた。彼は身を起して、寢臺から足を下ろし、殆どなんにも考へないで、いきなり彼女の足もとへ身を投げた。これはさつき膝を突いた時の氣取つた態度とは、ぜん〳〵別なものだつた。彼は他愛なく女の足もとに倒れ伏して、着物の裾を接吻するのであつた。

「澤山ですよ、わたしはまるで、そんな事をして頂く値うちのない女です。」彼を寢臺へ上らせようと努めながら、彼女はしどろもどろにかう呟いた。

「あなたはわたしの救ひ主です。」彼は恭しく女の前に兩手を合せた。「Vous êtes noble comme une marquise！（あなたはまるで侯爵夫人のやうに、氣高い方です）わたしはやくざ者です！　おゝ、わたしは一生涯、破廉恥漢で通しました……」

「どうか心を落ちつけて下さい。」とソフィヤは祈るやうに言つた。

「わたしはさつき嘘をついた――それは單に虚飾のためです、役にも立たない贅澤心から出た事です。えゝみんな、みんな嘘つぱちです、始から了ひまで……あゝ、何といふやくざ者だ！」

かうして發作は一轉して、ヒステリックな自己譴責へ移つて行つた。わたしは以前、ヴルヴーラ夫人に宛てた彼の手紙を紹介するに當つて、もうこの種の發作に就いて一言して置いた。彼は突然リーザの事や、昨日の朝の邂逅の事を思ひ出した。

「あれは實に恐しい事だつた――きつと何か不幸が起つたに違ひない。それだのに、わたしは何か聞かなかつた、なんにもつき留めないで來た！　わたしは自分の事ばかり考へてゐたのだ！　あの女(ひと)はどうしたのだらう？　あなた、一體あの女(ひと)がどうしたのか知りませんか？」と彼はソフィヤに縋るやうにして訊ねた。

それから彼は、『自分の心は決して變らない』、必ずあの女(ひと)の所へ歸る、と誓ふのであつた（それはヴルヴーラ夫人の事なので）。

「わたし達は（つまりソフィヤと一緒に）毎日あの女(ひと)の玄關口へ行つて、あの女(ひと)が朝の散歩に出る所を、そつと見ませう……あゝ、わたしはあの女(ひと)にいま一方の頰を打つて貰ひたい。わたし

は悦んで打たれます。わたしは、あなたの持つてる本に書いてあるやうに、いま一方の頰をあの女にさし出します！　今こそ分りました。いま一方の頰を向けるといふ意味が、今やつと合點が行きました。今まではどうしても分らなかつたのです！」

かうして、ソフィヤの生涯で最も恐しい二日の日が到來した。彼女は今でも、この二日の事を思ひ出すと、胸の戰きを禁じ得ないのである。スチェパン氏の病狀は次第に險惡になつて、汽船は今度こそかつきり午後二時に入港したけれど、彼はそれで出發する事が出來なかつた。ソフィヤも彼ひとり見殘して行く氣力がなかつたので、やはりスパーソフ行きを延す事にした。彼女の話に依ると、スチェパン氏は汽船が出て了つたと聞くと、恐ろしく喜んだとのことである。

「いや、有難い、いや、結構だ。」と彼は寢床の中からかう言つた。「わたしは、スパーソフへ行かなきやならないかと、心配で堪らなかつたですよ。こゝは實にいゝ。こゝはどこよりも一番いゝ……あなたはわたしを置いて行きやしないでせう？　あゝ、行かないでゐてくれたんですね！」

しかし、『こゝ』は決してそんなに好くはなかつた。彼は少しも女の苦勞を察しようとしなかつた。彼の頭はいろんな空想ばかりで、一杯になつてゐた。彼は自分の病氣を何か一時的な、些細な事のやうに思つて、そんな事は少しも氣にかけなかつた。たゞ二人で『あの本』を賣りに行く事ばかり考へてゐた。彼はソフィヤに、少し福音書を讀んでくれと頼んだ。

「わたしはもう前から讀んだ事がない……原本でね。だから、誰かに聞かれたら、間違つた事

を言ふかも知れない。何と言つてもやはり準備して置かなきやなりませんよ。」

彼女は彼の傍へ腰を下ろして、書物を擴げた。

「あなたは讀み方が巧いですね。」一行も讀終らない中から、彼は口を入れた。「わたしには分る、ちやんと分る。わたしの眼鏡ちがひぢやなかつた！」曖昧な、けれども勝誇つたやうな調子で彼はかう附けたした。

全體として、彼はしじう勝誇つたやうな狀態になつてゐた。彼女は山上の垂訓を通讀した。

「澤山だ、澤山だ、わが子よ、澤山です……一體あなたは、これだけでも不十分だと思ふんですか？」

彼はがつかりと、力拔けがしたやうに目を閉ぢた。非常に衰弱してゐたが、まだ意識を失ふには至らなかつた。ソフィヤは、彼が寢入つたかと思つて、そつと立上らうとしたが、彼はいきなり呼び止めた。

「わが友よ、わたしは一生涯うそばかりついてゐた——本當を言つてる時でさへ、さうなんだ。わたしは今まで一度も、眞理のために物を言つた事がない、いつも自分のためばかりです。わたしはいつでもそれを承知してゐた。けれど、本當にそれを感じたのは、今が始めてです……おゝ、わたしが一生のあひだ、自分の友情をもつて侮辱した親友たちは、今どこにゐる事だらう？　みんなさうだ、誰も彼もさうなのだ！　でもねえ、わたしは今でも、嘘をついてるかも知れませんよ。いや、きつと今も嘘をついてるに相違ない。何よりいけないのは、嘘をつきながら、自分か

ら先に立つて、それを本當にする事です。人生で何よりも難かしいのは、嘘をつかないで生きる事です……殊に、自分自身の嘘を本當にしない事です。えゝ、えゝ、全くその通り。が、まあ待つて下さい、それは後にしませう……わたし達は一緒にゐませう、ね、一緒に居ませうね！」彼は有頂天になつて、かう言ひ足した。

「スチェパン樣。」とソフィヤはおづ〳〵訊ねた。「町へお醫者さまを呼びにやつたらどうでせう？」

彼は仰天して了つた。

「なんのために？ Est-ce que je suis si malade. Mais rien de sérieux.（一體わたしはそんなに惡いんですか。なに大した事はないんですよ）それに、緣もない他人を呼んで、どうするのです？ もし人に知れたら――その時はどうします？ いや、いや、他人なぞ誰も要らない。わたし達は二人きりでゐませう、二人きりで！」

「ところで、」暫く無言ののち、彼はまた言ひ出した。「も一つ何か讀んで聞かして下さい、出たら目に、何でも目に入つたところを。」

ソフィヤは本を展いて、讀み始めた。

『どこでも偶然あいた處を、偶然あいた處を。』と彼は繰返した。

『なんぢラオデキヤの敎會の使者に書贈るべし……』

「それは何です？ 何です？ 一體どういふ處です？」

「これは默示錄でございます。」

「O, je m'en souviens, oui. l' Apocalipse. Lisez, lisez.（あゝさうだ、思ひ出した、默示錄です、讀んで下さい、讀んで下さい。）。わたしはその本で、二人の未來を占つてるんですよ。だから、どんな占ひが出たか知りたい。早く使者の所から讀んで下さい、使者の所から……」

『なんぢラオデキヤの敎會の使者に書贈るべし。アメンたるもの、忠信なる眞實（まこと）の證者、神の造化の始めなるもの：かくの如く言ふと。曰く、われなんぢの行ひを知れり。なんぢすでに溫然（ぬるく）して、冷かにも非ず、熱くも非ず。このゆゑに、我なんぢをわが口より吐出さんとす。なんぢ自ら我は富みかつ豐になり、乏しき所なしといひて、實は惱めるもの、憐むべきもの、また貧しく、めしひ、裸なるを知らず。』

「それも……それもあなたの本にあるんですか！」枕から頭を擡げて、兩眼を輝かせながら、彼はかう叫んだ。「わたしは今までこの偉大な章を、少しも知らずにゐましたよ！ 全くですね、なま溫いよりは寧ろ冷たい方がいゝ。單になま溫いよりは、寧ろ冷たい方がいゝです！ あゝ、わたしはそれを證明します！ たゞ見捨てないで下さい、わたしを一人きり置いて行かないで下さい！ わたし達はそれを證明しなきやなりません、證明しなきや！」

「わたしはこの通り、あなたを見捨てゝやしないぢやありませんか、スチェパン樣、それに、決して見捨ては致しません！」涙の目で彼を見つめながら、その手を取つて握りしめると、自分の胸へ持つて行つた（その時は、あの方がお可哀さうで堪らなかつたものですから、と彼女は後

でかう語つた)。

彼の脣は引つつたやうに慄へた。

「けれどスチェパン様、それはそれとしても、一體どうしたものでございませう？　誰かあなたのお知合かご親戚に、お知らせしなくてよろしいでせうか？」

けれども、彼の驚きやうが餘り烈しかつたので、二度もあんな事を言ひ出さなければよかつたと、彼女は後悔したほどである。彼は戰々兢々たる面もちで、どうか誰も呼ばないやうに、何事も企てないやうにしてくれと、祈らないばかりに賴んだ。彼女の誓を聞いた上に、まだしつこく繰返した。

『誰も、誰も呼ばないでね？　わたし達は二人きりでゐませうね、本當に二人きりで、二人(スー)で一緒(パルーロン)に出發(アンサムブル)しませう。』

またもう一つ都合の惡い事には、主人主婦が同樣に心配を始めて、ぶつ〳〵言ひながら、ソフィヤを責め出した。彼女は夫婦に拂をして、なるべく金を見せるやうに努めた。これが一時事態を緩和したが、しかし亭主は、スチェパン氏の『免狀』を見せろ、と言ひ出した。病人は傲慢な微笑を浮かべながら、自分の小さな鞄を指さした。ソフィヤはその中から彼の退職辭令か、何か、そんな風の物を搜し出した。彼は一生これで押通して來たのである。亭主はそれでもなか〳〵得心しないで、『どこでもい〻から、あの方を早く引取つて貰ひたい。こ〻は病院ぢやないのだから。もし亡くなるやうな事でもあつたら、どんな面倒が起らないとも限らぬ。それこそ迷惑な話だから。』と言ふのであつた。ソフィヤは亭主にも、醫者の事を相談して見たが、もし町の醫者を迎へにやつたら、それこそたいへん金がかゝるといふ事なので、醫者の件は一さい斷念しなければならなかつた。彼女は愁然として病人の所へ歸つた。スチェパン氏は次第に衰弱するのみであつた。

「今度はもう一度あの……豚のところを讀んで聞かして下さい。」とつぜん彼はかう言つた。

「何ですつて？」とソフィヤは恐しく面くらつた。

「豚のところです……それはあの……あの豚(セ)(コション)ですよ……わたしも覺えてゐます、惡鬼が豚の中に入つて、みんな溺れて了つたといふ話。ぜひそれを讀んで聞かせて下さい。何のためかつて事は、後で話しますよ。わたしは一字々々おもひ出したいのです。一字々々……」

ソフィヤは福音書をよく知つてゐたので、すぐ路加傳の中からその場所を搜し出した。それは、この物語の題銘として掲(か)げた章である。わたしはもう一度こ〻へ引用しよう。

「こ〻に多くの豚のむれ山に草を食ひゐたりしが、彼らその豚に入らん事を許せとねがひければ、これを許せり。惡鬼その人より出でて豚に入りしかば、その群は烈しく馳け下り、山坡(がけ)より湖に落ちて溺る。牧者(かふもの)そのありし事を見て逃げ行き、これを邑(まち)またむら〳〵に告げたり。ひとびとそのありし事を見んとて、出でてイエスのもとに來れば、惡鬼の離れし人きものを着け、たしかなる心にてイエスの足もとに坐せるを見て、懼れ合へり。惡鬼に憑かれたりし人の救はれしさまを見たる者、この事を彼らに告げければ。』

「わが友よ、」スチェパン氏は並々ならぬ昂奮の體で言つた。「ねえ、あなた、この驚嘆すべき……非凡な一章は、わたしに取つて一生の間、この本に於ける躓きの石だつた……だから、わたしはもう子供の時分から、こゝの所を憶え込んでゐましたよ。ところが、今ある一つの思想が一つの比喩が浮かんで來ました。今わたしの頭には、恐しく澤山な思想が浮かんで來るのです。ねえ、これは丁度わが露西亞の國そのまゝです。この病める者から出て豚に入つた惡鬼どもは、何百年の間、わが偉大にして愛すべき病人、即ちわが露西亞の國に積り積つた、ありとあらゆる疫病です、黴菌です、不潔物です。ありとあらゆる惡鬼です、惡鬼の子です！ Oui, cette Russie, que j'aimais toujours（さうです、これはわたしの常に愛してゐた露西亞です）。しかし偉大な思想、偉大なる意志は、丁度その憑かれた男と同じやうに、わが露西亞をも高みから照すに相違ない。すると、この惡鬼や惡鬼の子や、上つ皮に膿を持つたあらゆる不潔物ば、すつかり外へ追出されて了つて……豚の中へ入らしてくれと、自分の方から願ふのです。いや、事によつたら、もう入つて了つたかも知れません！それはつまり我々です。我々とそしてあの連中です。ペトルーシャ（ピョートルの愛稱）もさうです。彼に從ふほかの連中もさうです。或ひはわたしなぞその親玉かも知れない。わたし達はみんな惡鬼に憑かれて、狂ひ廻りながら、山坡から海へ飛込んで、溺れ死んで了ふのです。それが我々の運命なのです。我々はそれくらゐの役にしか立たない人間ですからね。しかし病人は癒されて、『イエスの足もとに坐る』でせう。そして、人々は驚きの目をもつて、彼を眺めるに相違ありません……親愛なるものよ、あなたも後で分るでせう。が、今かういふ話は餘りわたしを昂奮させる……

Vous comprendrez après——Nous comprendrons ensemble.（あなたは後でだん〳〵分つて來ます——わたし達も一緒に分つて來るでせう）」

彼はやがて譫ごとを云ふやうになつた。そして、たうとう意識を失つて了つた。かういふ狀態が翌日も續いた。ソフィヤはその傍に坐つて、泣くばかりであつた。彼女はもうこれで三晩寢なかつた。亭主たちに顏を合はすのも、なるべく避けるやうにしてゐた。彼らが到頭なにやら方法を講じ始めたらしいのは、彼女も直覺的に感づいた。三日目になつて、やつと救ひの手が現れた。その朝スチェパン氏はふと正氣づいて、彼女の姿が目に入ると、その方へ手を差し伸べた。彼女は一縷の希望を抱きながら、十字を切つた。彼は窓の外が見たいと言ひ出した。

「おや、湖だ。」と彼は言つた。「あゝどうしたんだらう、わたしは今まであれに氣がつかなかつた……」

この瞬間、車寄せの方で誰かの馬車の轍が轟いた。そして家の中に、一通りならぬ混雜がもちあがつた。

三

それは二人の侍僕にダーリヤを伴れて、四人乘り四頭だての馬車で乘りつけた、當のヴルヴーラ夫人であつた。奇蹟はごく簡單に行はれたのである。好奇心に燃え立つたかのアニーシムは、町へ着くとすぐ翌日、ヴルヴーラ夫人の家へ立寄つた。そして、召使の者を摑まへて、村でスチェパン氏に出會つたこと、百姓たちが街道をたゞ一人かちで行く氏の姿を見受けたこと、ソフィ

ヤと一緒にスパーソフをさして、湖尻へ出立したこと、などを喋つた。一方ヴルヴーラ夫人は恐ろしく心配して、出來るだけ手を盡して、出奔した友を捜してゐたところなので、召使はすぐアニーシムの事を夫人に注進した。彼の物語を聞き終ると（彼がどこの馬の骨とも知れぬ、ソフィヤとかいふ女と一つ馬車に乘つて、湖尻へ出立した條は、殊にくはしく根掘り葉掘りした）、彼女はすぐに支度を整へて、まだ足跡の消えない湖尻へ、自身かけつけたのである。病氣などとは、まだ夢にも知らなかつた。

嚴めしい命令するやうな夫人の聲が響き渡つた。それは主人夫婦さへ慄へ上るやうな勢だつた。スチェパン氏はもうとくにスパーソフに着いてゐる、と確信してゐたので、夫人がこゝに車を留めたのは、たゞ色々な事を聞くだけの目的だつたのである。彼が病氣して、こゝに寢てゐると聞くと、夫人は昂奮のさまで家へ入つた。

「さあ、あの人はどこにゐるんです？　あゝ、お前さんがさうだね！」丁度このとき奥の間の閾の上に現れたソフィヤを見つけると、夫人はいきなりかう叫んだ。「そのいけしやあ〳〵した顔つきで、お前さんだといふ事が分つたよ。出て行け、淫亂もの！　今からこの家の中に、あの女の匂がしても承知しないから！　追ん出してお了ひ。ぐづ〳〵してるとね、お前さん、一生牢の中へぶち込んで了ふよ。暫くこの女をほかの家へ入れて、番をしておいで。あの女は、前にも町の牢に入つてゐたが、もう一ど入れてやるのだ。それから、お前が亭主かい？　お前さんに頼んで置くがね、わたしがこゝにゐる間は、誰ひとり入れても承知しないよ。わたしはスタヴロー

ギナ將軍夫人です。わたしはこの家をすつかり借切ります。ところでね、お前さんは何もかもすつかり白狀するんだよ。」

聞き馴れた夫人の聲音は、スチェパン氏を顚倒さして了つた。彼はがた〳〵慄へ出した。しかし、夫人はもう仕切板の中へ入つて來た。目をぎら〳〵と光らせながら、彼女は足で椅子を引寄せて、ぐつとその上に反り返つた。そして、ダーリヤに怒鳴りつけた。

「暫くあつちへ行つて、亭主の所にでも坐つておいで。何て好奇心の强い子だらう！　そして出たら、戸をしつかりと閉めてお置き。」

やゝ暫く夫人は無言のまゝ、兇猛な目つきで、彼の慴えたやうな顏を見まもつてゐた。

「え、ご機嫌はいかゞでございます、スチェパン樣？　ご遊山はいかゞでございました？」烈しい皮肉が、夫人の脣を押し破つて出て來た。

「あなた、」スチェパン氏は我を忘れて、かう言つた。「わたしは露西亞の實際生活を知りました……わたしは福音を宣傳するつもりです……」

「おゝ、何といふ恥知らずの、下劣な人でせう！」とつぜん夫人は兩手を鳴らしながら、金切聲を上げた。「あなたはわたしの顏に泥を塗つただけで足りないで、あんな女と……おゝ、この老いぼれた、恥知らずの淫亂男！」

「あなた……」

彼はもう聲が切れて、それ以上なにも言ふことが出來ながつた。たゞ恐怖の餘り、目を見張り

ながら、ぢつと相手の顔を見つめるばかりであつた。

「一體あの女は何者です？」

「C'est un ange……C'était plus qu' un ange pour moi（あれは天使です……わたしに取つては天使以上の人でした）あの女は一晩ぢう……あゝ、どうか怒鳴らないで下さい、あの女を脅さないで下さい、あなた、あなた……」

ヴルヴーラ夫人は、不意に椅子をがたゞ〳〵言はせながら、跳上つた。そして、『水を、水を！』といふ夫人の慴えたやうな聲が響き渡つた。彼はすぐ正氣に返つたけれど、夫人は恐怖の餘り、依然としてわな〳〵慄へてゐた。そして、眞蒼な顔をしながら、彼のひん曲つたやうな顔を見つめてゐた。このとき始めて夫人は、彼の病氣が容易ならぬ事を、悟つたのである。

「ダーリヤ。」夫人は出し抜けにダーシャにさゝやいた。「すぐお醫者を迎ひにやつて頂戴、ザリツフィッシュをね。早速エゴールイッチをやつておくれ。馬はこゝで雇つて、町へ行つたら、もう一臺馬車を引張つて來るといゝ。何でも、晩までに歸つて來なきやならないんだからね。」

ダーシャは命を行ふべく飛んで行つた。スチェパン氏は相變らず、慴えたやうに目を見はりながら、ぢつと夫人を見つめてゐた。蒼褪めた脣はわな〳〵慄へてゐた。

「待つて頂戴、スチェパンさん、待つて頂戴ね、いゝでせう！」夫人はまるで子供でもあやすやうに言つた。「ね、待つて頂戴、今にダーリヤが戻つて來たら……あゝ、どうしたらいゝんだらう、おかみさん、おかみさん、まあちよつと、あんたでもいゝから來て頂戴、ねえ！」

夫人はじり〳〵しながら、主婦の方へ馳け出した。

「すぐ、今すぐあの女をもう一ど呼返して。あの女を引戻すんですよう！」

幸ひソフィヤはまだ家を出切らないで、例の袋と風呂敷包を持つて、ちやうど門を出かゝつてゐる所だつた。人々は彼女を呼返した。彼女は極度の驚愕のために、手足さへわな〳〵慄はしてゐた。ヴルヴーラ夫人は、まるで鳶が雛つ子でも摑んだやうに、彼女の手を取つて、遮二無二スチェパン氏の所へ引つ張つて來た。

「さあ、この女をあなたにお返ししますよ。ね、わたしだつてこの女を取つて食やしなかつたでせう？　あなたは本當に、わたしが取つて食つて了つたと、考へてらしつたんでせう？」

スチェパン氏はヴルヴーラ夫人の手を取つて、自分の目へ押し當てると、そのまゝさめ〴〵と泣き出した、病的な調子で、發作でも起つたやうにすゝり上げながら。

「さあ、お落ちつきなさい、お落ちつきなさい。ね、いゝ子だから、ね、スチェパンさん！　ああ、どうしたらいゝのだらう、本當に氣を落ちつけて頂戴よう！」と夫人はやけに叫んだ。「あゝ、あなたはどこまでわたしを苦しめるんです。永久にわたしを苦しめるつもりなんですね！」

「ソフィヤさん。」漸くスチェパン氏はかう呟いた。「あなたお願ひですから、ちよつとあつちへ行つてくれませんか。少し話があるんですから……」

ソフィヤはすぐに大急ぎで座をはづした。

「親愛な人……親愛な人……」と彼は喘ぎ喘ぎいつた。

「まあ、暫く話をしないでらつしやい、スチェパンさん。少し待つて。暫くお休みなさいよ。

さあ、水を上げませう。あら、お待ちなさいと云ふのに！」

夫人は再び椅子に腰を下ろした。スチェパン氏はしつかりその手を握つてゐた。夫人は長いあひだ彼に物を言はせなかつた。彼は夫人の手を脣へ押當てゝ、續けさまに接吻を始めた。夫人はどこか隅の方に目をそらしながら、ぢつと齒を食ひしばつてゐた。

「わたしはあなたを愛してゐた！」といふ聲が、遂に彼の脣を破つて出た。夫人は今まで一度も彼の口から、こんな言葉が發しられたのを聞いた事がなかつた。

「ふむ！」と夫人は返事の代りに、かう呻くやうな聲を出した。

「Je vous aimais toute ma vie……vingt ans !（わたしは一生涯あなたを愛してゐた……二十年間）」

夫人は依然として押默つてゐた——二分、三分。

「ぢや、どうしてダーシャと結婚する氣になりました、香水なんか振り掛けて……」とつぜん夫人は物凄い聲でかう囁いた。スチェパン氏はもうぼつとして了つた。

「新しい頸飾まで締めて……」

またもや二分ばかり沈默が襲うた。

「葉卷煙草をおぼえてますか？」

「あなた、」彼は恐怖の餘り、何やら口の中で言はうとした。

「葉卷をあの晩、窓の傍で喫んでたでせう……月の照つてゐる晩……四阿で別れた後で……そらスクヴレーシニキイで……え、憶えてますか、憶えてますか？」彼の枕の兩隅を摑んで、頭と

一緒にゆすぶりながら、夫人は椅子から飛上つた。「憶えてますか、あゝ、何といふ內容のからつぽな、意久地のない、氣の狹い人だらう！　あなたは永久に、永久に空つぽな人なんです！」夫人はやつとの事で聲を殺しながら、例の獰猛な調子で囁くのであつた。やがてその手を放すと、ぐたりと椅子の上に倒れ、兩手で顏を蔽うた。「澤山だ！」急にきつとなつて、夫人は斷ち切るやうに言つた。「二十年も過ぎて了つた、もう呼返す譯には行きやしない。わたしも馬鹿なんです。」

「わたしはあなたを愛してゐた。」と彼はまた手を合せた。

「まあ、何だつてあんたはわたしにのべつ愛してゐた、愛してゐたつて言ふんでせう！　澤山！」と夫人はまたもや跳り上つた。「あんたもし今すぐ寢て了はなかつたら、わたしはもう……あんたには休息が必要なんです。お眠みなさい、今すぐお眠みなさい、目をつぶつてお了ひなさいよ。あゝ、どうしよう、この人は食事をしたいのかも知れない！　あんた何をおあがりになるの？　この人は何をあがるの？　あゝ、どうしよう、あの女はどこにゐるんだらう？　あの女はどこにゐるの？」

また一しきり混雜が始つた。けれど、スチェパン氏は弱々しい聲で、實際自分はちよつと休んでから、その後でスープとお茶がほしい……要するに自分は實に幸福だと、呟くやうに言つた。彼は横になつた。そして、本當に一寢入したやうに見えた（たぶん眞似だけなのだらう）。ヴルヴーラ夫人は暫くぢつとしてゐたが、やがて爪立で仕切板の外へ出た。

夫人は亭主夫婦の部屋に陣取つて、二人の者を追出した後、ダーシャに向つて、あの女を連れて來るやうに云ひつけた。やがて物々しい訊問が始まつた。

「さあ、お前これから何もかも、すつかり詳しく話してお聞かせ。まあ、傍に坐るがいゝ。さう、さう。で？」

「わたくしがスチェパンさまにお目にかゝつたのは……」

「ちよつとお待ち、ちよつとおやめ。前もつて斷はつて置くがね、もしお前が何か嘘をついたり、隱し立てをしたりすると、わたしは草を分けてもお前を捜し出して、きつとそれだけの事をするから。さあ、それから？」

「わたくしはスチェパンさまと……わたくしがハートヲへ着きますとすぐ……」ソフィヤははあはあ息を切らしてゐた。

「お待ち、ちよつとおやめ、默つておいでといふのに。何をぺちやくちや言ひ出すんだらう。まあ第一に、お前は一たい何者だえ？」

こちらはへどもどしながら（それでも要領よく掻いてつまんで）、例のセヴストーポリを冒頭（まくら）にして、自分の身の上話を始めた。夫人は椅子の上に身をそらせて、いかつい目つきでぢつと穴の明くほど、相手の顏を見つめながら、無言のまゝ聞いてゐた。

「何だつてお前そんなにびく〳〵してるの？　何だつて下の方ばかり見てるの？　わたしはね、わたしをまともに見つめて、議論するやうな人間が好きなんだよ。さあ、續けてお話し。」

彼女は二人の邂逅から聖書の事、スチェパン氏が百姓の女房に火酒（ヴォートカ）を振舞つた事まで、物語つた。

「さう〳〵、どんな些細な事でも忘れないやうに。」とヴルヴーラ夫人はその話振を賞した。遂に物語りは、二人がハートヲを立つた事、スチェパン氏が『もうまるで病人のやうに』喋り續けた事、こゝへ來て自分の一生を抑々の始めから、數時間に亙つて話した事に及んだ。

「その身の上話しも言つてご覽」

ソフィヤは急に言葉につまつて、すつかり窮して了つた。

「その事に就きましては、何一つお話が出來ません。」彼女は殆ど泣き出さないばかりで、かう答へた。「それに、なんにも分らなかつたのでございます。」

「馬鹿をお言ひでない！　何だつて分らない筈はないぢやないか。」

「何ですか、ある一人の髮の黑い貴婦人の事を、長いあひだ話してゐらつしやいました。」ソフィヤは恐ろしく顏を赤くした。尤も、ヴルヴーラ夫人が亞麻色の髮をしてゐる事も、『あの黑髮女（ブリユーネット）』と少しも似た所がないのにも、ちやんと氣が附いたけれど……

「髮の黑い女？　一體なんの事だえ？　まあ、話してご覽！」

「何でもその貴婦人は一生――まる二十年の間、あの方をたいへん戀してゐらしつたさうでございますが、自分が餘り肥えてゐるのを恥しくお思ひになつて、あの方に打明ける勇氣がなかつたかと云ふ……」

「馬鹿な人だ！」ヴルヴーラ夫人は物思はしげな、とは云へきつぱりした調子で、斷ち切るやうにかう言つた。

ソフィヤはもう本當に泣いてゐた。

「わたくしもう何一つ、うまくお話する事が出來ません。だつて、わたくしあの方のお身の上を、一生懸命に心配してゐましたので。それに、あの方はあゝいふ賢い人でゐらつしやいますので、わたくしどうしても合點が參りませんでした。」

「あの人の智惠がどうかうと云ふ事が、お前のやうな間拔に分つて堪るものかね。お前に言ひ寄りはしなかつたかえ？」

ソフィヤはがた〳〵慄え出した。

「お前に惚込みはしなかつたかえ？　眞つすぐに言つておしまひ！　お前に言ひ寄りはしなかつた？」とヴルヴーラ夫人は怒鳴りつけた。

「もう大方その通りと申して、よろしいくらゐでございました。」と彼女は泣き出した。「ですけれど、あの方はご病氣なのでございますから、そんなことは何の意味もない事だと存じました。」きつと目を上げながら、彼女はかう附け足した。

「お前は何と言ふのだえ、名前と父稱（ふしやう）は？」

「ソフィヤ・マトヴェーヴナでございます。」

「なるほど、それでは教へて上げるがね、お前、ソフィヤ・マトヴェーヴナ、あの人は世界中で

一番やくざな、一番からつぽな人間なんだよ……あゝ、どうしたらいゝのだらう！　お前はわたしをやくざな女とお思ひかえ？」

こちらは目をまん丸くした。

「やくざな女だとお思ひかえ？　あの人の一生を臺なしにした暴君だとお思ひかえ？」

「まあ、あなたご自身泣いてゐらつしやるのに、どうしてそんな事がございませう！」

ヴルヴーラ夫人の目には實際なみだが浮かんでゐた。

「まあ、お坐り、お坐りつてば。さうびく〳〵しなくつてもいゝよ。もう一度まともにわたしの目をご覽。何だつて眞赤な顏をするの？　ダーシャこつちへおいで。ちよつとこの女をご覽、お前どうお思ひだえ、この女は心のきれいな人間だらう……」

驚いた事には（多分ソフィヤは一さう無氣味だつたに相違ない）、夫人はとつぜん彼女の頰を優しく叩いた。

「たゞ惜しい事には馬鹿だよ――年甲斐もない馬鹿だよ。いゝよ、ご苦勞さま。わたしお前の面倒を見て上げるよ。これで分つた、そんな事はみんな下らない、ばか〳〵しい話だよ。まあ、當分わたしの傍で暮すがいゝ。家も借りて上げるし、くひ扶持も何も、みんなわたしがして上げる……まあ、後で呼ぶから。」

ソフィヤはびつくりして、自分は先を急ぐから、と言ひかけた。

「お前どこも急いで行く處なんかありやしない。お前の本はみんな買つて上げるから、お前は

こゝに落ちついてるがいゝ。いゝから默つておいで、言譯は一切ぬきにするんです。だつて、もしわたしが來なかつたら、お前だつてやはりあの人を捨てゝ行きやしなかつたらう？」

「どんな事があつても、捨てはしなかつたでせう。」ソフィヤは涙を拭ひながら、靜かなしつかりした聲でかう言つた。

醫師のザルツフィッシュが連れられて來たのは、もうだいぶ夜が更けてからだつた。この人は極めて聲望のある老人で、かなり經驗に富んだ醫師であつた。最近、上官と大それた爭論をした結果、勤務上の位置を失つたが、ヴルヴーラ夫人はその瞬間から、一生懸命に彼を保護するやうになつた。彼は仔細に病人を診察して、いろ〳〵容體を訊ねた後、ヴルヴーラ夫人に向つて、病人の狀態は併發症などのために、『極めて危險』な兆候を示してゐるから、『もつと症狀が進む』ものと、覺悟しなければならぬ由を告げた。もう二十年の間、スチェパン氏の身がらから生じた事で、何にもせよ重大だとか、非常だとかいふやうな事を想像する習慣を、ぜん〳〵失つて了つたヴルヴーラ夫人も、今は心の底まで震撼されたやうな氣がして、顏色さへ急に蒼褪めた。

「もう全く望みがないのでせうか？」

「全然すこしも望みがないといふ事は、あるべき筈がございません。けれども……」

夫人は夜つぴて床に入らないで、夜の明けるのを今か今かと待兼ねた。漸く病人が目を開けて、始めて意識を恢復したとき（尤も、彼は次第に衰へて行つたけれど、意識はしじう失はなかつたので）、夫人は決然たる面もちで彼の傍へ寄つた。

「スチェパンさん、どんな場合に對しても覺悟が必要ですよ。わたしは坊さんを呼びにやりました。あなたは人間の義務を果さなきやなりませんよ……」

彼の不斷の主義を知つてゐたので、夫人は彼の拒絕を恐ろしく氣遣つてゐたのである。彼はびつくりしたやうに夫人を見つめた。

「馬鹿げたこつてす、馬鹿げたこつてす！」もう彼が拒絕しようとしてゐるのだと思つて、夫人は癇高い聲でかう叫んだ。「今は冗談なんか言つてる時ぢやありません。惡ふざけはもう澤山です。」

「しかし……わたしはもうそんなに惡いんでせうか？」

彼は考へ深さうな樣子で承諾した。全體として、彼は少しも死を恐れる風がなかつたとの事である。わたしは後でこの話をヴルヴーラ夫人から聞いて、すつかり驚いてしまつた。事によつたら、彼は自分が重態だといふ事を信じないで、やはりいつまでも、ちよつとした詰らぬ患らひのやうに思つてゐたのかも知れない。

彼は懺悔もすれば、聖餐をも悅んで受けた。一同は――ソフィヤや召使までが、彼の所へやつて來て、神祕の啓示を祝ふのであつた。彼のげつそり落込んで衰へ果てた顏や、蒼褪めてびくりびくりと慄ふ脣を見て、人々はみんな言合はせたやうに、忍びやかに泣き出した。

「ねえ皆さん（ウイメーザミー）、あなた方がそんなに……あはてゝゐらつしやるのが、何だか不思議に思はれますよ。もしかしたら、明日にも床上げして、みんなで……出發するかも知れないんですよ……か

ういふ儀式はみんな……いや、勿論わたしもかういふものに對して、相當の敬意を拂つてはゐます……しかし」

「長老さま、お願でございますから、どうか病人の傍にゐてやつて下さいまし。」もう法衣を脫いで了つた僧侶を、ヴルヴーラ夫人は急いで押止めた。「皆にお茶が廻りましたら、すぐ信仰のお話を始めて下さいまし。それはあの人の信仰を繫ぐのに、ぜひ必要なのですから。」

僧侶は說敎を始めた。人々は病人の寢床の周りに、或ひは坐り、或ひは立つてゐた。

「今の罪深い時世に於きましては、」と僧侶は茶碗を手にしたまゝ、滑らかな調子で語り出した。「全能のおん神に對する信仰のみが、正しき者に約束せられた永遠の幸福の希望の中にあつても、またこの生のありとあらゆる悲しみと試煉の中にあつても、人間に取つて唯一の避難所なのでございます……」

スチェパン氏は頓に生き返つたやうであつた。微妙な薄笑ひがその唇を辷つた。

「Mon père, je vous remercie, et vous etes bien bon, mais(長老さま、有難うございます、あなたは實にいゝ人です、しかし……)」

「しかしなんて、まるで要らない事です、しかしなんて云ふ事は、少しもありません!」思はず椅子から腰を浮かしながら、ヴルヴーラ夫人はかう叫んだ。「長老さま、」と夫人は僧侶の方へ向いた。「この人は、この人はこんな人間なんでございます……この人はいつもかうなんでございます……この人は一時間も經つたら、もう一ど懺悔をし直さなければなりません!　本當にこの人はさういふ人間なのです!」

スチェパン氏はつゝましやかにほゝ笑んだ。

「わが友よ、」と彼は言ひ出した。「神は永久に愛し得る唯一の存在だ、といふだけの理由でも、わたしに取つてなくて叶はぬものです……」

果して彼は本當に信仰を得たのか、または壯嚴な神祕啓示の儀式が、彼の藝術家的感受性を震撼し刺戟したのか、その邊の消息は分らないが、とにかく彼はしつかりした調子で、非常な感動を籠めながら、以前の主張と全く相反する言葉を發したのである。

「神は不正をなす事を欲しない、一度わたしの胸に燃え立つた神に對する愛を、ぜん／＼消して了ふやうな事を欲しない。既にそれだけの理由でも、わたしの不死は必要なのです。あゝ、果して愛より優れたものがあるでせうか?　愛は生存より優れたものです、愛は生存の榮冠です。して見れば、生存が愛の前に跪伏しない、といふやうな事があり得るでせうか?　もしわたしが神を愛し、かつ自分の愛に悅びを感じたら、神がわたしといふ人間も、またわたしの愛をも消滅さして、無に歸せしめるといふやうな事が、あり得るでせうか?　もし神があるなら、わたしはもう不死なのです!　これがわたしの信仰宣言です。

「神はありますよ、スチェパン樣、わたしが請合つて置きます、本當にあるんですよ。」とヴルヴーラ夫人は祈らんばかりだつた。「せめて一生に一度ぐらゐ、あんなばか／＼しい考へを棄てゝお了ひなさい。否定してお了ひなさい!」(夫人は彼の信仰宣言が十分に分らなかつたらしい。)

「あなた、」と彼は次第に活氣づいて來た。尤も、聲は始終とぎれ勝であつたが。「あなた、わたしはあの左の頰を向けよといふ意味を悟つたとき、わたしは……すぐにまたほかのある物を悟りました。わたしは一生嘘をついて來た、まる一生涯の間！　しかし、わたしは出來る事なら……明日……明日はみんなで出發しませう。」

ヴルヴーラ夫人は泣き出した。彼は誰やら捜すやうな目つきをした。

「あゝ、こゝにゐます。あの女はこゝにゐますよ！」と夫人はソフィヤの手を取つて、彼の傍へ引つ張つて來た。彼は感に迫つたやうにほゝ笑んだ。

「あゝ、わたしは出來る事なら、もう一ど生活がして見たい。」彼は異常な精力の潮來を感じながら、かう叫んだ。「この世に於ける一分一秒と雖も、すべて人間に取つて法悦でなくてはならぬ……さうです、是非さうなくてはならないです！　さういふ風にするのが、人間の義務です。それは法則です、隱れてはゐるけれど、嚴として存在してゐる法則です……おゝ、わたしはペトルーシャや……ほかの仲間の連中が見たい……そしてシャートフも！」

ついでに斷はつて置くが、シャートフの事はダーリヤもヴルヴーラ夫人も、一番あとから町を出たザルツフィッシュさへ、まだ少しも知らないでゐたのである。

スチェパン氏は次第に病的になつて、彼の力に堪へられないほど昂奮して來た。

「どこかこの宇宙に、自分よりも遙かに正しく、かつ幸福な何物かが存在してゐるといふ事を、絶えず考へて見るだけでも、わたしの心は限りなき歡喜と――そして光榮に充たされる。あゝ、

わたしがどんな人間であらうと、わたしがどんな事をしようと、そんな事はもう問題ぢやない！　人間は自分一個の幸福よりも、どこかに完成された靜かな幸福が、萬人萬物のため存在する、とかう自覺する方が遙かに必要なのです……人類存在の法則は、悉く一點に集中されてゐます。ほかではない、人間にとつては、常に何か無限に偉大なものの前に跪く事が、必要なのです。人間から無限に偉大なものを奪つたなら、彼らは生きて行く事が出來ないで、絶望の中に死んで了ふに相違ない。無限にして永久なるものは、人間に取つて、彼らが現に棲息してゐるこの微小な一箇の遊星と同樣に、必要かくべからざるものなのです……皆さん、偉大なる思想の萬歳を唱へようぢやありませんか！　永久にして無限な思想！　どんな人間でも、人はすべて偉大な思想の表はれに跪く事が必要なのです。極めて愚昧な人間でさへ、何か偉大なものを必要とします。ペトルーシャ……あゝ、わたしはあの連中にもう一ど會つて見たい。彼らは自分たちの中にも、やはり、この永遠な思想が藏されてゐる事を、知らないのだ、全然しらないのだ！」

醫師のザルツフィッシュは、儀式の席に居合はさなかつたが、とつぜん外から入つて來ると、思はず慄然とした。そして、病人を昂奮させてはいけないと言つて、一座の者を追ひ散らして了つた。

スチェパン氏はそれから三日たつて瞑目したが、その時はもうすつかり意識を失つてゐた。彼は燃盡きた蠟燭のやうに、靜かに消えて行つた。ヴルヴーラ夫人はその場で葬送の式を濟ますと、不幸なる友の亡骸を、スクヴレーシニキイへ伴つて歸つた。墓は教會の墓地に設けられて、大理

石の板で蔽はれた。碑銘と格子とは、春まで延期する事になつた。

ヴルヴーラ夫人が町を離れてゐたのは、八日間であつた。夫人と一緒に馬車を並べて、ソフィヤも町へやつて來た。たぶん永久に、夫人のもとへ落ちつく事になるのだらう。たゞちよつと斷はつて置くが、スチェパン氏が意識を失ふと同時に、(それはあの朝の出來事だつた)、ヴルヴーラ夫人はすぐにまたソフィヤを遠ざけて、今度はまるきり家の外へ追出して了つた。そして、最後まで一人で病人の看護をしたが、スチェパン氏が息を引取ると同時に、さつそく彼女を呼寄せたのである。永久にスクヴレーシニキイへ越して來いといふ勸め(といふより寧ろ命令)を聞いて、彼女は恐ろしくびつくりして、言葉を返さうとしたが、夫人はそんな事に耳を借さうともしなかつた。

「何もかも馬鹿げてゐる! わたしは自分でお前さんと一緒に、聖書でも賣つて歩くつもりだ。もう今わたしはこの世に、誰一人もつてゐないんだからね。」

「けれど、あなたにはご子息がおありになるぢやありませんか。」とザルツフィッシュが口を出した。

「わたしには息子もありません!」とヴルヴーラ夫人は斷ち切るやうにかう言つた——しかも、これが豫言になつたかのやうであつた。

第八章　終末

かうしたすべての亂脈と犯罪とは、異常な速度をもつて——ピョートルが豫想したよりも遙かに迅速に、暴露されたのである。まづ事の始りは、かの不幸なるマリイが夫の殺害された夜、明方ちかく目を醒して、手を延して見たが、夫が傍にゐないのに氣がついて、ゐても立つてもをられないやうに騷ぎ出した。そのとき彼女のそばには、アリーナの雇つた手傳女が泊つてゐたが、どんなにしても產婦の氣を鎭める事が出來ないので、夜の明けるのを待ちかねて、アリーナの所へ馳けつけた。產婦には、アリーナが夫の居所も知つてゐれば、その歸宅の刻限も承知してゐる、といふ風に納得さしたのである。一方、アリーナも、その時ある程度まで不安を感じてゐた。彼女はもう夫の口から、その夜スクヴレーシニキイで行なはれた出來事を、聞いてゐたのである。彼はその夜、十時過ぎに家へ歸つて來たが、身心ともに恐ろしい狀態に陷つてゐた。彼は兩手を揉みしだきながら、寢臺の上へ突伏しに身を投げて、引つ吊るやうなすゝりなきに、全身を慄はせ慄はせ、しつきりなしに繰返すのであつた。

『それは違ふ、それは違ふ。まるつきり違ふ!』

勿論とゞのつまり、飽くまで附き纏つて離れない妻のアリーナに、何もかもすつから打明けて了つた——尤も、それは家ぢうで彼女ひとりだつた。彼女はいと嚴かに夫に向つて、『もしめそつ

きたいのなら、人に聞かれないやうに、枕に顏を埋めてお泣きなさい。あす何か妙な素振なんか見せたら、それこそあんたは本當に馬鹿ですよ。』と諭した後、夫を床に就かせて、出て行つた。彼女はそれでもちよつと考込んだが、やがて、すぐ萬一の用心に、片づけをはじめた。餘計な書類や、本や、檄文のやうなものまで、すつかり隱すか燒くかして了つた。こんな事をした後で、自分にしろ、姉にしろ、叔母にしろ、また義妹の女學生にしろ、進んでは耳の長い兄のシガーレフにしろ、何も大して恐れるには當らない、と考へついた。翌朝、手傳女が迎へに馳けつけたとき、彼女は躊躇する事なしに、マリイのところへ出かけた。實は、ゆうべ夫がまるで譫ごとのやうな、物狂ほしい、慴え上がつた調子で囁いて聞かせたピョートルの目算——一同を保護するためにキリーロフを利用しようといふ目算が、本當かどうかを、少しも早く突留めたかつたのである。

けれど、彼女がマリイの所へ來た時は、もう遲かつた。マリイは手傳女を使に出して、一人きりになると、もう我慢が出來なくなつて床から起上り、手當り任せの著物を引つ掛けて（それは季節に不似合な、恐ろしく薄いものらしかつた）、離れにゐるキリーロフの所へ出かけた。多分この人なら、誰よりも一ばん正確に、夫の事を知らせてくれるだらう、と考へたに相違ない。けれど、離れで目擊した光景が、產婦にどういふ影響を與へたか、想像するに難くない。こゝに注意すべきは、卓の上の目に立つ場所に置いてあつたキリーロフの遺書を、彼女が讀まなかつたといふことである。勿論、驚愕の餘りまるで見落して了つたのだ。彼女は自分の部屋へ馳け戻ると、

赤ん坊を引つかゝへて、そのまゝ往來へ馳け出した。それは濕つぽい朝で、霧が立罩めてゐた。この淋しい通りには、行會ふ往來の人とてもなかつた。彼女は、冷たいぐぢゃ〳〵した泥濘の中を、息を切らしながら、ひた走りに走つた。やがて、彼女はよその戸をどんどん叩き始めた。一軒の家では、まるで開けようとしなかつたし、いま一軒の家では、開けるのに長いこと手間取つた。彼女は待切れなくつて、それを打つちやつて、今度は三軒目の家を叩き始めた。それはチートフといふ商人の家だつた。こゝで彼女は恐ろしい混雜を引起した。癇高い叫び聲を上げながら、前後の聯絡もなく、『夫が殺された』と繰返すのであつた。チートフの所でも、シャートフとその經歷を幾らか承知してゐた。當人の言葉によつて見ると、產をしてからやつと一晝夜にしかならないのに、ろく〳〵著物も著せてない赤ん坊を抱いて、こんな寒さの中をこんな服裝で、町なかを馳け廻つてゐるといふ事實は、人々をぞつとさせた。始めの中は、熱に浮かされてるのではないかと思つた。しかも一たい誰が殺されたのか——キリーロフかシャートフか？　この點がどうしても判然しないので、なほさら夢のやうに感じられた。

人が自分の言葉を信じてくれないのに氣づいて、彼女はまたもや先へ馳け出さうとしたが、人人は無理やりに引留めた。噂によると、このとき彼女は恐ろしい聲で叫びながら、もがいたとの事である。人々はフィリッポフの持家へ赴いた。やがて二時間の後、キリーロフの自殺とその遺書とは、町ぢうに知れ渡つた。警官は、その時まだ正氣でゐた產婦の取調べにかゝつた。この際、彼女がキリーロフの遺書を讀んでゐないと分つたので、どうして夫が殺されたと決めて了つたの

か、どうしても突きとめることが出來なかつた。彼女はたゞこんな事を叫ぶのみであつた。

『あの人が殺された以上、うちの人も殺されたに相違ありません。二人はいつも一緒にゐたのです！』

午ごろ彼女は前後不覺に陷つた。そして、遂に正氣に復する事なしに、三日ばかり經つて死んで了つた。風邪を引込んだ赤ん坊は、それより先に亡くなつたのである。

アリーナは、マリイも赤ん坊も部屋に居ないのを見て、形勢面白からずと察して、わが家へ逃げて歸らうとしたが、門口のところで立止り、手傳の女に向つて、『離れへ行つて、且那樣に聞いてご覽、マリヤさんはそちらにいらつしやいませんか、そしてあの方の事を何かご存じありませんかつてね。』と云ひつけた。やがて、手傳の女は往來一杯に響くやうな、狂暴な聲を立てながら歸つて來た。アリーナは『疑ひがかゝるから』といふ便利な論法で、大きな聲をしないやうに、誰にも知らさないやうに、手傳の女に言含め、そのまゝ門外へ辷り出て了つた。

彼女がその朝さつそくマリイの產婆として、警察から呼び出されたのは、勿論である。けれど、餘り多く引出す事は出來なかつた。彼女は、シャートフの所で見聞きした事を、落ちつき拂つた事務的な調子で、細大もらさず物語つたが、事件その物に就いては、何も知らない、何も分らない、と言張つた。

市中に持上つた騷ぎは、想像するに難くない。また新しい『事件』が出來したのだ、またしても人殺しが行はれたのだ！　しかし、今度はもう全く事情が違つて來た。つまり暗殺者や放火者

や、さういふ革命黨の謀反人の祕密結社が存在してゐる、といふ事が明らかになつたのである。恐ろしいリーザの最期、スタヴローギンの妻の殺害、當のスタヴローギン、放火、婦人家庭教師救濟の舞踏會、ユリヤ夫人を中心とする放縱な一團……そればかりでなく、スチェパン氏の行方不明といふ事件の中にも、必ず何かの謎が隱されてゐるに違ひない、とかう信じてゐた。ニコライ・スタヴローギンの事も、人々は頻りにひそ〳〵噂した。その日の暮方になつて、ピョートルの出發が市中へ知れ渡つたけれど、不思議にも、彼の事は餘り噂に上らなかつた。その日、何よりも人々の話題に上つたのは、『元老院議員』のことだつた。フィリッポフの持家の前には、殆ど朝ぢう人が黑山のやうに集つてゐた。

實際、警察はキリーロフの遺書のために、迷宮へ導かれて了つたのである。すべての人は、キリーロフのシャートフ殺害をも、『下手人』の自殺をも、信じ切つてゐた。尤も、警察は途方に暮れたとは言ひ條、ぜん〳〵手も足も出ないほどではなかつた。キリーロフの遺書に漠然と挿入されてゐる『公園』といふ言葉は、ピョートルの期待したほど、その筋の人を迷はせはしなかつた。警察はすぐスクヴレーシニキイへ飛んで行つた。單にそこに公園があつて、ほかには市中のどこにもないから、といふ理由のみでなく、ある一種の直覺に導かれたのである。最近この町で起つた樣々な戰慄すべき出來事は、直接間接スクヴレーシニキイに關係してゐるからであつた。少くも、わたしはかう想像してゐる（斷はつて置くが、ヴルヴーラ夫人は朝早くなんにも知らないで、スチェパン氏を取抑へに出かけたので。）

死體はその日の夕方、ちよつとした證跡を賴りに、池の中から發見した。それは下手人どもがうつかり置き忘れたシャートフの帽子が、犯罪の場所で見つけられたからである。死屍を一見した印象と云ひ、檢屍の結果と云ひ、二三の推論の示す處と云ひ、どうしてもキリーロフには共犯者があつたに相違ない、といふ疑がまづ第一に生じた。續いて檄文に關係のある、シャートフ、キリーロフの加つてゐる祕密結社の存在も、同じく明らかとなつた。が、その會員はどういふ連中なのだらう？『仲間』の事など、その日はまだ夢にも考へるものがなかつた。たゞキリーロフが世捨人のやうな暮しをしてゐたので、遺書にも書いてある通り、あれほど手を盡して搜索したフェーヂカが、幾日も一緒にゐたにも拘らず、一向に知れなかつたのだといふ事は、警察の方へも分つたのである。しかし、この混沌たる事件の中から、何ひとつ一般的な、連絡を明かにするやうな事實を、掴み出す事が出來ないので、それが何よりも一同を惱ました。もしリャームシンのお蔭で、翌日とつぜん一切が暴露されなかつたら、殆ど恐惶狀態に陷るほど威嚇された町の人人が、どんな途方もない結論に到著するか、まるで想像も附かなかつたに相違ない。

リャームシンは、遂に持ちこたへる事が出來なかつた。そして、最近ピョートルでさへ心配し始めた事が、事實となつて彼の身に現れたのである。初めトルカチェンコに、續いてエルケリに監督される事となつた彼は、翌日いちんち床の中に臥つてゐた。見受けたところ至極おとなしく、壁の方へ顏をそむけたまゝ、ほかから話し掛けられても返事もせず、殆ど一ことも物を言はない。かういふ譯で、彼は市中に起つた事を、一ん日少しも知らないで過した。ところが、一切の出來

事を嗅ぎつけたトルカチェンコは、夕方になつて、ピョートルから授けられたリャームシン監視の任をおつ拋り出し、町から郡部へ去らうといふ氣を起した。つまり、なんの事はない、逃げ出したのである。エルケリが、みんな血迷つて了つたと豫言したのは、實際だつたのである。ついでに言つて置くが、リプーチンもその日まだ午まへに、やはり町から姿を消した。けれど、この方はどういふものか、やつと翌日の夕方になつて、主人の家出にびつくりして、恐怖の餘り固く沈默を守つてゐる家族の訊問にかゝつたとき、始めて警察の方へ知れたのである。

が、リャームシンの方を續けよう。彼は一人きりになるや否や（エルケリはトルカチェンコを當てにして、一足さきに家へ歸つたので）、すぐに家を飛び出して了つた。そして、勿論幾らもたたぬ中に事件の成行きを知つたのである。彼は家へも寄らないで、そのまゝ足の向いた方へ駈け出した。けれどあたりは全く眞の闇で、しかも彼の計畫は餘りにも恐ろしく、困難な事であつたので、彼は街を二つか三つ通り拔けると、すぐ〳〵わが家へ引返して、夜つぴて自分の部屋へ閉籠つてゐた。けれど、翌日の午ころまで閉籠つた後——とつぜん警察へ馳けつけたのである。人の噂に依ると、彼は膝を突いて床の上を這廻つたり、泣いたり喚いたり、床を接吻したりしながら、自分などは前に立つてゐる高官たちの、靴を接吻する値うちもない人間だと、叫んだとの事である。人々は彼を宥めすかして、色々やさしく劬つた。訊問は長いあひだ續いた。何でも三時間ぐらゐかゝつたとの事である。彼はすつかり何もかも白狀した。事件を底の底まで打開けて、ありとあらゆる事實を微細な點まで物語つた。先の方へ飛んで行つたり、何もかも白狀して了は

うと焦慮つて、聞かれもしないのに、要らぬ事まで喋つたりした。

聞いて見ると、彼はかなり澤山いろんな事を知つてゐた。そして、かなり巧みに事件の眞相を展開して見せた。シャートフとキリーロフの悲劇、火事、レビャードキン兄妹の死などは、第二義的の位置に追ひやられて了つて、ピョートル、祕密結社、革命運動の組織、五人組の網目、かういふものが前面へ現れ出たのである。一體なんのために、あんな數へ切れないほどの殺人や、醜惡卑劣を極めた事件を行なつたか？　といふ問に對して、彼は熱したせか〳〵した調子で、かう答へた。『それは、組織的に社會の根柢を震撼さすためです。社會組織を始めとして、あらゆるものの基礎を、系統的に腐敗させるためです。すべての人の荒膽を挫いで、一切を混亂狀態に化して了ふためです。かうして、根柢を搖がされた社會が、酸化し病的になつて、廉恥心を失ひ信仰を奪はれながら、何かしら指導的思想や自己防衛の手段を、無限の欲望をもつて求めてゐる隙に乘じて、不意に叛旗を飜し、一擧にしてわが掌中に納めて了ふのです。この際、力となるものは、全國に網を張つてゐる五人組です。彼らはその間に絶えず行動して、同志を增やし、すべて乘じ得る隙のある社會の弱點病所を、實際的に探究してゐるのです。』

結論として彼はかう言つた。この町でピョートルは、かういふ風な系統的な攪亂の、ほんの最初の試みを行なつたので、これが將來すべての五人組の行動の筋書となるべきものだ。しかしこれは彼自身、卽ちリャームシンの考へで、彼一個の想像に過ぎない。『ですから、どうか是非ともこの事をご記憶くだすつてお含みの上、わたくしがどれくらゐ明ら樣に潔く、何もかも打ち明

けたかを、お察し願ひます。かういふ譯ですから、この後とても、隨分お政府のお役に立つかも知れないので。』　五人組は澤山あるか、といふ眞正面からの問に對して、殆ど數へ切れぬくらゐ澤山ある、露西亞全國かうした五人組の網目で蔽はれてゐる、と彼は答へた。彼は別に證據を提出しなかつたけれど、徹頭徹尾、眞劍に答へたものと想像する。彼が提出したのは、外國で印刷した會の筋書と、ほんの下書ではあるけれど、ピョートルが自分の手で認めた將來の行動計畫書と、たゞそれだけであつた。これで見ると、リャームシンのいはゆる『社會の基礎震撼』うんぬんは、一字一句たがはず、この紙きれの中から引いて來たのであつた。讀點や句點まで忘れてゐなかつた。尤も彼は、みんな自分自身の想像だと、主張してはゐるけれど……

ユリヤ夫人の事となると、彼は驚くほどあはてゝ、聞かれもしないのに、先つ走りをしながら、『あの女に罪はないのです、あの女は目を昏まされて了つたのです。』　と述べた。しかし、こゝに注意すべきは、彼がニコライ・スタヴローギンを除外して了つて、祕密結社に何の關係もない、ピョートルと何の協定も結んでゐない、と斷定した事である（ピョートルがスタヴローギンに對して抱いてゐた滑稽きはまる、命がけの希望に就いては、リャームシンも何一つ知らなかつたのである）。　レビャードキン兄妹の死は、彼の言葉に依ると、ニコライには何の關係もなく、たゞ一人で企らんだことで、ニコライを犯罪の卷添へにして、自分の自由にしようといふ目的だつたのである。しかし、ピョートルが輕卒にも深く期待してゐた感謝の代りに、彼はたゞ非常な憤懣と絶望の情を、『高潔なニコライ』の心に呼醒したに過ぎなかつた。

スタヴローギンに關する結論も、彼はやはり聞かれもしないのに、恐ろしく急き込んで發表した。ほかでもない、スタヴローギンは非常に重要な職務を帶びた人だが、それには一種の祕密が含まれてゐて、この町へ逗留してゐたのも、いはゞ微行で、特別な任務を持つて來たのである。或ひはまた近い中に、彼得堡(ペテルブルグ)からやつて來るかも知れないが（リャームシンは、彼がいま彼得堡にゐる事と信じ切つてゐた）、今度はまるで樣子も違へば、事情も異つて、町の人が聞いたらびつくりするやうな人達を、伴に連れて來るだらう。かういふ話はすべて『ニコライの祕密の敵』たるピョートルから聞いたのだ、――といふやうな事を、リャームシンはわざ〳〵仄めかさうとする風であつた。

こゝでちよつと注意書(クヽベネ)をして置くが、三箇月たつてリャームシンの白狀した所に依ると、彼はスタヴローギンの保護を目當に、わざと彼を辯護したとの事である。たぶん彼得堡で運動して、刑二等くらゐ減じてくれた上、流刑の際にも、金や紹介狀を惠んでくれるだらうと、賴みにしてゐたのである。この自白に依つて見ても、實際かれがスタヴローギンに就いて、並はづれて誇大な考へを抱(いだ)いてゐた事が察しられる。

勿論その日の中にすぐ、ギルギンスキイも逮捕された。しかも勢に任せて、家内ぢう拘引したのである（尤も、今はアリーナと、その姉と、叔母と、おまけに例の女學生までが、青天白日の身となつてゐる。噂に依るとシガーレフも、刑法のどの條文にも當篏らないために、近々放免されるに相違ないとのことである。尤も、これも今のところ噂だけである）。ギルギンスキイはす

ぐさま何もかも肯定して了つた。彼は就縛するとき發熱して、病の床に臥(ふせ)つてゐたが、かへつて非常に嬉しさうな樣子で、『あゝこれでやつと胸が輕くなつた。』と言つたとの事である。彼に就いては、かういふ噂もある。彼はいま何事も明ら樣に申立ててゐるが、常に一種の威嚴を持して、自分の『輝かしい希望』を一つとして捨てようとしない。それと同時に、積り積つた事情の渦に卷込まれて、輕卒にもうか〳〵と、社會的手段と正反對な政治的進路に踏込んだのを、心から咀つてゐるの事である。殺人遂行の際に於ける彼の振舞は、いくぶん彼のために有利な解釋を施されるらしい。で、彼もやはり自分の運命に就て、ある程度までの輕減を囑望し得る譯である。少くも、町の人はかう斷言してゐる。

しかし、エルケリの運命に到つては、殆ど輕減の望みがないと言つていゝくらゐである。この男は逮捕されたそも〳〵の瞬間から沈默を守つて、たまに口を開けば、出來るだけ事實を曲げようとした。裁判官は今日に至るまで一言も彼の口から、後悔の言葉を絞り出す事が出來なかつた。それにも拘はらず、彼は最も嚴酷な裁判官にさへも、一種の同情を呼び起さずにゐなかつた――それは年の若い事や、境遇の賴りない事や、一見して政治的煽動者の狂信者的(フヤナチック)な犧牲に過ぎないと、思はれる事も原因であつたが、何よりも一番、母に對する孝養が知れ渡つたためである。彼は今まで僅かな俸給の殆ど半ばを、母に仕送つてゐたのである。母親は今この町にゐる。彼女は弱い病身な婦人で、年の劃に恐ろしく老込んでゐる。彼女は泣きながら、息子の命乞ひに、形容ではなく本當に、人々の足もとへ身を投げ出してゐるのであつた。どうなるにもせよ、町でも多

くの人はエルケリを憐んでゐる。

リプーチンは彼得堡で、二週間も滞在してゐる中に捕縛された。彼は説明するのも難かしいくらゐ、奇妙な事を仕出かしたのである。人の話によると、彼は他人名義の旅券を持つてゐたので、巧く外國へ辷り抜ける事も出來た筈なのである。おまけにかなり纒つた金も身に附けてゐた。それだのに、彼は彼得堡でぐづ〳〵して、どこへも出かけなかつた。暫くの間、スタヴローギンとピョートルを捜してゐたが、とつぜん飲酒に耽り出した。そして、まるで常識を失つて了つて、自分の境遇に對する理解をなくした人のやうに、途轍もない耽溺を始めたのである。彼は彼得堡のとある妓樓で、醉拂つてゐる所を捕縛された。噂に依ると、彼は少しも意氣沮喪しないで、申立の際にもとかく嘘をつきたがり、目前に控へてゐる公判に對しても、相當の希望（？）を抱きながら、堂々とその日を迎へようと意氣組んでゐるとの事である。法廷で一喋りするづもりでゐるのだ。

トルカチェンコは逃亡後十日ばかり經つて、どこか郡部の方で逮捕されたが、その振舞は比較にならぬほど慇懃で、嘘もつかなければ胡麻化しもせず、知つてる限りの事をすつかり白狀して、敢て辯解がましい事を言はず、おとなしく罪に服してゐるが、しかし同樣に駄辯を弄したがる傾向がある。彼は自分から進んで、いろんな事を話すばかりでなく、談一たび民衆とその革命的分子に關する知識に及ぶや、すぐに妙な姿勢（ポース）を取つて、聽手を感嘆させようと焦慮（あせ）るのであつた。聞及ぶところでは、彼もやはり法廷で何か喋るつもりださうである。總體に彼とリャームシンと

は、餘りびく〳〵してゐる樣子がない。それは寧ろ不思議なくらゐだつた。

繰返していふが、この事件は全都かたが附いた譯ではない。もう三箇月も經つた今となつては、この町の社會も一息ついて身繕した形で、だいぶ餘裕が出來て來たので、自分自身の意見も持つやうになつた。甚しきに至つては、當のピョートルを目（もく）して、天才呼ばはりするものさへある。少くも、『天才的な能力を持つた男』と評してゐる。『あの組織はどうです！』と倶樂部などで指を上の方へ向けながら、こんな事を言合つてゐる。尤も、そんな事はごく罪のない話で、而も少數の人しか口にしない。多數の者は、彼の鋭い才能を否定しないけれど、現實に對する恐ろしい無知、恐ろしい抽象癖、一方に偏した不具的な鈍い發達のために、非常な輕佻に陷つたものと評してゐる。彼の精神的方面では、衆説が悉く一致してゐる。そこにはもう議論の要がない。

さて、萬（はん）遺漏なきを期するためには、このうへ誰の事を言つたらいゝのか、わたしには全く分らない。マヴリーギイはどこかへ行つて了つた。ドロズドヴ老夫人は、すつかり赤ん坊のやうになつて了つた……ところで、もう一つ思ひ切り陰慘な出來事が語り殘されてゐるが、たゞ事實を傳へるだけに止めて置かう。

ヴルヴーラ夫人は旅行から歸ると、町の方の家へ落ちついた。と、留守の中に積り積つたさまざまな報知が、一時に夫人を襲うて、烈しくその全幅を震撼した。彼女は一人で居間に閉籠つて了つた。それはもう夜の事だつたので、人々は疲れて、早く床に就いた。

翌朝、小間使がさも祕密らしい樣子をしながら、ダーリヤに一通の手紙を渡した。彼女の言葉

に依ると、この手紙はもう前日とゞいてゐたのだが、夜おそくみんな休んで後の事だつたので、彼女は遠慮して起さなかつたとの事である。それは郵便ではなくて、一人の見知らぬ男が、スクヴレーシニキイなるエゴールイッチの所へ持つて來たので、エゴールイッチは昨日の晩、すぐさま自分でやつて來て、小間使へ手渡しすると、そのまゝすぐにスクヴレーシニキイへ歸つて行つた、といふ事である。

ダーリヤは胸をときめかせながら、長い間その手紙を見つめてゐた。思切つて封が切れなかつたのである。彼女は、誰から來たものか、よく承知してゐた。それはニコライの手紙だつた。彼女は封筒の名宛を讀んだ。『アレクセイ・エゴールイッチへ、祕密にダーリヤ・パーヴロヴナにお手渡しありたし』

この手紙は、立派に歐羅巴風の教育を受けながら、露西亞語の讀み書きを十分に習得しなかつた、露西亞貴族の子弟の文體に特有の誤謬を、些細の點までも朱を入れないで、そのまゝ一字一句たがはず再錄したものである。

『愛するダーリヤ・パーヴロヴナ。

『あなたは嘗てわたしの「看護婦」を志望された。そして、必要の際には迎へを寄越すやうにと、言質を取つた事がある。わたしは二日後に出發する。もうこゝへは歸らない。わたしと一緒に行きませんか？

『去年わたしはヘルツェンと同樣に、瑞西ウリイ州の市民に歸化して置いた。それを知るものは

誰もない。そこでわたしはもう小さな家を買つた。わたしにはまだ一萬二千留ある。わたしと一緒に出かけて、そこで一生暮さうではありませんか。わたしはもう決してどこへも出ようと思はない。

『それは非常に淋しい場所だ。山の峽なのだ。山が視野と思想を阻んでゐる。恐ろしく陰氣なところだ。それは小さな家が賣物に出たからだ。もしあなたの氣に入らなかつたら、わたしはそれを賣つて、また別な場所に別なのを買つてもいゝ。

『わたしは健康を害してゐる。しかし、幻覺は向ふの空氣で癒るだらうと思ふ。それは肉體の方だが、精神の方はあなたもすつかり知つてゐる。但し、全部ではないかも知れない。

『わたしは自分の生涯について、隨分いろ〳〵とあなたに話して聞かせた。しかし、全部ではない。あなたにさへも全部は話さなかつたのだ！　ついでに言つて置くが、わたしは妻の死について、良心上の責任があるのだ。わたしはあの後あなたに會はないから、それでちよつと確めて置く。リザヱータさんに對しても罪がある。しかし、この方はあなた自身よくご承知だ。あなたは殆どすつかり豫言したのです。

『あなたはやつて來ない方がいゝでせう。わたしが爲なのだ。それに、あなたはわたしなどと一しよに、自分の一生を葬る必要は、少しもないのです。わたしはあなたが愛しい。氣のふさぐ時、あなたの傍にゐると樂だつた。あなたにだけは、自分の事を口に出して言ふことが出來た。しかし、そんな事は何の理由にもならない。あなたは

自分を「看護婦」に決めて了つた（これはあなたの言つた事なんです）。一たい何のためにそんな莫大な犧牲を拂ふのです？　またかういふ事も合點して頂きたい――わたしはあなたを招く以上、あなたを憐んでゐないのだ。またあなたの承諾を期待する以上、あなたを尊敬してゐない譯だ。それにも拘らず、わたしは招きかつ期待する。いづれにもせよ、あなたの返事だけはぜひ必要だ、なぜと言つて、非常に出發を急ぐから。さういふ風になれば、わたしは一人で出發する。

『わたしはウリイの生活から何一つ當てにしてゐない。わたしはたゞ行つて見るのだ。わたしは何もわざと陰氣くさい場所を選つたわけではない。露西亞ではわたしは何物にも束縛されてゐない。こゝではほかのすべての場所と同じく、あらゆるものがわたしに取つては他人なのだ。尤も露西亞で暮すのは、ほかのどこよりも一番きらひだつたけれど。しかし、その露西亞に於てすらわたしは何物をも憎む事が出來なかつた！

『わたしは到る處で自分の力をためした。それは、あなたが「自分自身を知る」やうにと言つて、わたしにさう勸めたのだ。かうして自分自身のために、また人に見せるために試驗する時、この力は限りなきものに見えた。わたしはあなたの目の前で、あなたの兄さんから頰打の侮辱を忍んだ。公然とあの結婚を自白した。が、一體なにこの力を用ひたらいゝのだらう。これが遂に分らなかつた。あなたが瑞西で是認してくれた言葉にも拘らず――またそれをわたしが本當にしたにも拘らす、いまだに少しも分らないでゐるのだ。わたしは今でも昔と同じやうに、善をしたいといふ希望を抱くことが出來、またそれによつて快感を味はふことも出來る。それと同時に惡を

も希望して、それからもやはり快感を味はふことが出來る。しかし、その感じは兩方とも依然として淺薄で、かつて非常であつた例がない。わたしの希望は餘りに强味が缺けてゐて、指導するだけの力がないのだ。丸太に乘つて、河を横切る事は出來るが、木つぱでは駄目だ。これは萬一あなたが、わたしのウリイ行に何か希望があるのぢやないか、といふやうな考へを起さないために書くのだ。

『わたしは依然として、何人をもとがめようとしない。わたしは思切つた放蕩をも試みた。そして、そのために力を消耗して了つた。けれど、わたしは放蕩をも好みはしないし、またあの當時も望んではゐなかつたのだ。あなたは最近わたしに注意をそゝいでゐられたが、かういふことが分りましたか――わたしは一切を否定するあの仲間をも、意地惡い目で眺めてゐた。あの連中の希望に充ちてゐるのが、羨しかつたのだ。しかし、あなたの心配は無用だつた。わたしはあの連中の仲間入りも出來なかつた。何ら共通の點がなかつたからだ。單に冷かし半分にも面あてのためにも、やはり出來なかつた。それも、自分が滑稽に見えるのを恐れたからぢやない――わたしはそんな事をびく〳〵する筈がない――たゞ何と言つても、わたしは紳士（ゼントルマン）の習慣を持つてゐるので、そんな事が忌まはしかつたのだ。もしあの連中にもつと憎惡や羨望を感じたら、或ひは彼らと共に進んだかも知れない。實際さうする方が、わたしに取つてどれだけ容易だつたか、そしてどれくらゐわたしが迷つたかは、よろしくお察しを乞ふ。

『いとしき友よ、わが發見したるやさしき寬大なる人よ！　もしかしたら、あなたはわたしに豐